最上勢を突返し、能く引拂ひ申候。後關ヶ原一戰、景勝、米澤へ移り候節、諸家にて招き候へども、望なしと申して、妻子も持たず、寺住持の如く、在鄕へ引込み、彈正大弼定勝の代に病死仕候。連歌を嗜み、紹巴の褒美の句、數多く有之候。此一句も、褒美の句に候。

ひつと齋

謙信、

霜滿軍營秋氣淸　數行過雁月三更　越山併得能州景

任他家鄕念遠征

月澄めばなほ靜かなり秋の海

賤が植うる田歌の聲も都かな

其後、越前細路木にて、

野伏する鎧の袖も楯の端も皆白妙の今朝の初霜

越中の陣、魚津の城にて、初雁を聞きて、

武士の鎧の袖を片敷きて枕にちかき初雁の聲

右の外、一代詩歌最も多し。陣中にて、作多く候由。剛將にて候へども、風雅なる人にて、在京兩度ながら、一條關白兼冬・西園寺右大臣公朝の方へ出入り、三條大納言公光に、源氏・伊勢物語、講釋聞かれ候由。千宗易に、茶道等御學びなされ候由。亂舞・猿樂も嗜み、自身、能・笛・太鼓も勤め候由に候。

不識院殿權大僧都法印謙信心光宗直大阿闍梨

天正六戊寅年三月十三日

四十九年一睡夢　一朝榮華一盃酒

嗚呼柳綠花紅

右尋繁多奉レ存候に付、荒增申上候以上。

慶長二十年三月十三日

寬文九年五月七日〔本ノマヽ〕

右は兩度御尋に付、書上げ申候以上。

上杉將士書上　大尾

上杉家將御尋に付書上

上杉彈正大弼內
清野助次郎
井上隼人正

謙信記

一、寛文九年、日本通鑑、公儀にて御撰に付、弘文院林春齋へ仰付けられ、諸武家記錄差上候節、上杉家へ、信玄・謙信、川中島の合戰御尋ね遊ばされ候間、家傳の記錄又は此時代まで、謙信代に勤め候者共四五人、存命罷在候に付、此老人共集め、記錄と引合せ上り候、覺。

一、天文年中、武田信玄、信州の城々攻め、小笠原信濃守長時・諏訪頼重等、韮崎にて合戰あり、小笠原・諏訪討負け、同國坂木城主村上左衞門義清・高梨攝津守政頼も戰ひ負け、兩人共信州を退く。天文廿一年六月、越後へ來り、謙信を頼み、舊領川中島を取返したき段、謙信へ申候。此外信州侍井上・栗田・清野も越後へ來り、謙信を頼み給ふ。之に依つて、信玄・謙信、合戰始まり申候。

一、天文廿二年十一月朔日、謙信、川中島へ出馬あり。武田信玄も出張あり。其間一里場對陣にて、足輕の迫合計りあり。其間廿七日。謙信方より、平賀宗介へ使番を以て、信玄へ申

越され候趣は、對陣に空しく日を送り、本意無レ之候間、明廿八日は、有無の合戰を致すべく候。其御心得有レ之旨申送り、備を定む。

一、先手　二千騎　長尾平八郎　長尾包四郎　元井日向守
長尾修理亮　青川十郎　安田掃部

一、左横鎗備　諏訪部次郎右衞門　水間掃部

一、右横鎗備　向井包兵衞　長尾七郎

一、二手備　荒川伊豆守　山本寺庄藏　吉田李之助
直江神五郎　小田切治部

一、三陣　謙信　裝束は□笠胴服着け、萌黄緞子袖無羽織、小手さし青竹三尺に切りて持つ

一、旗は、紺地日月一本大四半昆字旗一本

一、弓箭奉行　長尾越前守政景

一、後備　長尾兵衞北條丹後守　柿崎和泉守　大國修理亮

一、小荷駄　齋藤下野守

都合四十九備。一手の樣に九備。人數八千。

一、後備　人數千四百騎　宇佐美駿河守　本庄美作守

謙信、馬乘出し、總軍勢を丸備に押し給ひて、下米宮摺前備。

一、武田信玄、人數二萬三千、十四備にて、是も下米宮摺を前にして備ふ。十一月廿八日、卯の刻より合戰始まり、下米宮摺を追越し戻られ、火花を散らして戰ひ、勝負は區々に之あり、未刻まで、命限りに、互に勝負之なし。兩方、手負・死人夥しく御座候。然る處、謙信方後備宇佐美駿河守・本庄美作守千四百人、筑摩川を渡り、信玄の後へ廻り切つて懸り、信玄の後備へ馳せ合せ戰ふ。然れども甲州勢、前後の敵防ぎ兼ねて、引色になる。宇佐美駿河守、手勢にて横鎗を入れ、突立て〳〵戰ひける。之に依つて甲州勢、敗軍して引退く。甲州勢を上下五千三百討取り候。然る處、此合戰は、謙信負と申され候。謙信の本陣負色に相見え候處、宇佐美駿河守・本庄美作守、後を討ち候により、甲州勢、敗軍仕候により、來るべき勝なれば、謙信は負戰と申され候。甲州衆首武田大坊・板垣三郎・武田飛驒守・穴山相模守・今川加勢衆栗田讃岐・帶兼刑部・宇菅善四郎・朝比奈左京・染田三郎左衛門、右の通り越後へ討取り、都合首數五千三百十一なり。越後勢、討死二千五百人・手負三百人。然れども一手の大將は、一人も討たれず候。是を下米宮摺合戰と申候。天文廿三年、原町合戰と申候。謙信二度目合戰、八月十

日、謙信川中島へ出馬あり。此合戰備、

一、先陣　鶴翼　村上義清　高梨源五郎
一、二陣　川田對馬守　石川備後守
一、三陣　黒川備前守　松原壹岐守
一、左備　謙信
一、右備　中條越前守　新發田尾張守　下條薩摩守
一、左横鎗　加地但馬守　新津丹波守　鬼小島彌太郎
一、右横鎗　岡山孫次郎　須賀但馬守　柏崎日向守
一、弓箭奉行　唐崎左馬助　黒金治部
一、小荷駄奉行　長尾越前守　直江入道
一、後備　齋藤下野守
一、浮備　本庄美作守　松本大隅守　大崎筑前守
一、脇備　甘糟近江守　桃井隱岐守　長井丹後守
宇佐美駿河守　神藤出羽守　平賀志摩守
松本攝津守　安田伯耆守　竹股筑後守
飯森攝津守　二千騎大塚村備
大學

一、脇備　大塚村東備　鳥山因幡守　渡邊越中守翔（かける）

一、旗本備　上條彌五郎　元井日向守　山本寺宮千代　小田切治部　安田掃部

右の通り、謙信馬を乘廻し、備相極め、八月十八日寅刻出陣にて、原町に備へ給ふ。

一、武田信玄は、八月十六日、貝津城に入り、十八日寅刻に出陣にて、雁行の備。

一、先手備　高坂彈正　布施大和守　小田切刑部　落合伊勢守

一、二陣　日向大和守　室賀出羽守　馬場式部少輔　二千五百

一、三陣　眞田彈正　市川和泉　二千五百

一、後備　保科彈正　清野常陸　二千五百

一、弓矢奉行　武田左馬助　小笠原掃部助　四千三百

一、武田信玄公床机居　七千五百人　左　一條信濃守　七宮將監

右　跡部大炊頭　大久保內膳

逸見山城守　小田切主計

山本勘介　駒澤主稅

旗本麾頭　飯富三郎兵衞

南部入道嘉雲　飯尾入道淨嘉　土屋伊勢守

和賀尾治部

一、後備　二千五百人

都合人數二萬五千人。

一、八月十八日寅中刻、村上義清の備より、草刈の者三十人出し、草を刈取り候。甲州勢是を見て、高坂彈正の備より、足輕二百人程走り出で、草刈を取卷き、兼ねて越後の村上義清の足輕頭小室平九郎・高梨政賴の足輕頭安藤八兵衞、此兩人の組四百人、丑刻頃より草伏して、此謀を仕候間、甲州勢、草刈を取卷き候後より起上り、切つて懸る。甲州勢、思ひがけなき事なれば、草刈を捨て逃ぐるを、越後勢追詰めて、百三十人討取り候處に、甲州の先手衆、是を見て大に怒り、馬武者二百騎餘り走り出でて、越後の足輕を突殺し切殺し、馬にて駈倒し、上杉勢の足輕共二百騎餘り、少しの間に討死し、殘る者共、先手の下までなだれ懸る。上杉方先手村上・高梨三千、切先を揃へ切つて出で、甲州馬武者を取卷きて切散らす。然る處に、甲州先手大將高坂彈正・馬場民部・落合伊勢・布施大和守七人、押太鼓を打立て、五六千ほど馳せ出で、上杉勢に切つて懸る。上杉勢、甲州の大勢に切立てられて、散々に色惡しく亂れ、越後勢、三百餘人討死して、村上義清・高梨政賴、既に危く見えしかば、上杉二陣川田對馬守・石川備後、二

千餘馳せ出で、村上・高梨を救うて、甲州勢と戰ふ。武田勢眞田彈正・市川和泉・清野常陸介・保科彈正等、組侍に下知して大に戰ふ。上杉方川田・右川、左備杉原・新發田・黒川・下條、一手に相成る。村上・高梨競ひ懸つて、甲州勢に入亂れ、火花を散らし戰ふ。甲州衆眞田彈正と、越後高梨源五郎と、馬上にてむづと組んで、馬より落つ。源五郎、眞田を取つて押へ、脇板を二刀刺し候處に、保科彈正是を見て、眞田討たすな、彈正を救へや者どもと、大聲に下知して、保科、鎗にて高梨源五郎を突く。源五郎郎等三十人程、源五郎を救に馳せ來る內に、眞田家人□屋彦助といふ者馳せ來る。源五郎は、右の股を切つて落され、終に首を取られける。源五郎家人三十人程、死物狂に甲州勢と戰ふ。保科彈正・市川和泉、汗水に成り戰ひ候間に、源五郎討死し、家人は皆討死仕り候により、上杉勢、殊の外色惡しく相見え候。是を武田勢見て、大に勇み、望月・屋代・根津・仁科・海野・板垣、一手になりて切つて出で、上杉勢を、六七千まで切散らす。上杉敗軍して、追討に大勢討たれ、上杉方加地但馬・新津丹波・須賀但馬・鬼小島彌太郎・柏崎日向守等は、右備なり。橫鎗備より、岡山源次郎・黒金次郎、都合四千餘馳せ出で、武田の荒手と戰ふ。此時は、謙信乘廻し、軍勢を下知せられ、武田勢を切捲り追亂し、武田勢を千二三百〔本ノマヽ〕人討つ。是にて武田方勢ひ拔けて、色合惡しく引退く。是に上杉勇み誇り、右備兼唐崎左馬助・直江入道・本庄美作・松川大隅・大崎筑前・桃井隱岐、此者共四千三百人走り出て、武田勢を切捲り、火花を散らし戰ひける。大軍入亂れ、敵味方の見分けなり難し。此戰の間に、武田信玄御下知にて、犀川に、大綱を千筋ほど張渡し、旗本一條信濃・七宮將監・大久保內膳・跡部大炊助・逸見山城守・小山田主計・駒澤主稅・山本勘介等四千餘、犀川を、何の手もなく忍び渡りに越し、川向に上る。信玄公も、御馬廻三千ほどにて犀川を越え、大野村の蘆茅繁る細道を忍び通り、大野村西天神の森にて、甲州勢集り揃うて、謙信が旗本へ、咄と切つて懸る。謙信には、先手備を乘出し、軍勢に下知致され候て、旗本備は、謙信の居られ候通りに備を守る。中條越前守・黒川備前・杉原壹岐・新發田尾張・下條薩摩・加地但馬・新津丹波、此者共思も寄らぬ處より、越後勢に切つて懸るにより、大に驚き敗軍する。武田勢は勇み誇りて、越後勢を切立て突伏せ、追討に大分討たれ、信玄公は勇み悦び給ひて、謙信を洩らすな、討取れや者共と、團扇にて諸軍に下知して、馳せ廻り給ふ。之に依り甲州勢、十方へ越後勢を追廻り、謙信を尋ね廻る。然る處に越後勢、宇佐美駿河・飯森攝津・松本大學二千騎、大塚村備、

同村東山下へ、渡邊越中守翔・烏山因幡千二百兩備にて、三千五百は脇備にて居たりしが、謙信の本陣切散らされ、敗軍と見て、宇佐美駿河守、信玄公の旗本へ切つて入り、跡部越中は、横鎗に突懸る。甲州勢も、思ひがけなき所より、越後荒手出で、切り懸るにより、甲州勢敗軍仕る。信玄公、旗本備になりて、信玄公を中に引包んで、御幣川へ飛入りて引退く。謙信は、先手備の中に居給ひて、下知せられて戰ひ居給ひしが、本陣大に敗軍し、信玄公は、宇佐美駿河・跡部越中・烏山因幡に揉立てられて、御幣川の方へ、信玄引き給ふを見て、謙信大聲に、信玄は、宇佐美に打負け川を引く。追詰めて首を取り候へ。共に川へ乘入れよ者共とて、長光兼光とも申し候長さ二尺九寸の刀を下げ、諸鐙にて追ひ給ふ。謙信と馬を竝べ、信玄公を追ふ者は、上條彌五郎・長尾七郎・元井日向・小田切治部・北條丹後・山本寺宮千代・青川十郎・安田掃部、是等信玄公を追うて、御幣川へ乘入りて、甲州勢を、川中にて切捨つる。信玄公は、近習三十騎程の中に引包んで、川を越し給ふ所に、謙信は馬を乘付けて、備前長光の刀を持つて、信玄を川中にて切付け給ふ。信玄公は、軍配にて請け給ふ。然れども二箇所手を負ふ。信玄の近習、餘り嶮しき事故、鎗にて謙信を叩きし所に、馬の三寸に當る。是にて謙信の馬、二間計りも

飛び候。其間に、信玄公も隔り、謙信物別れ致され候。甲州衆も謙信と□□□、十八九人程にて附廻し切つて懸る。謙信是を事ともせず、切掃ひ〳〵、難なく引退き給ふ。甲州勢引後れ候者共を、謙信、川中にて十二人まで切捨て、四方に眼を配り、川中に馬を控へ居給ふ處、武田信玄の弟武田左馬助信繁、後陣に居候が、信玄公手を負ひ給ふと聞きて、六七騎程にて、河端へ馳せ來り、謙信を見付けて言葉を懸け、大音揚げて、川中に居給ふは、大將謙信と見申候。某は、武田左馬助信繁なり。我等と勝負せられ候へと申さる。謙信は是を聞き給ひ、是は謙信の郎等甘糟近江守にて候。貴殿の敵には不足なるべし。勝負は御無用候へとて、謙信馬を川端へ乘上げ給ふ所へ、左馬助馬を乘付けて、謙信を一打と、拜打に打つ太刀を、謙信請けながら、馬をもじらせ、片手なぐりに、左馬助が高股を切落し給ふ。左馬助馬に耐らず落ち給ふ。村上義清、謙信の敵と、太刀を翳して馳せ來りし所に、左馬助の馬より落ち給ふを見て、村上、馬上より飛び下り、左馬助信繁の首を取る。

甲陽軍記には、村上義清・武田左馬助太刀打にて、左馬助打負け、村上首を取り候樣に、御座候へども、上杉傳記には御座なく候。謙信と戰ひて、高股を切つて落され、村上馬上よ

り飛び下り、左馬助が首を取り候段、老人共能く存じ罷在候。

一、甲州勢、散々敗軍あり。信玄、三箇所手を負ひ、左馬助信繁・眞田彈正討死。板垣駿河・小笠原若狹、二三箇所も手を負ひ候故にや、甲州勢引退き、八月十八日卯の刻合戰始まり、申の刻迄、十七度合戰仕候內、八度信玄の勝、九度謙信勝、終大勝にて、甲州勢敗軍致され候。謙信は、翌十九日、善光寺陣取り、手負を越後へ遣し、二十日、引拂ひ、越後へ歸り申され候。手負千九百七十人、討死三千百十七人。甲州勢二萬五千內、手負二千八百十九人、討死三千二百十六人。

一、弘治二丙辰年三月廿五日、合戰は信玄公、謙信三度目。信玄公、山本勘介に御相談御手立に、甲州勢六千程、宵より戸神山へ隱し置き、拔、謙信の先手へ入亂れ、合戰最中、戸神山の隱し勢、謙信の後より、凱聲を上げて、謙信の旗本を切崩し、謙信、筑摩川を渡り、引退く處を、河中にて、討取るべきとの事にて、戸神山へ、廿四日忍び〳〵に、向勢保科彈正・市川和泉・海野常陸・多田淡路・粟田淡路・布施大和・河田伊賀、是等大將として六千餘り、戸神山に、總先手の始るを待ち居る。

一、謙信、廿四日の晩方、井樓にて、信玄の陣所を、遠見して居給ふに、信玄の陣中夥しく煙立つ。是を見て申されけるは、信玄明朝早く、取懸り申すべき仕度なり。齋藤下野・宇佐美駿河・色部修理を呼び給ひて、此事相談致され候處に、戸神山の方より、山鳩・鴉飛亂れけるを、又申されけるは、信玄明日我等を、前後より立挾みて、討つべしとの行あり。我にも一行して、信玄を討取るべし。信玄を討洩らすとも、見よ旗本は、洩らさず討取るべし。[本ノマヽ]今度なり。先手に功者の入る合戰なれば、宇佐美駿河・柿崎和泉加はり候へ。謀を諸人に知らせ、備を定め、腰兵糧一人に三人前に支度ありて、其上、亥の刻より出陣仕候。

一、先手四千　宇佐美駿河　柿崎和泉　村上義清　色部修理　長尾遠江守　甘糟備後
一、二陣　謙信　甘糟近江　本庄美作　柏崎彌七郎
一、後陣　齋藤下野守　新發田尾張守　本庄彌七郎　黒川備後　唐崎孫次郎
一、横鎗備　新發田尾張守
一、右同備　加地但馬守　中條越前　竹股筑後
一、後備　松原壹岐守

謙信は、木綿胴服の上に、萌黄綴子の袖なし羽織、白布にて鉢巻、波原行安の長刀をさげ、青竹三尺切つて、腰にさし給ひて、先手に乗入る。旗本勢は、謙信の居給ふ如く、遙後に備へ居る。寅の刻に、謙信四千の人數、信玄の旗本へ、無二無三に噇と切入り、信玄公本陣思ひ寄らず、逆寄に、謙信の寄せ給ふとて、周章騒ぐ所へ、謙信の先手早や切入つて、切伏せ突伏せ切散らす。然れども、武邊第一の武田武士内藤修理・武田刑部・小笠原若狹・一條六郎・飯富三郎兵衛等取合せて、上杉勢を防ぎ戰ひ、謙信の先手粉骨を盡し、武田勢と戰ふ。謙信は、信玄公を心懸け、敵中を乘廻り給ふを、武田勢、見知りたるや、又は能き武士と思ひけるにや、敵三騎馬を竝べ、太刀を揃へて切つて懸る。此折、本庄越前廿六歳、謙信の後にて戰ひけるが、謙信へ、敵三騎打つて懸るを見て、本庄越前、謙信の脇を出で、彼三騎に向ふ。謙信是を見給ひて、本庄と同樣に打つて懸る。敵を、行安の長刀にて、車切りに切落し、餘る長刀にて、一騎の敵、弓手の腕を打落し申され候。本庄も、殘る一騎を討取る。武田勢武田左衛門・穴山伊豆守・高坂彈正・南部喜雲齋・小山田主計・眞田兵部・根津山城、是等四五千程、荒手にて、上杉勢を切捲り、上杉敗軍仕り、上杉横鎗衆新發田尾張・加地但馬、左右より鎗を入れ、甲州勢を突立つる。甲

州勢亦突立てられて引退く。謙信、旗本備へ下知ありて、旗本を以て切入り、信玄公の備、都合十二備切崩し、喚き叫んで切散らす。此時に甲州勢諸角豐後・板垣駿河守・山本勘介入道・初鹿野傳五郎・小笠原若狹守・一條六郎等、都合三百餘人討死す。扨、戸神山に忍び居たる甲州勢、合戰始まるを待ち居けれども、沙汰もなく、越後勢は一備もなし。扨は謙信の軍法にて、出拔にせられけると、呆れ居たりしが、川中島の方にて、喚き叫ぶ聲を聞きて、六千の甲州勢、本陣にて合戰ありとて、一騎駈に馳せ來る。信玄公是に力を得給ひ、旗本備色合よく、越後勢を前後より挾みて、揉立て防ぎ戰ひける。越後勢、數刻の戰に草臥れ、兩方より揉立てけるより、敗軍仕候。謙信、總軍勢を卽時に引上げて、丸備にして引退き給ひけるを、武田勢是を見て、謙信は引きけるぞ、追打にせよやとて、保田・落合・河田・小田切・栗田・多田三八郎・布施大和・海野常陸介等勇み誇り、備を亂して馳せ來る。謙信是を見給ひて、青竹振廻し、人數を遣し給ふ。車返しといふ軍法にて、後備より先備迄、くるりと立備へ、大返しといふものにて、武田勢の、備もなく追ひ來る勢の中へ乘入りて、四方八面に切散らす。信玄公の旗本を目がけて、越後勢馳り廻る處、甲州飯富三郎兵衛・内藤修理・七宮將監・下山内匠・小田切主計・

跡部大炊介四千計り、噇と切つて出て、越後勢を防ぎ戰ふ處へ、甲州勢根津山城は、海野常陸介横鎗を入れ、越後勢を突立て〳〵戰ふ。之に依り、越後勢敗軍仕り引退く時、越後浮勢中條越前・神保筑後・杉原壹岐二千五百人、初めより合戰見物して荒手にて居たりしが、爰ぞ我が請取る所とて、武田勢の中へ、一文字に馳せ入りて戰ひける。武田勢敗軍仕り、信玄公も引退き給ふ。竹股・中條軍勢を制して、一人も追討ちさせ申さず候。是より合戰相止み、謙信犀川を渡り引退く。宇佐美駿河守、手勢二千五百人にて殿仕り、越後へ歸陣仕候。此合戰も勝負付かず候。夜の内三度、夜明四度、都合七度合戰仕候。

一、信玄公方　討死四百九十一人、手負千二百七十人。

一、謙信方　討死三百六十人、手負千廿二人。

一、弘治二丙辰年八月廿三日、謙信、又川中島出馬致され候。四度の合戰、上野原合戰と申候は、此合戰にて御座候。當年三月も、信玄公、謙信合戰仕候へども、信玄公に出合もなく、慥なる勝負も見えず、無念千萬なる事。何卒信玄公に出合ひ、勝負致したしと、申され候へども、信玄公謀にて、信玄公に似たる法師武者七人拵へ置き、何れ信玄公と知り難く仕立てければ、卒爾に働きもなり難し。凡は信玄公を見知りたり。何卒手詰の勝負かけたしとて、今度亦、出陣仕候。

一、先備　村上義清　石江采女
一、二實〔陣カ〕　川田對馬　滿願寺隼人　石坂與五郎　長井丹波
一、三陣　謙信　大川駿河　松川大隅　須賀攝津
一、左備　齋藤上野　青川十郎　田原左衞門　下山彌七郎　朝日隼人
一、右備　本庄美作
一、横鎗　石川備後　松本大學
一、横鎗　安田伯耆　山本寺伊豫
一、後備　千坂對馬　島津卜可齋
一、脇備　長尾越前守　長尾遠江　宮島參河
一、浮備　宇佐美駿河　鬼小島彌太郎

謙信、人數都合二萬五千。然れども謙信は、八千の人數を以て、信玄公と戰ひ、能しと申さる

る人共、信玄公には、いつも二萬五六千にて出陣御座候故に、家老共又は宇佐美駿河守逢ひ、意見申され候間、二萬三千に仕候へども、謙信は八千の人數を遣ひ候とて、殘勢は後に差置き、脇備・浮備などと申し差置かれ、多分は先手備・謙信旗本にて合戰致され候。脇備・浮備、合戰を見物仕居り候て、越後勢危き時分は、横を打ち後を取切り、粉骨を盡し戰して、勝戰にても、謙信は殊の外不機嫌にて、勝戰とは申されず候。手廻八千にて合戰仕候時は、負にても機嫌にて、合戰咄致され候。脇備・浮備勢の者共、骨折損に御座候へども、味方難儀に及び、又は戰ひ勞れ、危き時分は、謙信下知なしに馳せ出で、合戰仕候。然れども、上州・越中・加賀・能登などにては、終に脇備・浮備など申す事御座なく候。武田信玄は强敵と、謙信存ぜられ候故、家老共の意見に付き給ひ、人數も多くは召連れ申され候。先づは八千にて、合戰を始め申され候。

一、信玄公には、二萬五千の人數にて出張なされ、早速忍・物見を、謙信陣近く遣されて、陣中を見て、信玄公へ申上候は、今度謙信には、永陣と見え申候由申上ぐる。信玄公、聞召して、何とて永陣とは見定め候かと、御不審なされ候。物見申上候は、謙信の陣小屋に、夥しく薪

積み置き候と申上候。信玄聞召され、御うなづきなされ、即刻使番を召し、仰付けられ候は、謙信陣小屋に火事あるべし。必ず此方より一人も人出すべからず。若し相背き、一人にても出候はゞ、其者一類迄、曲事申付くべく候。堅く相守り候樣に、觸れ申すべき旨、仰付けられ候。扨、廿四日晩方になり、案の如く、謙信の小屋に火事有之候。信玄公、井樓に登り、遠見なされ御覽の處、火事もしめり候へば、越後勢五六十程、草の中より、弓・鎗・長刀を持つて出づ。甲州勢是を見て、扨々信玄公の御推量、鏡に向ふが如くなり。誠に名將と感じ入り候由。

一、信玄公の御計には、廿五日朝、馬三匹取逃し、其馬を、謙信陣小屋の方へ追ひ來る。謙信の足輕共是を見て、信玄の陣中より、馬放れ參る。いざや取つて德にせんといふ。謙信、此時井樓に居、遠見して、馬の放れ來るを見給ひて、本庄平七を呼び申され候。只今、信玄方より、馬追ひ放し、此方へ飛び來るべし。其儘捨置き候樣に、諸軍勢に觸れ申すべし。此方より、一人にても出て候はゞ、急度曲事申付くべし。使番急ぎ觸れさせ候へと、大音に申付けられ候。然る處に、馬、野山を走り廻る。然れども謙信方より、足輕一人も出でず候。信玄公、夜の內に、足輕三百人・騎馬五十程、草伏に隱し候て、謙信の足輕共、馬取りに出で候はゞ、討取る御

計なり。謙信より、一人も出で申す者なく、信玄方は、草伏の者共、手を空しく起上り、引取り候。信玄の仰には、謙信は、拠々功者なる弓取、中々謀にては、合戦はなり難しと仰せられ候由。扨、信玄公、如何思召し候や、廿五日晝過より、爰の陣引拂ひ給ひて、廿五日夜は、上野原に野陣を張り、嚴しく用心仰付けられ、四方に篝を焚き、夜廻り陣取御座なされ、謙信は、信玄の引退き給ふを遠見して、總人數二日分の兵糧支度にて、廿五日酉の刻に、信玄の跡を慕ひ、廿五日の夜中、人數押し仕りて、廿六日卯の刻に、上野原信玄公の陣へ押寄せ、村上・石江・石坂、関の聲を上げて、信玄公の備に切つて入る。信玄公の方にても、一二を定め取合ひて、鎗を合せ出て、火花を散らし戰ひける。謙信方捲立てられ、亂れ散る。甲州勢、勇み進みて、色合三段に謙信勢を追付け、謙信二の手川田對馬守・滿願寺隼人・長井丹波、人數を押出して、先手に入り替り戰ひけるが、信玄公勢きわほこり勇み強く、丹波・隼人・對馬、汗水になり、苦戰仕り候處へ、謙信の横鎗の者石川備後・松本大學、爰を我等の請取る處とて、噇と横鎗を入れ、信玄勢を突立つる。甲州勢、散々に打負け引く處を川田・滿願寺・長井・石川・松本、一手になり、甲州勢を追討に仕候。甲州勢高坂彈正・内藤修理、押太鼓を打立て、三千餘入替りて、越後勢

と喚き叫んで戰ふ。越後勢色合惡しく、亂れ足になり戰ひける所に、甲州原大隅・仁科・高梨・海野・望月等、三千程にて切つて入り、越後勢を取包みて討取る。越後勢、大勢討死仕候處へ、越後脇備長尾越前・長尾遠江守・宮崎參河守、甲州勢六七千の中へ、二百五國（本ノマヽ）にて切つて入る。安田伯耆守・山本寺伊豫、横鎗に突き入れ戰ふ。甲州勢も亦、飯田・甘利・土屋・室賀一葉軒・日向大和守二三千計り、火花を散らし、勝負區々にて、謙信の備にて、合戰にも構はず、初めより、山一、謙信内宇佐美駿河守は、手勢二千五百にて、謙信の備にて、合戰にも構はず、初めより、山の手に備を立て、合戰を見物仕り罷在候ひける。越後勢、旗色惡しく相見え、甲州勢も、過半四方にて取合ひ最中にて、信玄公の旗本備、小勢を察し、駿河守手勢五百人、二備に仕り、信玄公の旗本へ切つて入る。信玄公の旗本も、兩手へ向ひ、防ぎ戰ひけるが、駿河守、山の手より落ちかけ、切込みけるに、信玄公の備、殊の外亂れて、備立て直す事なり兼ね候。駿河守、敵陣へ乘入り、信玄を洩らすな、討取れや者共と、大聲にて馳せ廻る。信玄の旗本勢、本庄美作・下山彌七郎・朝日隼人・齋藤下野守・田原左衞門、備を亂し、信玄を遁すなと馳せ廻る。之に依つて信玄公、引退き給ふ。甲州勢、本陣の敗軍を見て、皆々敗軍して引退く。追討に甲州勢を

討取り、越後勢、勝鬨を揚げて引退き申候。

右の合戰は、八月廿六日卯の刻に始まり、未の下刻まで、都合五度合戰あり。一番合戰は、信玄公勝。二番目謙信方勝。三四番信玄公の勝。五番目終合戰は、謙信方大勝に罷成候。

一、信玄公方、討死千三十三人。

一、謙信方、討死八百九十七人。

一、永祿四年酉八月廿三日、謙信、川中島へ出馬致され、西條山に陣取り、下米宮海道取切つて、西條山の要害に、赤坂山の下より出づる水の流れを引取りて、堀の如く仕り、苦し西條山を攻め候とも、足場惡しく拵へ置き、謙信には、何卒今度、信玄に出合ひ、勝負を決したしと申され、白布にて鉢卷し、木綿胴服・卷小手をさし、備前兼光長三尺の刀を帶し、岩手栗毛と申す早馬に乘り、先手に交り戰つて、信玄公を心懸け、八年前に、信玄を打洩らす事、無念至極、今日は是非出合ひたしと申され候。八月廿九日、信玄公、貝津城着陣にて對陣あり。足輕迫合も無ヽ之、陣取り給ひて、九月九日の夜、信玄公、潛に總軍勢を引拂ひ、貝津城を出で、川中島に備を立て給ふ。物見走り來りて、此段申す。謙信之を聞き給ひて、宇佐美・齋藤・柿崎・直江

大和・本庄美作・岩井備中、此古老の者共軍評定致され、備を定め、十日亥の刻に、謙信總軍勢押出し候て、川中島に陣取り給ふ。此時の備、

一、都合三千五百。西條山に殘る。　井上兵庫清政　島津左京亮入道　須田相模守親滿
　高梨攝津守

一、川中島にて備次第は、

一、筑摩川端貝津城押　本庄越前守繁長　新發田尾張守長敦　鮎川攝津守勝利
　大川駿河國重

一、先備　柿崎和泉守景良

一、二備　北條丹後長國

一、三陣　謙信旗本　川部豐前大熊備前長井丹後
　岩井備中城織部元井日向守
　齋藤下野朝信
　長尾越前政景

一、左備

一、右備

一、左横鎗　色部修理長實　山吉孫次郎親景
一、右横鎗　本庄美作度慶　唐崎孫次郎吉俊
一、後備　長尾遠江藤景　鐵孫太郎　中條梅坡齋
一、浮備　大貫五郎兵衞　宇佐美駿河定行　柏崎彌七郎
一、軍奉行　直江大和實綱　安田治部　甘糟近江守
一、浮勢

一、右の通り備へ、九月十日夜四時に、總勢押出して備へ陣取り、信玄公にては、夢にも知るものなく、信玄公より、物見十七騎、夜子の刻時分に、うか〳〵と齋藤下野守備へ乗懸け來りて備を見、大きに驚き、馬を引返し逃げ歸るを、下野守手の者追懸け〳〵、馬より突落し、十七騎を洩らさず首を取り申す。下野守者共三人、深手を負ひ候までにて、亡死候者は御座なく候。謙信、是を聞き給ひて、使者を以て、先手柿崎和泉守に、早く信玄公本陣へ切込み候へと、下知有〻之候。和泉守、卽時に信玄の陣に切入る。信玄方にて、合戰は、夜明と思ひ居ける所へ、切込み候故に、陣中驚き騷ぎ、取合兼ね候へども、武勇勝れ候武田勢にて、弓・鐵炮打出し防ぎ、早や飯田・高坂等乘出し防戰、段々甲州勢大軍になりて、柿崎叶はず引退く。北條丹後・齋藤下野守・長尾越前・本庄美作・唐崎孫次郎四備、一度に馳せ出で、甲州勢を切立て〳〵、火花を散らして戰ひけるに、謙信、信玄公に參けいせんとて、自身先手を致され、旗本勢を以て、信玄公の本陣に切つて入る。信玄公の備十二段、切捲り、謙信は、信玄公を尋ね、敵中を馳せ廻り馳せ廻り、尋ね給へども、信玄公の樣なる法師武者八九人も相見え、何れを信玄公とも見屆け兼ね、謙信飛鳥の如く乘廻り、切散らし〳〵、信玄旗本敗軍仕り、筑摩川廣瀨方へ逃行く。謙信は定めて信玄公も、筑摩川方へ引退き給はんとて、謙信も筑摩川へ馳せて、信玄公を追ひ給ふ。甲州勢を追打に仕候事數知らず。信玄公は引違ひて、犀川を渡り、引退き給ふ。謙信、此事を後に聞き給ひ、信玄は誠に名將なり。大勢の味方の引く方へ引退かずして、小勢にて、犀川の方へ行きける事、我等は、信玄の智慧には及ばずと申され候。

一、謙信は、信玄公を追うて、筑摩川の方へ行き給ふに、跡より信玄公の御嫡男太郎義信、二千餘にて、謙信の跡より切懸け給ふ。謙信の後備長尾近江・鐵孫太郎・中條梅坡齋、取合せて、太郎義信と戰ひ居る。長尾・中條・鐵、散々に打負け、敗軍仕り候處に、色部修理・山吉孫次郎馳

合せて、横鎗に突入る。浮勢直江大和・安田治部、馳せ合せて、甲州勢を切捲り、之に依り太郎義信、引き給ふ。

一、謙信は、前後の合戦に打勝ち、總軍原町に休息仕り、腰兵糧をつかひ居り給ふ。然る處、何方に隠れ居り給ひけん、太郎義信は、百騎程にて、腰差抔も輕く、忍びやかに、謙信の油斷の處へ、俄に切入りて、謙信の本陣へ、急に駈入り給ふ。謙信方は、丑の刻より合戦にて草臥れ、殊更油斷等仕り、陣中騒動して、取合ひ兼ね候。然れども、先手組の者馳せ出し、切合ひ防ぎ候内に、柿崎和泉、鎗取つて突取りて、皆々參り、急なる事にて、馬に乗遅れ、歩行武者にて戰ひ候故、甲州武者は駈倦まされて、大勢討死仕候。信田源四郎義時も、馬武者に駈倒されて倒れけるを、甲州武者鎗付くる處を、刀にて、鎗の千段巻より切折り、臥し乍ら敵の馬の前足を擲りけるにより、敵を馬より落ちける内に、源四郎跳ね起き、敵に切付くる所に、敵人一騎馳せ來りて、源四郎を鎗にて突倒して、首を取らせ討死する。大川駿河守、歩行立にて合戦し、敵二騎取廻して、終に大川駿河守も討死す。謙信は家の重寶五挺の内、第三番目の鑓にて合戰し、首より突折り、後には波平行安の長刀を取つて、手を砕いて切つて廻り給ふ。然

る處へ、直江大和・安田治部・柿崎彌七・甘糟遠江守、三千餘馳せ來りて、武田義信を取捲きて、切込み突入り戰ふ。義信計りに打ちなされ、叶はずして引退き給ふ。謙信勢、殊の外に草臥れ勞れければ、追討もならず物分れ仕り、謙信は歯噛をなして、年若なる者に仕懸けられ、殊更、我が勢油斷致候事、我等一代の疵なりと、至極無念に存ぜられ候。流石は信玄が子とて、我等に仕懸けける。然れども義信、是を自慢に弓取らば、越度出來せん。信玄が如くしまり、遠慮を主として弓取らば、能き大將となるべしと、申され候。

一、永祿七年、信州の押、野尻城主宇佐美駿河守定行・上田城主長尾越前守政景生害にて、謙信仕置見分、信州へ出□あり。之に依り信玄公も、早速出陣にて、十日對陣有りて、足輕迫合計りにて別條なし。扨信玄公御一門・家老衆相談にて、信玄公へ種々諫言して、川中島四郡を、年々御爭ひ、今年まで十二年の間、大合戰・小迫合、毎年相止み申さず候。龍虎の勢にて、勝負御座なく候。貝津城附領計り、此方へ御取になされ、川中島四郡は、謙信へ遣され候て、境を相定めなされ、互に亂れなく、信玄公には、駿河口・關東口・美濃口へ出馬なされ、手廣め然るべく存ず奉候。纔の川中島四郡に御隙御取り、剛なる謙信と御取合、空しく年月を御送り、外

の國々は愚になされ候事、返す〳〵無念至極。今年迄謙信に御隙入り候程にては、外の國々、餘程御手に入り申すべく候へども、信玄も御得心なされ、各存寄り、尤も至極せり。我等も其通り心得、謙信との爭ひ、相止むべしとは思ひ候へども、先年和睦破れ已後互に和睦すべき品もなく、我等方より和を乞ふ事は、中々以て所存なし。謙信も亦、和談なる事にてなし。依つて止む事を得ず、合戰に及ぶ。然れども各意見、尤千萬なり。さり乍ら、今年迄十二年爭ひ、隙取りたる川中島を、何の分もなく打捨て、謙信に相渡す樣もなし。互の運のためし、〔本ノマヽ、安三〕を出し、組打の勝負次第、川中島を何方へなりとも、領すべしと思ふと仰せられ、內藤・馬場・甘利等之を承り、恐れ乍ら御尤に奉〻存候。謙信へ、思召し候通り仰遣され、兩軍の間にて、組打勝負御覽なさるべく候とて、右の趣、使者を以て謙信へ申來り候。謙信、聞召し候て、家老共に申され候は、信玄が口上の趣、扨々若輩なる申樣なり。讒の四郡にても、鋒先にて取つてこそ面白きに、組打の勝負次第とは、寺勝負の樣にて、他國の聞えも如何なり。品を付けて批評すへし。兎角合戰の勝負に任すべきと申されけるを、直江大和・齋藤下野・竹股參河、一統申しけるは、信玄の望の通りになさるべく候。大和が郎等に、大力の者一人、下野が郎等に、

早業の者も、人竝より勝れ候者、一人御座候へば、御前へ召出され、御目鏡次第、一人御出し、組打勝負次第、川中島を御隙明けられ、北國殘らず御治國なされ、關八州を御切隨へ、上方へ御攻上り、天下に御廣め然るべく存候。纔の川中島、御隙入り候間、兎角信玄所望に御任せなさるべき由、再三諫言申候に付、謙信漸々納得にて、信玄への返答に、御所望に任せ、郎等一人宛、兩陣の間へ差出し、組打勝負次第に、川中島領地境を相定め、以後意亂不〻有〻之候。明十一日午の刻、御家來一人差出され、此方よりも一人差遣すべし。外には一人も御加へあるまじく候。只二人の勝負に相極め申す事にて候。此通り返答申遣され候。扨謙信、兩人の郎等を召出され、兩人をつく〳〵と眺め申され候て、下野が郎等長谷川與五左衞門然るべく候。明日出でて、組打の勝負すべし。信玄方にては、大力の者これありて、夫を賴に、組打勝負望みしと見えたり。さもあらば、與五左衞門が早業にて勝つべしと思ふとて、與五左衞門にぞ相極めける。十一日の朝、謙信、與五左衞門を呼出され、今日の勝負は、後代迄名譽を殘す者なり。能々せよやとて、勝栗・熨斗・鮑給はりて退く。與五左衞門、程なく午の刻に至れば、與五左衞門勇んで罷出で馬に乘り、馬上にて名乘りけるは、謙信が家老齋藤下野守朝信が郎等長谷

川與五左衞門元連と申す者にて候。御覽の通り小兵にて候へども、承り及び候安間殿へ、見參仕るべしといひ、今日は晴なる組打勝負にて御座候へば、加勢・助太刀、互にあるまじく候。若し加勢・助太刀候へば、末代迄、弓矢の恥辱なるべしと、大聲に申しける。安間彦六、馬乘り馳せ出で、何の言葉・會釋もなく、大の男、馬を乘違へて、與五左衞門と、馬上にてむづと組み、兩馬の間に落ちけるが、安間は大力といひ大男、與五左衞門は小男なれば、何の手もなく、與五左衞門を取つて伏せけるが、如何にしてか與五左衞門、手の下より抜け、安間の後より、仰向に引倒して、其儘一刀刺して、首を取るより早く差上げて、首御覽なされ候へ。長谷川與五左衞門元連と申す者、組打の勝負にて、安間殿の首取つて候と、名乘りければ、上杉勢同聲に、仕つたか長谷川、□たるや與五左衞門と、感じ申し候へば、甲州勢にて腹を立て、七八百騎、木戸開き切つて出でんと犇きけるを、馬場民部・内藤修理等馳せ出で押留めける。信玄申されけるは、鬼神の如くなる安間が、あの小男に仕負け候事、味方の運惡しきと、忽に合戰始めて、越度を取り、殊更約束違へて、此方が切懸け候ては、永き弓矢の名折なり。一人も出づべからずとて押留め、兼ねて定の通り、組打勝負次第と申し候へば、川中島四郡は、謙信へ相渡し申候。今日より謙信、御心次第なさるべく候とて、互に家來三十騎づつ出し、境目を立て、信玄・謙信共に馬を入れ、是よりして信玄・謙信の弓箭取合、相止み候。扨又謙信、長谷川與五左衞門を呼出され、今日の手柄早業の働、褒美致され、盃給はり、千貫の折紙を出し、直參に申付けられ候。齋藤下野には、信國の太刀給はりける。川中島四郡は、村上義清・高梨政頼舊領なりとて、兩人へ返し給はる。

寛文九酉年五月

上杉内
清野助次郎
井上隼人

右川中島合戰の次第、酒井雅樂頭忠清〔奉イ〕〔原本字缺一〕にて、上杉家へ御尋ねなされ候に付、上杉家記錄、又は此節迄存命の者四五人御座候故、其者共集め、記錄にて引合せ、穿鑿吟味仕り、繕ひ虚言御座なく、斯樣書附け差上げ申候。

右は此度日本通鑑御撰び仰付けられ候間、御尋ねなされ候。

一、南光坊天海大僧正、御物語なされ候は、近年甲陽軍といふ書物出で、世間廣まり候を見候に、川中島合戰の事、年月・場所に相違あり。殊更信玄・謙信太刀討の時、信玄は床机に腰か

懸けながら、謙信が太刀を請流し候と有」之、大なる虚說。其時分我等は、會津不動院に居り、信玄の祈禱致し、年月懇に申され候間、天文廿二年八月、甲州へ檀那廻りに行きけるに、信玄には、川中島に、謙信と對陣の由、留守居の者申す故、八月十七日、我等も川中島へ行き、信玄の陣所へ見廻る。信玄、早速對面致され、遠方見廻り、悦びの段申され、一兩日中、謙信と合戰懸け候間、貴僧は早々歸られ候へ。來春甲州にて、緩々對面致すべしと、申され候に付、暇を乞ひ、陣小屋立出で候へども、道にて思ひけるは、大檀那、一兩日中、大事の合戰取結び給ふを聞きながら、出家にても、聞捨に歸る道理なしと思ひ、下米宮に一宿致し、翌十八日、合戰始まり候節、山へ登り見物致しけるが、勝負幾度も之あり、十八日の卯の刻に合戰始まり、晝八時頃には、信玄大勝と見え、謙信が本陣へ切込みて、謙信、本陣亂れて、信玄が旗、殊の外進み、諸勢も勇み誇り、八方へ謙信勢を追行きける所へ、大塚村の方より、押太鼓を、成程靜に打ちて、誰とも大將は知れず、千五六百騎程出で來る。是を甲州勢見ると、亦大きに亂れける處へ、早や敵乘入りて、合戰ある處へ、又謙信の內渡邊越中といふ者、何方よりか馳せ出で、勢の程六百騎もあらん、此新手ども、左右より信玄を揉合せ、挾打に甲州勢を打つ。之に依り、信玄勢

四方へ散り、信玄も、二三十騎程にて、御幣川へ乘入れて、引退く處へ、謙信は、白布にて鉢卷して、飛ぶが如く馳せて、信玄を目に懸け、御幣川へ乘入れて、信玄へ切付くる。信玄、手に、團扇持ちて請け給ふ。謙信、疊み懸け切り給ふ處へ、信玄が供せし侍共、鎗にて謙信を叩くと見えしが、兩方押隔り、物別れせられける。扨々烈しき戰にてあり。其夜、信玄の陣所へ、我等見廻に行く。信玄は驚きて、御坊は歸られ候と存候へば、逗留めされて候とて、褒美あり。其時信玄、手を負ひ、寄懸り居られ、我等に申すは、源平兩家の戰より、大將と大將の太刀打、承り及ばず。近代稀なる事。扨々御手柄なる御事とほめ候へば、信玄顏色變り、殊の外機嫌惡しくなり申されけるは、信玄も太刀打仕りたるが、我等に非ず。信玄が眞似さする法師武者なり。鎧甲、我等同樣なる仕立なれば、外目より知らぬ者は、信玄と申すべきなり。中々我等にてはなし。必ず〳〵奥州伊達・佐竹會津抔にて、信玄・謙信と太刀打仕りたる抔と申され候事、無用なりと申されて歸られ候。然る由申され候まゝ、暇を乞ひ、會津へ歸り申す。我等山へ登り、御幣川見下し、信玄も謙信をも能く見知り、太刀打の次第、合戰の始終、見物せしに、當代世間に出で候甲陽軍に、迂拙を書きたると御咄なされ候。江戶御城にて、或時御

旗本衆大勢寄合ひ、古戰の話有之、横田甚右衞門其座に居り、南光坊も上座に御座なされ、御旗本衆、國々の合戰大將衆の智謀咄になり、横田甚右衞門噺しけるは、近代の大將衆多く候内、武田信玄公程なるはあるまじく候。智謀といひ、締り能き大將、後代迄出來まじく候。川中島合戰の時、上杉謙信、先手の内に入りて、信玄を狙ひ廻る。信玄、八方へ目を配り、床机に腰懸け、軍勢の甲乙を正し居給ふ。謙信一騎、鹿毛馬に乘り、無二無三に信玄へ切懸くる。信玄、床机に腰懸け居ながら、謙信の太刀を、團扇にて請流し御座候體、天晴大將に、天下の譽事に致候と、噺し申されけるを、南光坊聞召して、甚右衞門を御叱りなされ候て、甚右衞門未生已前の事、何とて存ぜらるべき。我等は、合戰能く見たり。八月十七日、川中島信玄陣所へ見廻り、翌十八日、合戰之あり、雙方御幣川へ乘入り、川中にて謙信乘付け、信玄も、太刀拔合せたく思召されつらんが、片手にて馬を控へ、片手團扇を持たれければ、太刀に手を懸くる隙もこれなく、團扇にてうけ、二箇所淺手負ひ給ふ。信玄郎等三十人程、鎗持つて信玄を圍ひ、引退く中へ、謙信乘付けて切付くる。信玄の内衆、此時、謙信を鎗付け候事は、餘り烈しき事故にや、突く事せずして、鎗にて叩きける。

下に見下し、能き見物致候と、仰せられける。

傳に曰、南光〔坊一字脫カ〕天海大僧正慈眼大師と申し奉るは、足利將軍義澄公御末子。御母は會津蘆名盛高の娘にて、義澄公薨去後、御母と會津へ下向なされ候て、御出家あり。寬永十九年壬午年十月二日、百三十四歲、圓寂なり。

一、江戸に於て、弘文院林春齋門弟千賀源右衞門と申す者召され、〔此源右衞門と申すは、酒井忠清酒井修理大夫殿家來、〕へ參られ、申上げられけるは、今度本朝通鑑撰び申候に付、諸家の記錄御渡なされ候處に、信玄、謙信川中島合戰次第、年號月日、甲陽軍と大なる相違御座候。上杉家より差上候記錄を用ひ申すべきや、甲陽軍用ひ申すべきやと伺はれ、雅樂頭殿挨拶は、相談を遂げ候て申入るべき由、仰捨てられ御〔歸ノ字脫カ〕城。此事、御沙汰御座候節、御一座に、信玄衆大勢詰合ひ、其を申されけるは、今度上杉家より書上げ候通り、通鑑に記し申候はゞ、日本に流布仕候甲陽軍鑑、僞書に罷成り、甲州流軍法迄、僞に相成るべしと、軍鑑編立て候者、近代の僞撰には御座候へども、高坂彈正と御座候。兎角甲陽軍も廢り申さず候樣願奉ると、御旗本衆大勢願なり。之に依り雅樂頭殿、林春齋へ仰渡され、是れ今流布せし甲陽軍廢らざる樣、上杉家より書出し候記錄

も捨てずして、竝べて能き中を取り、通鑑を撰び差上候樣仰渡さる。

一、長尾信濃守爲景八子

一男　彌六郎晴景。京都將軍義晴公より、晴の一字下され候。

二男　平藏景康。天文二年二月十三日、黒田和泉逆心にて、景康誅せらる。

三女

四女

五男　左平次景房。

六女

七女

八男　景名猿王丸。十四歳の時、長尾八郎政虎といひ、後景虎と改む。天文十九年七月、京都將軍義輝公より、輝の一字下され、輝虎と改む。天文廿一年、輝虎二十三歳にて剃髪あり。心光と申し、後謙信と改む。

一、越後騒動根元は、長尾平六俊景大將にて、越前朝倉義景の牢人胎田常陸・子黒田和泉二

男・金津伊豆、以上四人一味にて逆心を起し、天文十一年四月廿二日、長尾六郎爲景、越中國にて戰死あり。此日を、右四人逆心の者、俄に城に馳せ入りて、爲景次男平藏景康・同五男長尾左平次景房討死する。此間に嫡男彌六郎晴景城を落ち、三島郡に忍びける。此時猿王丸、十三歳なり。二の丸番人島勘左衞門・山岸六藏兩人、猿王丸を座敷の緣敷放し、緣下に入置き、夜に入りて林泉寺の住僧門察和尙の方へ落し、隱し置き候て、門察和尙、猿王丸を、本庄美作方へ同道ありて、頼み申されければ、美作大に悦びて、早速宇佐美駿河守を招ぎ、猿王丸の事を頼む。宇佐美も悦びて、猿王丸に心入れ、行跡を考へ見るに、只人にあらずと存じ、大將に取立て、大熊備前・上野源六・鬼小島彌太郎・山岸丹波・新津丹波・同彦八郎馳せ集りて一味仕り、人數千三百餘御座候故、旗を擧ぐる。此段、長尾平六・黒田和泉・金津伊豆七千餘にて、橡尾城に押寄せ攻む。城方大熊備前・城新左衞門・鬼小島彌太郎馳せ出で、火花を散らし合戰する。城の櫓にて、猿王丸・宇佐美駿河、戰を見物仕居候。然る處、宇佐美申すは、城より今一備出し、横鎗を入れ、突崩し申すべしといふ。猿王〔丸一字脫カ〕殿聞き、暫し待ち候へ。時分見合せ、我等も乘出で、一手は本庄・宇佐美二人馳せ出で、兩方より挾討にして、切崩すべしとて、時分見

合せ居て、いざや時分能しとて、猿王丸殿・金澤新之丞・新津彦次郎一手なり、宇佐美・本庄一手となり、左右より、長尾平六・黒田和泉が陣を、挟討ち切込み、大熊備前・城新左衛門・鬼小島彌太郎勇み突崩す。猿王殿初陣にて、馬の達者、太刀打只人ならず。殊更切崩す時分、考へ切つて出で、敵を大勢突伏せ働き給ふ。依つて平六討死故、黒田和泉・金津伊豆叶はず、三條城・黒瀧城へ引込み籠城仕る。依つて、越後長尾家譜代の者・國侍馳せ來りて、猿王殿に隨ひ奉る故、猿王運を開き給ふ。

一、上杉家四家老　長尾・石川・齋藤・千坂。

一、石川備後爲元、繼子なく家絶え申候。

一、齋藤下野朝信、武勇智謀あり。謙信公代、所々合戰手柄仕候。

一、千坂對馬清胤子二人共病身故、軍務勤め難し。之に依り一族の内滿願寺仙左衛門を養子仕り、家を譲り、千坂對馬と申候。

一、本庄美作慶秀、越後國橡尾城主、大身者。謙信公、幼年の時取立て、大將仕り忠節の侍。嫡子本庄清七郎と申す。天正六年謙信病死あり。之に依り、景勝と三郎景虎、家督論あり。

此時、景虎へ一味にて、景虎生害あり。依つて清七郎も越後を退く。

謙信代

一、長尾越前政景　一、長尾遠江藤景　一、安田上總順易
一、杉原常陸親憲　一、岩井備中經俊　一、甘糟備後清長　一、順田大炊介長義
一、宇佐美駿河定行　一、竹股參河朝綱　一、川田豊前長親　一、島津左京亮勝久
一、吉江中務定行　一、高梨彌五郎盛貞　一、高梨源三郎盛政
一、志田修理義方　一、五百川修理鄕春　一、大熊備前朝秀　一、加地安藝泰綱
一、新津丹波義門　一、大岡修理賴久　一、鬼小島彌太郎一忠　一、金津新兵衛義慈
一、鐵　上野安則　一、色部修理長實　一、山本寺庄藏孝長　一、新發田因幡長敦
一、柿崎和泉景家　一、山吉源次郎親重　一、北條丹後長國　一、中條越前藤資
一、泉澤河內年親　一、直江大和實綱　一、渡邊越中翔　一、甘糟近江清英
一、村上左衞門義清　一、藤田能登只位（たじたか）　一、大川駿河宗德　一、須賀攝津
一、柏崎日向　一、松川大隅　一、大崎筑前　一、唐崎左馬助

一、神藤出羽
一、永井丹後
一、菅名大炊
一、小田切治部
一、川田攝津
一、下條駿河
一、七寸五分織部
一、大關安房
一、井上兵庫
一、溝口左馬助
一、小中八郎
一、清野介一郎
一、荒川主馬
一、朝日隼人
一、滿願寺隼人
一、田原左衞門
一、鮎川攝津
一、西條刑部
一、須賀但馬
一、杉原壹岐
一、安田伯耆
一、芋川播磨
一、田原左衞門
一、和田喜兵衞
一、小川紀四郎
一、平賀久七
一、丸田左京
一、飯森攝津
一、元井日向
一、吉江織部
一、松木伊賀
一、松本大學
一、清野常陸
一、宮崎參河
一、上野源六
一、龜田小三郎
一、城　新左衞門
一、栗田刑部
一、下山彌七
一、矢尾坂伊勢
一、石口采女
一、片貝式部
一、城　織部
一、木戸元齋
一、中條與二郎
一、山岸宮内
一、新津掃部
一、毛利上總
一、寺島六藏
一、青川十郎
一、諏訪部次郎右衞門
一、鵜　平次

一、畠山彌五郎義春（謙信甥、後上杉に改む）
一、上杉彌五郎。實父能登國主畠山修理大夫義則次男なり。彌五郎、後上杉民部義春と申す。後入道あり、畠山入庵と申す。嫡子畠山彌五郎長則二男源四郎長員、上杉を名乘り、三男畠山下總守義眞といふ。童名彌三といふ。慶長六年、家康公へ召出され、千石宛下され候。
一、長尾越前守政景は、信州上田城主にて、謙信の姉壻にて、景勝實にて、猛勇の大將故、永祿元年七月七日生害あり。此頃、景勝、喜平次と申して八歳なり。謙信甥にて、養子になされ候。
一、大國修理〔本ノマヽ〕頼、源三位頼政舍弟多田藏人頼行三代三郎頼連の後胤なり。修理繼子なく、直江山城弟を養子とす。之を但馬と申候。無津枝城・南山城二方に領知仕候。然る處、兄山城守と仔細御座候て、上杉家立退き、行方相知れ申さず候。
一、宇佐美駿河守定行は、上杉民部大輔顯定の侍大將にて、智謀勝れたる大將にて、上杉顯定・同安房守房能、共に長尾爲景に打負け、生害あり。之に依りて、宇佐美駿河守、越後にて長尾爲景と合戰、五年に及び候。然れども上杉修理大夫定實扱にて、和睦ありて、爲景に隨ひ、天文

十年、越中國放生津城攻め落しける。同年、爲景、神保安藝守良衡を攻めける時に、椎名泰胤遊佐彈正局（つぼね）・江波五郎・一向宗西光寺下間筑後法印・七里參河一味にて、仙檀野に備へて、陷穽三箇所に拵へ置き、浮卷（本ノマヽ）の里長尾六郎爲景聞きて、仙檀野へ馳せ出で、椎名・遊佐・江波等合戰あり。椎名・遊佐が勢、僞つて敗軍する。爲景軍を□進み行く時に、一向宗寺等、爲景の跡を取切り、爲景前後の敵に戰ひける時に、落穴に一度に崩れ落ち、爲景討死あり。此時宇佐美駿河守定行は、松倉城に楯籠り、神保・椎名は、兩月の間合戰して、和睦ありて、松倉城を引退き、越後へ歸りける。永祿七年、信州野尻の城主長尾越前守政景と、一同に入水して死す。年七十六歲。嫡男宇佐美造酒之助定勝事は、永祿五年七月十日、武州上尾合戰に戰死する。次男民部勝行は、父駿河生害已後浪人仕り、景勝代に至りて、數度□し、奉公仕り候へども、景勝父の仇とて、言葉も懸けず。然れども民部事は、上杉家を慕ひ、大正六年に、景勝と柴田勝家と合戰ありし時、民部、甲府の首二つ取りて、其身數箇所手負ひ、景勝の本陣へ來りて、目見ゑ願ひけれども叶はず。其後は、越後上條に引込み罷在候。

一、村上左衞門佐義清は、信州五郡の領主、坂本城に居り、清和源氏伊豫守頼義舍弟肥後守頼清子藏人頭顯清四代孫爲國子判官基國後胤なり。

一、高梨攝津政頼・同源五郎盛貞・同源三郎盛政・井上兵庫・須田大炊長義。是等伊豫守頼義公舍弟出羽守頼秀三代孫高梨七郎盛光井上河内守清政後胤なり。

一、新發田尾張敦（脫字ア）〔ルカ〕子なし。弟養子に仕り、是を因幡守と申す。武功剛強なる者にて、因幡守十六歲の時、謙信小田原城下迄押詰め候。此時引退き備定めあり。因幡十六歲にて進み出で、謙信へ申しけるは、宜しからず候備定にて御座候條申す。謙信機嫌悪しく、悴差出でたる事を申すとて、殊の外叱り申され候。因幡少しも屈せず、左候はゞ、私へ御暇下さるべく候。小田原城へ參り、御歸りの次第、北條氏康へ申し、人數召連れ罷出て、越後勢の跡を付け、酒匂川より此方にて、屋形樣を打つて崩し申すべく候と、申しければ、謙信つら〳〵思案して機嫌直り、成程因幡了簡の通り、宜しからざる備なりとて、備配りを仕直し、因幡殿を申付けられ候。誠十六歲にて名譽を顯はし、武運に相悃ひ候ものかなと、諸人申候。謙信時代には、數度手柄仕り、將數多（本ノマヽ）。之に依りて、奢心出來候をゞ知り候樣、景勝是を呵り給ふに依つて、自然と不和になる。然る處天正十五年、織田信長、因幡方へ種々申越され、逆心を勸め、

終に因幡逆心を發し、内通を仕り、奥州赤谷城主小田切參河守も、信長へ一味にて、新發田因幡と内通仕り、小田切方より、因幡方へ、兵糧・玉藥・人數、合力仕る。之に依りて因幡事、新發田城へ楯籠り、小田切參河守人數は五千、若野城に楯籠りて、景勝と四年の間合戰する。然れども信長は生害あり、新發田も小田切も、獨身の體になり、天正十四年に、小田切居城、赤谷城を攻め取つて燒拂ひ、新發田城を攻む。因幡切つて出て、猛威を震ひけるを、色部修理馳せ向つて討取り申候。

一、北條丹後長岡〔綱カ〕、武勇場數の侍にて、板戸城主一萬貫領し候。謙信代より、大方は先陣承り候。謙信病死後、景勝も景虎と、家督爭論の時、景虎に一味仕候により、荻田與三兵衞打伏せ、鎗にて突殺す。其已後景虎を討取り、景勝越後を治むる。（景虎は、北條氏康七男にて、謙信養子にして、景虎と申しける。）

一、鬼小島彌太郎一忠、武勇大力なる侍にて、或時謙信より、信玄へ、使者に遣され候。信玄方に、猛犬獅々と名付け、人喰ふ犬御座候。科人御座候へば、矢來の内に入れ置き、此犬を放し、科人を喰殺させ申され候。扨、謙信よりの使者へ、對面致すべしとて、態々彌太郎を、庭へ呼入れ給ふ。信玄緣近く出て、對面あるにより、彌太郎緣端に手をついて、口上申居り候處へ、緣の下より、彼の猛犬走り出て、彌太郎の膝頭にかぶり付く。彌太郎少しも騷がず、右の手を緣の下へ差延べて、犬の口先しつかと握り挫ぐ。犬緣の下にて、殊の外騷ぎ候。信玄も態々返答承り申され候。其内犬の口先を握締め、知らぬ顔にて、彌太郎退出す。然れども膝より血流れ候へども、知らぬ體にて罷出候。跡にて信玄、犬を見給へば、口先より脇迄挫ぎ付けられ、犬は死し申候。信玄名將にて、斯樣の事なされ候段、他國にて笑草となり申候。

一、島津左京大夫（島津修理大夫資久の末子にて、後入道ありて、月下齋と申候。島津義久の弟なり。仔細ありて、謙信を賴み居、武勇場數あり。）

一、鮎川攝津は、本庄越前房長一族にて、本國越中の侍、謙信に奉公仕り、天正六年、謙信病死前、正月より逆心を起し候。如何なる心入にて有〻之候か、譯知る者なし。謙信、種々宥め候へども、隨ひ申さず候故、本庄越前守繁長に、討取申付けられ、繁長、即時に攻め破り、鮎川を討取り申候。

一、竹股參河朝綱、父は筑後と申し、數代越後糸魚川領知仕り、謙信代に、所々合戰手柄。南越中國魚津城に、川田豐前・竹股參河・山本寺庄藏楯籠り候。天正七年より同十年迄、柴田勝家・佐々陸奥守成政等と合戰する。天正十年、城内兵糧なく、六月三日、川田・竹股等幷に山本

寺切腹して、城兵を助けける。竹股參河子三十郎と申し、後參河と申候。子孫三十郎・權左衞門・平左衞門・數右衞門と申し、當時出勤仕り罷在候。

一、新津丹波義門、清和源氏平賀冠者盛義後胤盛義次男平賀三郎信資、〔脫字ア ルカ〕越後新津庄代々領す。當時新津將監家にて御座候。

一、加地安藝守泰綱、下越後加地庄を代々領す。佐々木三郎盛綱の後胤なり。子但馬季綱といふ。三郎景虎に一味仕り、景勝と合戰の時、但馬討死す。但馬子加地右馬助と申し、越後に浪人にて罷在候。慶長五年、越後にて一揆起り、堀丹後守直寄家人小倉主膳居城。下倉城攻め落し楯籠り、堀丹後守、下倉城を攻め落す。此時右馬助討死す。子一人あり。山伏となりて、忍び居り候。後年上杉彈正定勝代、加地子孫を呼出すべしと尋ね給ふ。畠山下總守義直、加地安藝の孫、越後山伏と成りて居候段聞出し、定勝へ、此由を申され候に付、召出さるべしとて、山伏を越後より呼出し、髮をはやす由、勝定四十三歲にて、正保二年九月十日、逝去あり。之に依りて山伏も、是非なく越後へ罷歸り申候。

一、川田豐前長親、父は江州守山住人川田伊豆と申候。謙信上洛の節、日吉山王へ社參あり。

此時川田伊豆の子岩鶴と申し、幼少なるを召連れて、社參仕る。謙信是を見給ひて、岩鶴を貰ひ給ふ。豐前と申し、後年越前國魚津城主椎名肥後泰種を攻め落し、此領知六萬貫を豐前に給はり、居城とする。天正十年、佐々政盛・柴田勝家、大軍にて取卷き、兵糧を詰めて攻むる。信之城持ち難く、六月三日、川田豐前・竹股參河・山本寺庄藏切腹仕候。

一、本庄越前繁長、童名彌二郎、父大和守房長と申す。越前十三歲の時、一族小川紀四郎・鮎川因幡と申す者逆心起し、此時彌次郎武勇を震ひ、紀四郎・因幡守、討取申候。永祿四年九月十日、川中島合戰の時、武田太郎義信勢を切崩す。此合戰、志田源四郎義時と大川駿河守討死仕る。之に依りて謙信勢敗軍する。本庄・宇佐美・色部横合より、甲州勢に切懸けてまくる。此時本庄越前、廿六歲にてあり。越前申しけるは、謙信の油斷にて、太郎義信に切捲くられ、推着を見せられたると、誹り申しけるを、謙信、聞き給ひて怒り、勘氣致され候。之に依りて居城に八年引込み、蟄居仕る。然れども謙信は捨て置き給ふ。其後降參仕り候て、出羽國庄內城主大寶寺義興方へ、越前次男千勝を養子に遣し候事に付、越前怒り、色部修理・中條越前・荒川主馬・黑川備前等を頼み催して、庄內城へ押寄せ攻め落し、義興を討取り候。本庄千勝丸を元服させ、

義勝といふ。扨、景勝へ斷りもなく、京都秀吉公へ、御禮申上候故、景勝不興ありて、殊の外の勘氣にて、暫く牢人仕り、本庄誤りの段、景勝へ色々詫び候に付、景勝、會津へ所替仰付けらるゝ年、歸參申付けられ、奥州森山城に居り、其後同國福島城に移り居る。天正十四年に、最上義光方より、草刈備前を間者に入置きて、庄内城主義勝子光安を打止めて、最上義光、庄内城を押領する。義光より、東禪寺右馬助・中山玄蕃を城代として入置き、此由を、本庄越前聞くより、五百騎にて庄内へ押寄せ攻め破る。時に東禪寺右馬助戰負け、無念に存じ、越前に近寄り、刺違へて害はんと思ひ、首を手に下げて、味方に交りて、本庄越前に近付きて、越前が甲に切付けて、甲の筋三筋切解き、餘る太刀にて、鋌を刺して、左の小耳に少し切付くる。本庄心得たりとて、太刀拔合せ、右馬助を胴切に切殺す。右馬助太刀正宗なり。越前是を取りて、家寶として、右馬助と名付け、祕藏し持ちける處、文祿年中、伏見御城普請に付、景勝普請奉行に、本庄越前を申付けられ、伏見に在りては、大分金銀を遣ふ。此時に、彼正宗を拂物に出し候。大神君樣へ召出され、本庄正宗と號し、紀伊大納言賴宣へ進ぜられ、紀伊樣御家寶なり。

一、山本寺庄藏孝長、武功の侍、父を伊豫守と申し、代々越後不動山城主、越中國魚津にて切腹仕候。

一、色部修理長實、一代の高名場數多く、越後にて長尾平六・黒田和泉・金津伊豆逆心の時、河西城・黒瀧城・新山刈羽城・村松城・安田城・菅名城、六箇年に謙信攻め落し、此度に手柄五箇度候。川中島合戰、此外、沼田城・古河城・小田城・白井城・和田城・佐野城、是等の城攻に、殘らず高名仕り、新發田因幡逆心の時、景勝の先手にて、新發田の兩城を攻め落し、終に因幡の首を取る。因幡は、色部修理壻にて御座候。

一、松原常陸介親憲、會津にて猪苗城一萬五千石領、數度高名仕り、大坂御陣の時、天下に名を揚ぐ。扨常陸介は、百姓・町人迄に情をかけ、金銀・米錢を取らせ、家中大身・小身にても、景勝の用に立つと見及び候者は、慇懃に挨拶し、音信遣し、足輕より下の者まで言葉を懸け、身貧なる者には合力仕り、奉公のなる樣に取立て候故、合戰の時、士卒、常陸介の下知を能く守り、人數の廻する事、手足を遣ふが如く、外大將の及ぶ事にて御座なく候。年八十三歲にて病死仕候。子息を彌七郎と申し、父相果て、家督の事に付、景勝へ不足申し牢人仕り、上方へ

退き申候。

一、大熊備前朝秀、越後代々領知仕り、殊更謙信、初めて旗を上げ給ふ時、味方仕り、軍配之あり。之に依りて謙信も、常々目を懸け給ひける。然る處城織部兩人とも、法度背く事之あり、謙信家老、種々相談遣され候へども、其通りに差置き難く、備前・織部兩人とも牢人仕り、甲州へ行き、信玄へ奉公仕候。

一、長尾遠江守藤景、武勇功なる者にて、謙信の下知を度々もどき、譏誹申す故、常々不和に御座候。然れども、武功の侍に御座候へば、謙信、萬端知らぬ顔にて過ぎ給ふ處に、永祿四年九月十日、川中島合戰の時、武田太郎義信（信玄公嫡子）、原町に謙信休み居給ふ所へ、俄に押寄せ、謙信本陣へ切込み候。謙信人數油斷の處へ、切込み申さるゝ故、總人數騷動仕り、先手の者共も、漸々取合ひ候故、謙信の勢、大勢討死仕候。大川駿河・志田源四郎、武勇を震ひ討死仕り、謙信も波平行安作の長刀持つて、散々に切つて廻り給ふ所へ、貝津城押へ本庄越前・下條薩摩・新發田尾張等引き來りて出合ひ、本庄・新發田・下條三人、共に會釋なく、太郎義信の陣に切つて入り切崩す。此時合戰、謙信の油斷、年頃武勇に自慢ありけれど、口上に違ひ、年若の義信

に捲付けられ、をかしやと、謙信を誹り申す事聞き給ひて、甚だ立腹ありて、本庄越前へ、遠江兄弟を討つて參るべきの旨、申付けられければ、越前、其座より、直に遠江宅へ參り、兄弟早速對面する。時に本庄越前家來屋羽木新助と申す者、越前用事申す體に御座敷へ出づる時に、越前拔打に遠江を切伏せける。遠江弟右衞門景治、心得たりとて、遠江□□刀拔いて、本庄に飛懸る。越前も立向ふ處に、遠江切殺す血に、しりのつけに轉びて、危く見えける處に、越前家來屋羽木新助脇差を拔き、右衞門刀を受流し、飛入つて右衞門へ組付く。其間に越前飛懸り、右衞門が咽笛に刀突立て、討取り申候。

一、川田攝津守、謙信出頭人にて、段々取立てられ、二萬石給はり候。景勝代に、秀吉公へ内通申上候事顯はれ、景勝の耳に入り、天正十四年六月廿二日、景勝初めて上洛ありて、秀吉公へ御禮申上候。此時、攝津をも供に召され給ふが、越前國敦賀禪宗寺に一宿あり。此所にて直江山城に申付けられ、切殺し申候。然るを打損じ、攝津死物狂に切つて廻り候時に、三人切殺し、十人餘り手負ひ御座候。此攝津は、塚原卜傳流兵法能く覺え候故、大勢の手負御座候。

一、岩井備中と申すは、謙信小姓相勤め、武功の侍、場數高名度々。三方の大將しても、心安

き者と、謙信申され候。智謀兼備へたる侍にて、段々立身仕り、甲州押城信州飯山城に置き給ふ。信玄押城は、信州上田城・野尻城、謙信人數入置き申され候。

一、五百川修理弘春は、信州五百川城代々領地、三萬五千貫領し罷在候。信玄を押へ、數度手柄仕り、場數御座候。末孫五百川九郎兵衞三之丞にて候。

一、吉江中務定仲は、太平記に出で候吉江小四郎政房と申す者の後胤に候。此小四郎は、高越後守師泰を、鎗にて突き、首を取り候。吉江中務事も、武勇の者にて、場數多く御座候。只今の吉江監物先祖にて御座候。

一、甘糟備後清長は、本主尾張越前守政景家臣にて、呼寄せ、川中島其外所々の合戰に、供に召連れられ候處、武勇智謀ありて、合戰の圖を能く考へ、戰ひ候故、謙信の心入に叶ひ、段々立身仕り、五萬石を領し、景勝代、會津に移られ候節は、二萬三千三百石にて、白石居城。慶長五年、伊達政宗より合戰の節、備後内室は、會津に差置き候。然る處内室病死する。幼少なる子供計り□□候故、白石城に、甥登坂式部と申す者を、城代として、備後は、忍んで會津へ參り候跡にて、政宗より謀者を入れ、登坂式部を、一萬石の約束にて、正宗呼出し、白石城

を、政宗へ請取るべしと申越され候。式部納得仕り、白石城を、片倉小十郎に相渡し候。景勝是を無念に存ぜられ、備後へ詞懸けられず候。景勝、米澤所替の時に、三千石になり候。後年家康公へ、畠山下總守義眞御使にて、御旗本へ召出され、一萬石下さるべき旨、上意御座候。備後承り、生々世々有難き上意を蒙り候。台命に應じたく存じ奉り候へども、私故、至極不調法仕候。景勝は詞懸け申さず候。日陰者に罷成候。然れども、景勝譜代の者にて御座候間、御免蒙り奉るべしと申切り、其後、備後米山にて病死仕候。子二人御座候。嫡子藤左衞門・二男帶刀二人、共に暇を取り牢人仕り、津輕へ退き候。然れども定勝代召返され、相勤め候。只今の甘糟五郎左衞門・同久三郎は、備後の孫にて御座候。

一、須田大炊介長義は、清和源氏伊豫守頼義弟掃部頭頼秀の後胤、父は須田相模守と申す。大炊介廿三歳の年、慶長六年四月廿六日、伊達政宗と景勝合戰の時、政宗瀨上よりも、福島城へ向ひ給ふ時、此節は、須田大炊介梁川城に居り、加勢として、横田大學・筑地修理楯籠り居候て、政宗福島へ向ひ、攻め給ふ時は、梁川城より、大炊介大將となり、横田大學・平野丹波等馳せ出で、政宗の陣小屋山田といふ所へ押寄せ、政宗留守居の勢八百人參り打取

此丹波は佐竹の臣

り、政宗の家寶短刀・天幕・其外武具類分捕して、梁川城へ引退く。之に依りて、政宗の本陣騷動仕り、敗軍仕る。大炊介高名第一なり。後年大坂御合戰の節、信貴野合戰の時、景勝の先手にて高名仕り、大將軍樣より、御感狀頂戴仕り、御小袖・御腰物下され候。只今の右近祖父にて御座候。

一、志田修理義方、清和源氏志田三郎義憲後胤なり。父源四郎、川中島合戰討死。只今の志田介十郎祖父にて御座候。

一、安田上總介順易、手足に手疵御座候て、蹉跌にて、大剛の侍、數度馬上にて高名仕り、場數多し。信貴野合戰の時、上總介橫鎗を入れ、大坂勢を突崩し、勝利を得、高名仕候。然れども、直江山城と不和にて、大將軍御耳に入らず、御感狀下されず候。景勝も殘念に存じ、直江山城を、殊の外叱り、景勝自筆の感狀給はり候。

一、西條治部大夫、謙信・景勝公代、軍功數度仕候。只今の舍人祖父にて御座候。

一、島津左京亮勝久、入道月下齋と申し、場數度々軍功。只今の玄蕃祖にて御座候。

一、柿崎和泉景家、大剛強なる大將にて、武功場數一番。謙信代飛驒國を預け置く。手勢凡

八百騎持、一方の大將になり候。或時、和泉、黑馬を拂ひ候處、此馬を、信長の旗下へ求めけり。信長是を聞召し、幸なる事とて、和泉自筆に、和泉方禮狀認め、判も自身なされ候て、和泉旗本の內、信長へ內通仕り候者の方迄、此狀遣され候。此者是を謙信へ差上げ、謙信披見ありて、信長より參り候數通出されて、引合せ見給ふ。疑ふ事なき信長の判形なり。此行樣の權左衞門と申す辯說の侍一人越後へ、信長より、謙信の機嫌伺とて差越され、居合ひ候間、此權左衞門に、信長よりの狀見せ給へば、一目見て、是は信長自筆狀に御座候と申候間、又信長より參り候狀の內、自筆尋出し、引合せ見申され候へば、相違なく信長自筆故、謙信も、誠に和泉に心ありとて、生害申付けられ候。和泉申候は、奸謀に□□淺間しや。押付信長に國を取られ給ふべしといひて果てける。和泉相果て候へば、彼の狀差出し候侍、早速缺落ち仕候。之に依りて謙信も心付き、和泉は、誠の內通にては御座なく候ものをとて、後悔せられ、狀差出し候侍を、生捕り申す樣にと、物主共に申付けられ候へども、終に見出し候者御座なく候。

一、直江神五郎、後大和實綱と申す。此大和、川田豐前・吉江紀四郎、無二の相口にて出頭仕候樣、毛利名左衞門と申す者、大和に遺恨ありとて、大和、春日山城權の間にて、切殺され候。

登坂角内と申す者馳せ寄りて、名左衞門を打留め申候。大和繼子なし。之に依りて、越後千坂城主樋口與惣兵衞與六と申し、十四歳罷成候。之を大和養子に申付けられ、後直江山城守兼續と申す。景勝代、秀吉公へ御目見仕り、殊の外御意に入り、秀吉公御前へ罷出て、御咄仕り、陪臣にて、御紋附御小袖同服、數度頂戴仕り、父子米澤城三十萬石下され、秀吉御前は、景勝も、直江には及び難く候。本多佐渡守正信の二男三十郎と申すを、直江山城養子仕り、大和守と申候。後直江方にて實子出生仕候間、大和守實父佐渡守方へ立歸り候處に、加賀利家招きて、家老になされ、本名を名乘り、本多安房守と申候。

一、栗田刑部は、一萬石領。信州先方清野助十郎兩人にて、相勤め申候。景勝代、慶長五年、會津籠城の節、刑部如何存じ候か、會津を立退き候故、景勝より討手申付けられ、境目にて追付き、討取り申候。

一、木戸元齋と申す者、武功の侍にて、成田下總守長泰と、二度合戰仕候處に、二度とも、自分の覺悟には、成田を追崩し手柄仕候。謙信、元齋の軍仕る手段の次第を聞き給ひて、殊の外褒美にて、四尾城三萬八千石、與力の外に、組子を付け、此木戸元齋を据ゑ置き、武州・信州の

先手役申付けられ候。

一、上杉彌五郎義春、後に上條民部少輔と云ふ。信玄・謙信和睦以後、信州貝津城に居り、景勝方へ、書狀差越され候狀に申越され候は、大家に、出頭一人に、萬事仰付けられ候て、御爲然るべからず候まゝ、折節は蔭を御聞き然るべき旨、書狀を直江山城に見せ申さる。直江は や我が身の上と合點仕り、其後上條民部事を、折々讒言申候て、眞田安房守と內通仕候など申候處、民部此事を聞きて、上方へ登り、秀吉公へ委細申上候。之に依りて、石田治部少輔に仰付けられ、扱申付くべき上意御座候へども、石田、直江兄弟よりも睦しく候故、石田扱ひ候事、打捨て置き、秀吉公より、民部扶持米とて、千石下され、其後家康公へ召出され候。

一、鐵上野介安則、子孫左衞門と申す。景勝代、大坂信貴野合戰の時、景勝下知にて、大坂勢の中、鐵炮打入れて大利を得、天下に名を擧げ、高名仕候。孫太郎祖父にて御座候。

一、渡邊越中　長井丹後　桃井隱岐　栗林肥前　宮島參河
川田對馬　市川左衞門　下條駿河　安田治部　元井日向
鳥山因幡　唐崎左馬　黑金治部　毛利上總介　大關阿波

神藤出羽　藤田能登　齋藤八郎　水間掃部　山岸宮内
松本大學　飯森攝津　平賀志摩　青川十藏　柏崎彌一郎
樋口與惣兵衛　長尾七郎　長尾包四郎　臼杵包兵衛　小田切治部
矢尾坂伊勢　菅名大炊介　寺島六藏　上野源六　龜田小三郎
若林九郎右衛門　相川大隅　須賀攝津　大崎筑前　和田喜兵衛
朝日隼人　滿願寺隼人　諏訪部二郎左衛門　田原左衛門　片貝式部
新津彦次郎　黒川備前　松木伊賀　中條千次郎　田丸左京

右の者共、川中島其外城攻に供仕り、高名數度御座候へども、詳ならず。

一、小田原城攻の時、景勝人數押し、秀吉御覽なされ、上意に、馬印之なき故、景勝居備知りかねし候間、向後馬印持たせ候へと、上意御座候。景勝畏り奉り候段、御請申上げ、左候はば、駿河大納言、貴殿御馬印扇、見事に御座候間、申受けたく存候の由、申上候へば、家康公御機嫌克く、左候はゞ、進ずべく候。我等馬印、金の扇にて候間、色を變へ持たせ候へとの上意御座候。景勝忝き由申され、拙者馬印の儀、黄色の扇に仕るべしと申上候。

一、慶長二丁酉年、景勝四十三歳。此年、小早川筑前中納言隆景病死。之に依りて景勝、五人の大老の列に仰付けられ候。家康公・利家卿・輝元卿・秀家卿・景勝とも五人なり。

一、文祿三甲午歳十月廿八日、景勝中納言に昇進なり。

一、會津へ移る。城持家人には、

一、米澤城　直江山城
一、猪苗城　杉原常陸介
一、金山城　色部長門
一、白川城　五百川修理
一、南山城　千坂對馬
一、津川城　竹股勘解由
一、長沼城　安田上總
一、大浦城　島津月下齋
一、梁川城　須田大炊
一、白石城　甘糟近江
一、福島城　志田修理
一、二本松城　下條駿河
一、森山城　本庄越前
一、藤島城　中條千次郎
一、鮎川城　木戸元齋

出羽國
一、庄内城　岩井備中

謙信記　大尾

上杉輝虎註進狀

一、乍恐謹而言上。抑某去十日於二信州川中島一、甲州武田と令二參會一、一合戰仕、甲州勢致二敗北一候趣。

一、輝虎事、以二御厚恩一居二關東管領職一候上者、私之備弓箭先切二隨東國一令二上洛一候半と存念に付、村上義清に對為レ申分、輝虎義清同道仕、去八月八日、越後國春日山打立、信州へ致二着陣一候事。

一、越後罷立候刻、輝虎老臣共に向而、今度は信玄人數半分爲レ捨、手詰之勝負決候由、荒言申渡事。

一、今度致二手引一候信州侍高梨・井上方へ、前廉申越候者、去年和田喜兵衞爲二手引一、上州和田之城可二乘取一旨申越候間、輝虎令二出馬一候得者、行相違之間、於二其場一和田喜兵衞、輝虎手に懸刎レ首候事、各存知之前也。今度相圖於二相違一者、白山・愛宕も照覽候得、其方兩人、輝虎

打果可レ申と急度相斷候事。

一、親父兵部大輔憲政入道立山因により、上州侍可レ令二出馬一之旨候得共、一人も召連不レ申候事。

一、輝虎者、今度實否之勝負と存詰候處、究竟之侍共勝罷出候刻、善光寺へ懸、犀川之市村之渡越丹波島着、川中島を過、御幣川・千隈川・藏品川三つの大河を越、赤坂山より清野へ罷出、西條山に陣取申候。是は態致二深入一、信玄に爲二跡切一、味方之上下心を一存切候樣にと存、如レ此に候事。

一、輝虎は西條山へ上、海津之城見下、是非乘取候、訖と沙汰を聞、海津之城主高坂彈正驚、早打を以、甲州へ令二註進一候付、信玄入道三萬の着到にて、八月十八日甲府罷立、同廿四日筑摩川を越、土臧・八代より、筑摩・雨宮近邊、無二錐立地一陣取、雨宮を限、旗を立申候。則輝虎兼々如二下墨一、雨宮の橋を燒落、越後の通路留申候。謙信之對陣仕候。然共兩陣の間に、赤坂山候而、合戰不二罷成一候。其上輝虎少も働不レ申候故、信玄色々不審を候而、八月廿七日晝の下刻にても候訖。信玄三十騎計にて、赤坂山へ登、輝虎陣所致二看得一體見え申候。後承候得者、越

後勢合戰を持候はゞ、此中の間放れの勝負にても、少可レ有レ之處、謙信一向取合不レ申候得者、如何樣不審と信玄申候由。信玄は同廿九日五つの時分、雨宮を引、松原之町を通り、海津之城へ取込申候。後承候得者、越後への通路を開候者、謙信定て川を越、可二引取一之條、其引足を從二海津一追懸、可二討果一と評定仕、致レ如レ是候事。然者輝虎、少も動轉不レ仕候故、色々信玄行を仕、足を懸挑候得共、輝虎一向取合不レ申候に付、信玄は家老飯富兵部少輔・馬場民部・山本勘介を呼、有無に一戰可レ仕間、三萬の人數二手に分、一萬二千を爲二先手一、西條山へ取懸候者、謙信は軍之不レ寄二勝負一、川を罷越引二除之一候半間、信玄旗本八千にて、川中島に待請、跡より立狹可二討果一と評定仕候由、後承候事。

一、輝虎陣所、西條山へ差向候。飯富兵部少輔昌治・馬場民部丞氏勝・眞田幸隆・葦田信蕃・小幡尾張守宣重彼是十頭、人數一萬三千にて、九月九日の夜の一番鷄に、海津を打立、輝虎陣所西條山の麓に押寄、皆々陣取。信玄入道八千にて、同寅の下刻に、海津を致二出馬一、筑摩の寺尾の渡を越、川中島へ罷出、筑摩川を後に當、大塚村を左となし、豆島を右に請、原之町を左手前に當、西に向て、十四備に立申候。夜の明を待申候事。

一、九日の夜より、信玄陣所海津の城中、兵糧支度の火燒動搖仕候煙氣を、輝虎西條山より致二看得一候處へ、輝虎家にて、圍を預け候宇佐見駿河守定行入道參候て、信玄軍を持候由申候故、共々宇佐見と相議を究、拔村上義清・長尾近景を呼申渡候は、某十八歲、信玄廿七歲の秋より弓箭を企、度々挑戰候得共、信玄一度も不レ脫候故、終一度も勝負不レ仕候。是より信玄に備を付けさせ、爲レ可レ軍持摺懸挑、芝居を引除て、後れ色を顯候處、甲信の說に、信玄と取組ては、度々軍を廻し、芝居被レ取、空引除由、取沙汰仕候由承候。然るに軍神八幡の冥感にかかり、輝虎多年の本望可二相叶一見申候仔細は、今夜信玄人數を二手に分、其一手は、此陣へ押寄て合戰を始ば、謙信不レ寄二勝負一、筑麻・御幣川を越可二引取一候。左候處を、信玄は旗本を以、川中島に待請、可二討取一と有、行手に取樣覺候條、今夜頓て輝虎川を越、川中島にて夜を明し、日出ば合戰を取懸、信玄旗本を、輝虎旗本を以爲レ懸、勝負を決し、此表へ向たる武田か先手の不二懸着一以前に、信玄は輝虎と勝負を決し、刺違死か、組討にするか、何れ明日は有無の合戰可レ仕と申渡、兼て定候により、飛脚を以、鳥討坂へ申越、其夜の四ツ過、輝虎致二物具一、西條山を卸下り、清野を過、赤坂の渡を越、御幣川を渡し、川中島へ移、綱島を左に當、御幣川を右

になし、丹波島を後に當て、原の町の西北に、東へ向て十二備に立候。宇佐見定行入道は、二千餘にて、胴勢の放、大塚の西に遊軍にて相備候事。

一、輝虎申付候。西條山へ向候武田先勢、河を越駈付候は、防可レ申旨にて、本城彌次郎重長、色部・大川・神幡下條以上五組、筑麻川の端へ差向申候。此人數、大塚村の巽の川緣を傳、筑麻の寺尾の渡より、三町餘南に北へ向陣取申候事。

一、夜に越申候飛脚により、鳥討より、信州侍井上清正・高梨攝津守近頼二頭は、筑麻陣ヶ瀨を越、筑麻を致レ左、綱島を右に當、何も備申候事。

一、輝虎小荷駄奉行中條兵次郎を申付候。是は鹽崎之渡の南北に、備を立申候事。

一、輝虎は如レ此備を堅め罷在候得共、信玄は是を不レ存、九日の夜の曉に、海津を立、寺尾之渡を越、川中島へ罷出候事。

一、前夕九日の夜は、月寒へ天氣能候得共、夜半より雨降、東西見分不レ被レ申候により、信玄旗本組も、西條山へ向候先勢も、油斷仕候由。殊信玄旗本は、十日朝霧深より、西條山の方のみ見申候て、今や〳〵と、先手一戰を待申候處に、十日の旭出で、霧晴上り、見申候得者、輝虎

一萬の勢を丸備に作、毗字の旗を眞先に進、如何にも近々と備罷在候。其時信玄法師、始て仰天仕候由。然所へ何の手合になく、弓・鐵炮を放懸。輝虎團を擧、今日之合戰、輝虎一世之天運有焉。輕ニ身命一可レ揚ニ名於萬天一之旨、諸軍を勵喚叫。此方諸手何も一備の內、物首計馬に乘、其外は悉下立、馬をば跡に曳せ、鑓取て懸。左は長尾越前守正景を先下して、三備右は齋藤下野守始、四備中筋は柿崎和泉守、柴田因幡守、先手に申付、二の手に輝虎押續、旗を うつ伏、軍勢三筋に分れ、鑓を調閧を作突懸、合戰を始。信玄度々於ニ武邊一越度を不レ取、勇を關東に秀侍也。此度の一戰に、於レ得ニ敗名一者、生涯之恥辱存切、進事有無退事、諸軍勢八千餘騎に詞を懸、鑓玉を取待懸喚叫、一同に鐵炮を放懸ば、平地如レ霰降、輝虎先手の兵共、鑓衾を作甲を傾、死人を乘越々々、上下念佛を唱、無明の闇に突懸、兩方より寄、鑓を打合、散々入亂、黑烟立攻戰、我先にと先登を爭。信玄先手飯富三郎兵衞尉昌景・穴山伊豆守精兵七百人、弓手妻手打雙、散々に切合、破入追立、兩方の兵共、玉の汗を流、戰疲味方息終不レ論、死人啜レ血息を繼事多。信玄が剛兵共、捨ニ身命一防戰。故に輝虎が先手柿崎・柴田兩備被ニ切立一、輝虎旗本の左右へ別、二町餘致ニ敗軍一候。飯富・穴山之を追て、左右へ別進候に付、武田備組間

腹に成候透間を幸と存、毗字の旗を眞先押立。輝虎團を擧、諸軍を勵し、すは懸れと下知を成、眞先に進ば、相隨兵共、混甲八百餘、飯富・穴山が跡へ入違、中筋眞一文字に切て懸候。向敵には、信玄嫡子太郎義信・今福・諸角等數千の兵渡合、切相突合、算を亂相戰。輝虎馬の左右にして、手柄高名勝負區々也。然處信玄法師が子息太郎義信致ニ下知一、近々と見申故、輝虎自身敵中に乘込、彼義信と令ニ參會一候。輝虎太刀を拔、義信を及ニ三刀一切附、已可レ刎ニ彼首一處、義信恐ニ輝虎之太刀影一令ニ落馬一。彼が左右の勇士捨ニ身命一推隔之條、不レ達ニ本望一、無念至極、不レ可レ盡ニ筆紙一候。然所に高梨攝津守正賴・井上三郎兵衞淸正等、西の河原より鬨を作、橫鑓入立候故、信玄が賴切たる士諸角豐後守、討死訖。甲州勢亂立候處へ、柿崎・柴田・長尾正景同右金吾・川田等備崩押懸、右の方は齋藤下野守利實・松本大學・三條・山吉・長尾遠江守景治・村上義淸等、原之町を橫切進、中筋町の手左の手、一度に箕手に廻、矢楯も不レ溜押入追返、悉首取追レ北、諸手共に追申候。就中輝虎旗本は、信玄が右備を追立々々、信玄旗本へ、輝虎旗本を以切懸、信玄馬廻混甲千餘輩、身命捨火花を散雖ニ防戰一、終切崩、輝虎旗本の兵共、勇進追亂候處、於ニ大塚村一信玄下知して曰、大河後に有、此にて可ニ返合一之旨、眼を瞋し勵ニ諸軍一、其身

令ニ下馬一、床机に腰を懸候故、甲州勢取て返、推つ押れつ半時計、黒煙を立火花を散して、合戰逮ニ五六度一。渡邊越中守翔、手勢引連乘越鑓を入、武田胴勢を突崩、過半追散、算を亂切戰候。此に宇佐見駿河守定行入道は、上杉顯定以來、度々顯ニ武勇一、爲ニ大功之武士一、殊更軍配の謀長ずる故、輝虎彼に軍配團を預、軍の意見を問。此度定行入道手勢二千餘輩左右隨、定行團を擧て諸軍を勵し、信玄備の眞中へ鑓を入、矢楯も不レ溜追崩候故、信玄が總軍勢又致ニ〔敗カ〕配軍一候。甲州勢、海津の城を志と云共、本城重長〔庄繁イ〕・色部・下條・神幡等、筑麻河原に控候に恐、信玄が敗軍の勢、或筑麻川に逃入、或御幣川飛入、或鹽崎指て落退の輩、如レ散ニ蜘子一。輝虎が總手の兵共、切先を雙、追付追廻、竭レ數川中に切浸最中、輝虎、先刻信玄法師が小悴目義信冠者を討遁無念に存、信玄を志候て、輝虎甲を脫、白手巾にて頭を包、駕ニ早鹿毛馬一、大太刀拔持、甲州勢を破て入。信玄は何國に居と尋廻候得ば、甲州の兵共之を見とがめ、信玄を尋候は何者ぞと申候内、左に信玄入道團を持、床机罷在宛、運は在レ天、一足も不レ可レ退旨下知仕候を見付、天之所レ與優曇華と悦、輝虎眞一文字乘寄、謙信是迄の來由名乘候得ば、信玄吃驚、意得たり餓鬼目、物々しやと詬、立上らんと仕候處を、輝虎馬上より疊懸、切申候故、信玄太刀を拔無レ隙、圍にて請候得共、輝虎爲ニ物共一ず、世悴目々々と詬立上、頭下擽付、信玄腋を二太刀迄切付、已組んと志候處、彼が左右の勇士に被ニ押隔一、不レ達ニ本望一、無念至極殘念之次第也。輝虎冥加に盡、被レ放ニ天道一、信玄法師を討遁候段、口惜儀者、難ニ落涙押一。聲を揚吠申候。乍レ去村上義清自身手懸、信玄が弟典厩信繁切落、被レ致ニ高名一候故、少機嫌を直、信玄敗軍仕候を追討候處、信玄軍配山本勘介をも、川際にて討取、直御幣川を追越、川原一面に追立、平討に追立候事。

一、御幣川・筑麻川・藏品川を追越候故、敵・味方不レ知レ數流死申候。就中土口は、屛風を如レ爲レ立成處故、幸と存候て、輝虎旗本にて追詰、信玄法師が賴切たる橫田源助始、二千餘討取、殘甲州勢をば、信玄父子諸共に、生垣山追上げ申候。家來水原・竹股・安田・加治・新河等、輝虎眼前にて手柄を仕候。高梨・井上は、赤渡を爲レ押申候訖。輝虎は、晝の頭に川中島を通り、小市の渉を越、水潜川を渡、同日申刻善光寺へ引取申候事。此方は雨宮・土口追止にて候。輝虎其夜は、善光寺に宿陣仕候事。

一、本城重長・色部・下條・神幡・大川等、原之町迄引取候處、宇佐見定行入道・直江大和守押來、

一手に成、小市の渡へ懸引退申候。西條山へ向候甲州の先勢、追々に駈付向、寺尾・原之町・綱島邊一面に、新手の甲州勢押寄來候故、宇佐見定行・本城重長・直江大和守等防戰、火花を散合戰仕、其間輝虎、小市の渡を越申候。宇佐見・本城・直江、堅固に殿を相勤、小市の渡渉、輝虎一手罷成候事。

一、輝虎小荷駄奉行中條兵次郎は、信玄方致二敗軍一被二追餘一候處、地の百姓一揆共、物取に出候て、其荷物を奪取候故、中條兵次郎散々合戰仕候を見、信玄人數を押返合戰を始、味方餘討死候得者、中條切拂、堅固に罷除候事。

一、今度此方へ討取申候甲州之者共、武田左馬頭信繁・諸角豊後守・横田源助・武田大坊・板垣三郎・半菅善四郎。駿河今川より加勢に罷立候朝比奈左京進・武田彈正・栗田讃岐・淺田三郎左衞門・山本勘助入道・三枝新十郎・初鹿源五郎・帶兼刑部丞大將分十四人、都合五千五十人、首實檢仕候事。

一、輝虎家中手柄仕、抽二大功一候輩は、宇佐見駿河守定行入道・渡邊越中守・高梨正頼・井上三郎兵衞・杉本大學・安田掃部・長尾平十郎・長尾包四郎・元井日向守・長尾修理進・青河十郎・小田切治部少輔・荒河伊豆守・諏訪部二郎右衞門・水間掃部・長尾七郎・白杵 包兵衞・田原左門・三寶寺宮千代・直江五郎吉・吉江木工助・長尾兵衞尉・北條丹後守・齋藤八郎、廿四人の輩、何も感狀遣申候事。

右之條盡二委細一之段、雖レ似二無禮一、誠無道之輩者、對二天下一不忠節也。何可レ殘二心底一乎。此等之趣、宜樣窺二御氣色一、不レ洩御披露奉レ頼候。輝虎恐惶謹言。

九月十九日

大館伊豫守殿

管領上杉不識庵謙信
輝虎

上杉輝虎註進狀 大尾

北越耆談

信州川中島合戰聞書幷上杉家遺老談筆記

一、川中島五箇度の合戰の内、終の永祿四年九月十日の事は、別卷に記すが如し。先づ初めは天文廿二年霜月廿八日、川中島の下米宮（あめのみや）〔雨宮イ〕合戰。是れ第一箇度なり。此年謙信、初めて上洛。是は去年天文廿一年五月に、彈正少弼從五位下に任ぜし御禮なり。閏二月、景虎上洛、參內仕候處、昇殿を免され、玉顏を拜し奉り、天盃を下され、廣橋權中納言國光に仰付けられ、御饗應を下され、勾當內侍に宣下せられ、禁中諸殿殘らず景虎拜見せられ、公方義藤公へも拜謁。同五月、景虎、越後へ歸國の處に、其秋、村上義清・高梨政賴を始め、信州衆、武田信玄に仕負け、越後へ落ち來り、謙信を恃む故に、此合戰始まる。十一月十九日より、景虎、信玄と對陣。廿七日まで、每日迫合あり。廿七日に、景虎より使者を信玄に遣し、明日決定の合戰と約

束して、廿八日に、下米宮にて大合戰あり。信玄敗軍。謙信大利を得て、信玄方橫田源助・武田大坊・板垣三郎・穴山主膳・半萱善四郎・栗田讚岐守・染田三郎左衞門・帶兼刑部を始め、五千餘を討取る。卽此旨を京都へ言上。大館伊豫守晴忠披露にて、公方義藤公へ註進。是れ初めの川中島合戰なり。其翌年、天文廿三年八月十日頃より、謙信、川中島へ出張、信玄と對陣。去年の合戰に手創して、信玄、陣を堅くして取合はず。村上義清・高梨政賴へ、謙信密に下知して、小室平九郎・安藤八郎兵衞といふ足輕大將を、朝待の如くに伏せ置きて、草刈・僞引をかけて、甲州方を誘ひ出し、夫より兩方人數を出し、大合戰になり、互に懸けつ返しつ、終日十七度の合戰。六度は信玄方の勝利、十一度は謙信の勝なり。信玄旗本を以て、犀川を綱越にして、萱野の中の細道を幾筋もあるを傳へ、旗・指物を伏せて、思ひ懸もなき越後勢の後へ押出で、謙信旗本へ、無二無三に切懸け、紺地日の丸大四半を目にかけ、切つて入るに付、謙信旗本敗軍。信玄旗本、勝に乘つて追ひ來るを、上杉方渡邊越中守翔、七百餘にて乘越えて、信玄旗本へ鎗を入れ候。宇佐美駿河守定行三千にて、大塚村に備へ候が、是も信玄旗本へ橫鎗入れ、立挾んで信玄旗本を、御幣川へ追込み候。謙信旗本盛返して、信玄旗本を追討にする時、

御幣川の中にて、謙信と信玄と、直の太刀打。信玄手負ひて引退き給ふ。信玄舎弟武田左馬助信繁を、謙信手がけ、直取に討取り、遂に芝居をふまへる。謙信は、次の日十九日に引取り、信玄は十八日の夜、引取り給ふ。甲州方を討取る事、三千二百餘なり。此時越後大將分高梨源五郎討死。

一、武田左馬助信繁を、村上義清討取るといふは虚説なり。謙信自身に、左馬助を討取り、犀川の岸涯にて、典厩を川へ切落されしを、越後方梅津宗三といふ兵、典厩の首を取れるなり。此時謙信の太刀、備前長光二尺五寸赤銅作、今に當家に相傳へ有之、異名を赤小豆粥と號すと云々。右天文廿二年霜月廿八日、川中島下米宮合戦は、第一度なり。此年天文廿三年八月十八日の川中島合戦は、第二度目なり。此時謙信は、太刀にて切懸るを、信玄は軍配團扇にて受けらるといふ説あり。信玄も太刀にて勝負ありしや、謙信太刀に、切込の痕あり。其時目のあたりに見たる甲州衆又は越後方の兵共も、皆信玄は太刀にてありしと語る。軍配團扇の説、疑はしく不審。此合戦に、謙信方も三千餘討死。

一、第三度目の川中島合戦は、弘治二年三月廿五日夜なり。信玄は一萬二千の軍兵を、戸神山より廻して、謙信陣所西條山を攻めさせ、謙信は勝負に構はず、川中島へ懸り除く處を、信玄は、原の町にて待受け、討取るべしと工み給ふを、謙信察して引違へ、夜半に筑摩川を渡して、信玄旗本を懸破る。板垣駿河守信春・一條六郎忠光・小笠原若狭守長貞以下、數百人討取る。然る時甲州勢は、戸神山を夜陰に押すに、春霞立覆ひ、路に蹈迷ふ中に、川中島の鐵炮の音、鬨を聞き、取つて返し、川中島へ志し、筑摩川を越えて越後勢の前後より挟攻に付、謙信方、犀川の方へ引退く。信玄方追ひ來るを、上杉家の車返といふ行にて、信玄衆を引包んで、信玄方布施大和守・川田伊賀守を始め、剛兵數百人討取る故、信玄方引取る。謙信も、夜前廿五日の夜より、今日廿六日午の刻迄の合戦に、人數疲るゝ故、犀川を渡して引取る。

一、第四度目の川中島合戦は、弘治三年八月なり。信玄と謙信と十日餘對陣。謙信頻に合戦を望めども、信玄取合はず。同月廿六日に、上野原へ、信玄引取り給ふを、謙信追詰め合戦。初めの合戦には、謙信先手打負け、皆敗軍するを、齋藤下野守朝信隊に受止め、信玄方を喰止むる處へ、上杉方南雲治郎左衛門手勢にて横鎗を入るゝ處へ、越後方二の先長尾政景、三千にて懸付け、信玄先手を切崩す處を、宇佐美駿河守定行二千にて、山手より、信玄旗本を突崩す。是により信玄總敗軍なり。

信州川中島合戦聞書井上杉家遺老談筆記

一、第五度終の川中島合戰は、永祿四年九月十日。此次第は、別卷に註する故之を略す。總じて近年、世上にて車懸といふ行を、川中島合戰に、謙信用ひ給ひ、幾廻目にて、旗本と敵の旗本と、打合する行なりといふ。是は當家上杉方にて、遂に聞かざる事なり。尤も家の法に、車懸といふ隊の懸りやうあり。是は敵が戰地に先立ちて、隊を立固め、此方は行懸に押懸けつゝ、隊を立てんとする處を、敵は待受けて、此方備を立つる變を打たんと工む節に、此方の懸け樣車懸といふ行にて懸れば、其功にて、備を立つる變を、敵が打たんと懸るが、却つて此方の大利になりて、遂に勝利を得る祕術なり。されども五度の川中島合戰に、謙信、右の車懸をせられたる事なし。但第三度目弘治二年三月廿六日、川中島合戰の除口に、謙信車返といふ行にて、信玄方を引包み討取り、軍に勝ちたる事を聞誤りていひ傳ふか。

一、川中島合戰除口に、和田喜兵衞といふ侍を、謙信手討にせられたりといふ事、遂に當家にて聞かざることなり。和田を手打にせられたるは、上州高崎城下にての事なり。高崎は、昔は和田城といふなり。

一、納の川中島合戰に、謙信打勝ちて、信玄を追崩し、追討に、先手を土口・下米宮邊まで遣し、謙信は、川中島原の町に休み居て、兵糧をつかひ油斷の處へ、信玄の嫡子武田太郎義信、八百餘にて腰差を取隱し、旗幟を伏せて、物蔭より不意に仕懸けらるゝに付、謙信旗本敗軍。家老の志田源四郎義時・大川駿河守討死。其外數十人討取られ、謙信も、當家の重寶五挺鎗の內、第三番目の鍔鎗を、自身取つて防戰せらるゝ處へ、本庄越前守繁長・長尾遠江守藤景、二隊にて懸付け、武田義信陣へ、切つて懸る。併る處へ、色部修理亮長實・宇佐美駿河守定行、兩手にて鎗を入れ、義信を突崩す。謙信旗本も盛返し、義信を、廣瀨といふ處まで追討にせらるゝ。此時武田義信の手柄、比類なき事なり。是を甲陽軍鑑の作者知らざるか、記し置かず。若武者の義信に逢ひて不覺を取る、一代の越度なりと、後々まで、無念に口惜がり申されつる由。

一、右に記す第二度目、天文廿三年八月十八日の川中島合戰の時は、謙信と信玄と太刀打なり。第五度目、永祿四年九月十日の川中島合戰の時は、信玄と、越後方荒川伊豆守詮治と太刀打。此時も信玄手を負ひ給ふ。荒川伊豆をば、信玄方へ討取り給ふ。信玄剛き大將故、自身の働此の如し。

信州川中島合戰聞書幷上杉家遺老談筆記

一、近年世間に出づる記錄を見るに、當家にて當て聞かざる事多し。川中島合戰を、公方義輝公へ註進の狀あり。皆後人の僞作なり。但天文廿二年霜月廿八日、川中島下米宮にて合戰の次第を、京都大館伊豫守方へ、書付越し申され候書狀は、眞の狀にて、本紙京都に有之。橫田源助・武田大坊・板垣三郎・穴山主膳・半菅善四郎・栗田讚岐守・染田三郎左衞門・帶兼刑部、幷に駿河今川よりの加勢朝比奈左京進・武田飛驒守を始め、五千餘討取るとの文言なり。此書狀は、慥なる本書なり。其外に註進狀は、皆伴と見え、信用なり難し。

一、謙信家に旗なし。紺地に朱の日の丸四半一本、白地に黑毗の字の四半一本、何れも五幅の懸なり。後、白地に無の字を書きたる四半を仕立てられ、自讚せられしに、城の意庵、謙信氣に乖き、甲州へ走り込みて、武田の家人となり、白地に無の字を書きて、指物にする故、謙信大に怒りて、是非とも意庵を討つべしとて、合戰の度に下知す。それ故手前の無の字の旗は、停にする。景勝代に、秀吉公御意にて、上杉家に馬幟を仕るべしと、御直に仰付けられ、其座に、家康公御座あるにより、景勝申上ぐるは、左候はゞ、家康公、扇の御幟を申請けたく所望せらる。家康公御機嫌にて、左候はゞ、我が幟は金にて候間、色を替へ申さるべしとの御意にて、上杉は、淺黃の扇に致候。今に當家は、淺黃の扇の馬幟なり。

一、甘糟近江守（大剛の兵なり。此子孫、只今は、小身の甘糟加賀右衞門・同安大夫）は、小身なり。甘糟備後守清長は、上田より出て、鎗一本の身上なる者なれども、大剛の働、覺の者故登庸げられ、一手の大將になり、景勝、會津へ入部の時は、甘糟備後守は、二萬三千石餘にて、政宗領の境、大事の處なりとて、白石城に差置かるゝなり。登坂式部も、覺の者なり。されども關ヶ原御陣の節に、備後守、會津へ假に行きたる跡にて、政宗に謀られ、逆心して、白石城を政宗へ渡す故、兄の備後守を、景勝、勘當同前に致し、目見惡しくなり候。家康樣より、畠山下總守を御使にて、景勝目見惡しくば、上杉家を立退き候へ、五萬石にて召出さるべしとの事にて、御上洛の時、下總守屋敷へ、甘糟備後を呼寄せ、申聞けられ候處に、備後守、忝く候へどども、景勝は、譜代の主にて候へば、上意の通には罷成るまじきと申切る故、下總守、尤と申され、其事止むなり。右の仕合を、景勝聞付け、前方弟事にて、勘當半分に、前惡しく候上に、彌〻此度の事にて、景勝無興せられ、我が義絶不通の長門守（下總守事なり）方へ、忍びて參る事不屆なりとて、詞も懸けず、彌〻疎み果て、備後死去の後は、子（嫡子藤右衞門・二男帶刀）は、跡目立てず、南部か津輕かへ浪人して行きし由。（定勝代に召還す。只今甘糟五郎左衞門・同久三郎は、甘

糟備後守が孫なり。

一、藤田能登守は、一萬四千石餘を領知し、景勝より、津川の城に差遣され、朝鮮陣の砌、肥前の名護屋か、又藝州宮島か二處の內にて、家康公へ藤田心入にて、船を貸し參らせたることとあり。それ故藤田には、家康公御懇なり。慶長五年正月、年頭の御禮に、藤田能登を差上げらる。家康公、能登守に御懇志にて、御脇差を下されなどして、仕合能し。其頃より會津には、神刺の原に新城を取り、名ある浪人を召抱へ、樣子逆心と見ゆるに付、左樣の事共にて、御內意ありたるか、其年三月十三日、謙信廿三年忌法華經萬部の弔濟みたる翌日、藤田能登守妻子共に上下三百餘にて、會津を立除き、下野國那須野に移り、江戶へ入り、夫より上洛する。關原御一戰の後、烏山城一萬八千石を、藤田に下され、後に大坂御陣御供。榊原遠江守康勝隊の軍奉行に仰付けられしに、五月六日、若江合戰の時、藤田指圖を以て、大坂勢を討洩らしたる御咎にて、能登守流罪せしなり。能登守、會津を立除きたる追付に、栗田刑部（知行八千五百石同心三千二百石）も、妻子從類百五十人にて、會津を立除く處を、南山口城主大國但馬守（大國參河守養子なり。直江山城守弟なり。二萬石）と、白川城主五百川修理（二萬石）と長沼城主島津月下齋（一萬二百石）出合ひつゝ、栗田を境目にて押止め、景勝へ申上げ、腹を切らする。其年、關ヶ原陣なり。

一、荻田主馬は、童名孫十郎といふ。謙信小姓なり。後に與惣兵衞といふ。景勝の代に、旗本の武者奉行なり。文祿の頃、景勝へ不足をいひて立除き、結城宰相秀康卿へ召出され、後、越前へ御供して參るなり。此主馬事を、古傍輩の筋目なる故、城和泉守、駿府にて、樣々執成を申上ぐる。大御所樣聞召し、其方親の意庵こそ、越後に居たれ。其方は甲州にて生れ、上杉家中の事、何として知るべきや、途方なき事申候。總じて武邊の事は、其家に居て、見聞きたる人のいふが實なり。他國がけ・又傳（またづて）・又咄にては、疑事なりと御叱あり。其座に畠山入庵其子長門守居られ申候に付、上意には、荻田事は、入庵存ぜらるべく候間、語り申すべき旨なり。入庵承り、荻田は、我等組にて罷在候。孫十郎と申せし時、越中陣にて、敵味方、堤・土手を抱へ睨み合ひ居る時、孫十郎一番に走り出で、鎗を打込み、合戰を始め候手柄と、三郎景虎と景勝取合の時、北條丹後守を鎗付け候と、兩度武邊御座候。其外は、少しづつの事にて候由、憚らず申上げらるゝ由、大御所は、扨こそ和泉が申分と、うらはらに違ひたり。さり乍ら景勝家にて、口をも聞き候者にて有之に、左樣に少身にては、人がそつになるに、越前の息子

は、合點の行かぬ者なりと御意故、荻田主馬を、越前にて、一萬石になされし由。

一、荻田主馬、當家を立除きて後、三股九兵衞・蓼沼日向守に、總の指麾（さいはい）を申付け、武者奉行に出す。三股は當家譜代、蓼沼は關東者。何れも覺ゆゝしき兵なり。越前の黄門秀康樣、此兩人を召抱へられたき由、畠山長門守を以て仰せらる。其段尋ね候へば、名染（なじみ）譜代の主にて候間、御免候へとて、兩人共に參らず候由。（三股九兵衞子孫は、只今三股清右衞門なり。只今五百石。）

一、安田上總介順易（としやす）は、大江千里が末にて、毛利氏なり。安田城主たるにより、安田と號す　は、謙信以來數十度の手柄、軍功の侍大將、人數を廻し、度々の譽あり。されども毎度手疵を負ひ候。鐵上野介も、度々の武邊あれども、武勇にかさなく、將帥の量なし。杉原常陸介親憲・本庄越前守繁長は、武勇の大がさありて、將帥の器量、世に類多からざる程の大將なり。何れも謙信代より、先手を致したる者なり。直江山城守兼續は、文者にて、詩聯句の達者、連歌・歌道勝れ、口上辯舌能く、大音にて、公儀・座配無雙なり。大男にて勿體よく、天下の御家老にしても、然るべき見事なる侍なりべしものにて、諸大臣と交り、石田三成・淺野彈正などと、牛角の座配。當家にて、卅二萬石なり。大膽者にて、いひたき事をいひたる由、千坂對馬守も、辯舌明に才智ありて、男振人に勝れ、何

方へ使者に遣しても、あつぱれなる武士なり。岩井備中守は、元來信州飯山城主にて、謙信小姓立、見事なる男にて、十八度の武邊、才智辯舌ありて名高く。其上千利休に茶道を學び、數寄上手なり。安田上總介は小男にて、手疵故少し足を蹇く。眼振光（なゝざし）ありて、面にも手足にも、錦・太刀・矢・鐵炮の痕多し。何者が見ても、大剛の侍大將なりと、いはぬ人はなし。中々すどく、氣高き侍にて候ひつるなり。直江山城守、連歌の發句に、紹巴の褒美あまたあり。其中、聞覺えたるに、

葉を重み夏は動かぬ柳かな

一、上杉家に、謙信代より、五本・七本の對（つる）の旗なし。番指物などとて、上方の如くに對にはせず、面々の思ひ〳〵の指物、是は隊（なへ）が知れ、人數の多少が見えて、怪しきとある事なり。加藤式部大輔明成を御改易の時、公方大猷院樣御前へ、上杉彈正大弼定勝を召し、式部が會津城を請取り、幷に番手の人數を遣すべく、騎兵二百五十騎・鐵炮三百丁・旗三十本遣すべき旨上意なり。定勝謹んで、騎兵・鐵炮の儀は奉〻畏候。但私家に、旗は無二御座一候が、如何仕るべきと申上げられ、酒井雅樂頭忠治、其段承り及び候間、家風に致さるべき旨申渡さるゝに付、上松右

馬助本名木曾主殿。是は當家譜代の士にあらず。彈正定勝代に抱へし新參なり。松木内匠を大將にて、侍二百五十騎・鐵炮三百丁を、江戸より一左右の日に、米澤を立たせ、會津へ遣し候なり。是れ寛永二十年五月十七日の事なり。後長尾攝津守と號す。後上杉頼母と改む。只今の上杉權大夫父なり

一、景勝は小男なれども、何樣にも貌魂（かほだましひ）、何百人の中にても、無類なる大將なり。一代詞寡く、笑ひたる事なし。彈正定勝は、慈悲なる人にて、士卒を憐む故、家中上下思付く事淺からず。謙信・景勝兩代に、家を立除き、又は死失せ、追放に逢うたる譜代の侍共の子孫を、大方呼返す故、諸人悦ぶなり。

一、永祿七年七月五日に、宇佐美駿河守定滿初め定行と、長尾越前守政景と、信州野尻城下の池にて生害の後、時々光物出て來、其上に、魚なくなりたり。愷なる事なれば、書き記すものなり。政景は、龍巖寺に葬る。憲德院匠山道宗と號ず。定滿は雲洞院に葬る。法名は養勇庵良勝儁公と號す。雲洞院は、代々宇佐美菩提所なり。駿河守一代、人數扱ひ、下知に持ちたる軍配團扇、幷に宇佐美の系圖を、雲洞院什物に納むる。寬永の初、雲洞院の僧、相論（爭カ）訴訟の事にて江戸へ來り、寺の什物を持參。公方大猷院樣御耳に達す。宇佐美定滿が軍配團扇を上覽なされ、武功名高き侍の持ちたる兵具なり。疎略に仕るべからざる旨上意にて、箱を仰付けられ、又越後の雲洞院へ、御返納成され候。其軍配團は練物にて、緣は金物あり。柄には、宇佐美駿河守藤原定行と鐫入れて有り之由、酒井讃岐守忠勝・松平伊豆守信綱御物語ありと、上杉宮内少輔長貞の談なり。右越後の雲洞院は、曹洞派にて、五代目の管領上杉安房守憲實、應永廿七年の建立なり。

一、新發田因幡守治長、其子は源太治時、因幡が伯父道如齋といふ。上杉代々の家臣、殊に大身なり。信長公、此新發田を引付くる程ならば、景勝退治容易くあるべきと、了簡ありて、會津の領主葦名盛隆へ下知ありて、盛隆より、又赤名城主小田切參河守に通じ、夫より新發田へ内通ありて、同忠の行成（てだて）就する。天正十年三月、景勝の小舅武田勝頼を、信長公退治。夫より直に越後へ攻入らんとの議定故、其二月に、新發田一類叛逆して、新發田城・五十公野（いそみの）の城に楯籠る處に、信長公は、甲斐・信濃を打平げつゝ、直に歸洛ありて、越後へ攻入り給ふ事延引なる故、新發田色を失ふ處に、其六月、信長公御父子御切腹。新發田彌〻力を落す、景勝より人數を出し、附城を構へ攻めらる。葦名盛隆も、上氣（うはけ）は、景勝へ入魂の振にて、赤谷

城を取次のつなぎにして、ひたと兵糧・玉藥・人數を繼ぎて運送する故に、新發田六箇年支へて落城なし。六年目に、關白秀吉公の御扱あり。帝にも宸襟を惱まされ、青蓮院尊朝親王に仰付けられ、長谷の三位幷に辻坊法眼を、越後へ下され、色々御敎訓ありしかども、新發田曾て御受申上げず。六箇年目（天正十五年）十月三日に、新發田落城なり。此時も、會津よりの絆（つなぎ）の城赤谷を攻落し、糧道を絶ちたるによりて、落城なり。新發田が妹は、色部修理亮が妻なり。新發田因幡守、色々に行を運らし、色部を語らひけれども、主君とは思替へ難ければ、色部少しも變らず、此度も先手致し、城を攻落す。因幡守も、遺恨淺からずして、他の手へは構はず、色部が旗を目掛けて乘込み、死狂に働き、遂に色部が陣中にて討死す。色部は、因幡守が首を取りて、景勝へ進上。忠義無二の奉公せしなり。

一、初鹿傳右衞門、江戸にて、上杉彈正定勝へ申され候は、我等儀は、三十騎衆と申して、信玄近從にて候。川中島合戰の時、御幣川の中へ乘込み、合戰の砌、謙信乘込み、信玄と大刀打。信玄を疊みかけて切り給ふを、我等突かんと思へども、突き得ず。鎗の柄にて打ち候ひき。後、永祿四年の川中島合戰に、荒川伊豆守乘込み來りて、信玄と切結ぶ時は、大勢懸付け、荒川を討取り候と語られし由。

一、天文廿三年八月十八日、川中島合戰に、謙信直に乘込み、信玄と太刀打、二箇處まで切付けられ候を、甲州方にて、謙信にてはなし、荒川伊豆守なりと沙汰せし由を、伊豆守聞及んで、深く心底に挾み居りしが、納の川中島合戰に、眞先に乘込みて、信玄を見付け、太刀打して、卽ち討死せしなり。類稀なる大剛の兵なり。

一、慶長十九年霜月廿六日、大坂表信貴野合戰の節、穴澤主殿助盛秀、天下無雙の長刀の名師なり。當家坂田采女、老武者なりしが、鎗を持ち、敗軍の大坂方を追ひ行く處に、大男、黑具足にて、長刀を杖につき、立跨りて控へたるが、坂田を見て、大坂方穴澤主殿助盛秀と名乘り、坂田鎗を突懸くれば、彼穴澤長刀にて刎ねて、手本へ入り來るを、坂田鎗を捨て、むづと捉（くゝ）んで轉ぶ。上になり下になり、窪き處へ轉び落つる。穴澤大男故、上になるを、坂田下より脇差を抜き、二刀刺し、跳ね返して首を取る由。

一、當家中條與次郎は、越後にては中條城主、會津にては鮎具城主なり。此中條が家人落合清右衞門は、大剛の兵なり。天正十二年八月に、景勝出馬ありて、新發田城を攻めらるゝ時、

八幡の砦より敵一騎、赤縅かけ鹿毛の馬に乘りて駈出づる。内々城内へ禁裏より、扱の敕書來るを、通じたきことありて、何者にても生捕にせよ、其者に言含め、城中へ申遣すべしとある故、只今城より出でたる武者を、誰が生捕るべきといふ時、落合清右衞門、少しも思惟なく乘出で、彼敵と引組んで、少しも働せず、生捕にして歸る。皆々舌を振ふ。其場に井筒女之助・井上三郎兵衞・宇佐美民部・恩田越前守・寺瀨對馬守・仁科孫三郎を始め、倔強の剛兵十騎餘、馬を立雙べ居たる中に、清右衞門一騎抽んでたる働、世の人感歎す。此清右衞門は、會津處替の節、浪人して、安藤右京進重仲方に奉公する由。

一、右の翌日八月十八日に、新發田因幡守、二千餘にて切つて出づる。景勝先手直江山城守兼續・鮎川與五郎・春日右衞門・横田式部・篠野井彌七・鹿沼右衞門・川田玄蕃・穗村造酒允・壬生刑部左衞門・大岩新右衞門十頭の隊、先懸致しける處を、新發田に切立てられ、盡く敗軍。討たるゝ者數を知らず。然る處を畠山入庵、其時は上杉民部とて、二の先なるが、少し高き處へ旗を押立て、民部、采配を執りて横鎗を入れ、新發田を突崩す。入幡砦の涯佐々木川まで追討に致されける。敗軍の十頭の先手も立歸り、行懸に、入幡砦を攻落す最中、景勝も、旗本を押詰め、床机を立ち給ふ處へ、先手高名の輩、首を提げ〳〵、御目見に來る。爰に前の琵琶島城主宇佐美駿河守定行が子民部少輔勝行、父生害にて、本領沒收せられ、浪人となり、景勝勘當せられ、小千谷五泉邊に匿れ居りしが、いかにもして景勝勘當を赦され、本領還住せんと志し、朱傘に金の短尺の指物、宿月毛の馬に乘りて、新發田陣へ懸入り、倔強の敵二騎に懸合せ、一騎は切つて落し、一騎は引組んで討取り、甲首二つ提げ、其身も馬も血になりて、景勝旗本へ馳せ來り、平林内藏助（平林十八歳にて小姓なり。）を頼み、御勘當御免なされ、此高名の首を御實見に入れ、御目見仕度と望み候に付、此由を景勝へ申上ぐるに、景勝氣色俄に變り、眼の光炬の如く、平林をはつたと睨み、兎角の言なかりしかば、平林も頭を低れ、重ねて申上ぐるに及ばず。宇佐美民部も、討取りたる二つの首を捨て置き、泣々罷立ちて除きけり。景勝は、實父政景を殺したる宇佐美駿河が子なれば、父の仇の子たるを、何とて勘當を赦すべきとの事なり。此平林内藏助は、長命にて、當家播磨守綱勝の傅に附けられ、近年まで存生し、直に物語せしなり。

一、慶長三年、會津へ景勝入部。蒲生家の浪人數百人召出す。栗生美濃守・外池甚五左衞門・

岡野佐内・布施次郎右衛門・北川圖書・高力圖書・青木新兵衛・安田勘助・小田切所左衛門・横田大學・正木大膳・長井善左衛門・佐野源太・堀源助等なり。關東浪人には、山上道及（首供養三度まですする由）上泉主水（武州深谷城主の上杉左兵憲盛の家老なり）・車丹波守（火事の指物）等數十人、上方者には、水野藤兵衛・前田慶次郎・宇佐美彌五左衛門など數十人、召抱へらる。右の内前田慶次は、加賀利家卿の從弟なり。景勝へ初めて禮を申上ぐる時は、穀藏院ひよつと齋と名乘る。其頃夏なりしが、高宮の二幅袖の帷子編笠を着し、異形なる體なり。詩歌の達者なり。直江山城守兼續も學者故、仲好し。直江宅にて、慶次論語の講釋致し、又は源氏物語の講釋する。慶長五年九月、景勝名代にて、直江山城守四萬餘にて、最上へ出陣する砌、慶次は、黒具足に猩々緋の羽織、金のいらたか珠子を頭に懸くるに、珠子の房は金の瓢箪、背へ下るやうにかける。河原毛の野髪、大しだの馬に、金の兜巾を冠らせて打乘り、三寸計りの黒の馬に、緞子の纏に、干味噌・乾糗を入れ、鞍坪に置き、種子島二挺附けて、乘替に牽かする。最上除口に鎗を合せ、高名耳目を驚かす。水野藤兵衛・藤田森右衛門・韮塚理右衛門・宇佐美彌五左衛門と慶次と、以上五人、一處に鎗をする。此時最上義光、伊達政宗加勢を一手に合せて、上杉勢の除口を附慕ふに付、中々大事に及び、杉原常陸介・溝口左馬助、種子島八百挺にて防ぎ戰ふと雖も、最上勢强く突立つる故、直江山城怒りて、味方押立てられ足を亂し、追ひ討に逢はん事、只今の中なり。扨も口惜し、腹を切らんといらてるを、前田慶次押止め、言語道斷、左樣に心弱くて、大將のなることにてなし。我に御任せ候へとて返し合せて、右の通水野・韮塚・藤田・宇佐美と慶次と、五人にて鎗を合せ、最上勢を突返し、能く引拂ひ、何事なく引取るなり。關ヶ原御陣過ぎて、景勝、米澤へ移り給ふ時、慶次を諸方よりほしがり、高知にて呼べども、我主は、景勝より外はなしとて、一生妻子も持たず、寺住居の如くにて、在鄕へ引込みて、彈正定勝の代に、病氣するなり。連歌を慶次嗜み、紹巴の褒美の句あまたある內に、覺えたるを記す。

賤が植うる田歌の聲も都かな

一、青木新兵衛は、走の早き事、馬と同前なり。黒縅に雜毛の棒の出をして、十文字の鎗、瓦毛の馬にて、瀨上松川にて、政宗と合戰の時分に、甘糟備後守組にて、手柄なる働あり。後は越前黄門樣へ召抱へられ、其子孫加賀に奉公。栗生美濃守は、元の名、寺村半左衛門といふ。蒲生氏鄕に奉公の時、秀吉公、筑前の巖石城を攻め給ふ時に、蒲生源左衛門と同じ一番登に

て、秀吉公御感狀下さる。素性將帥の量ありて、先づ大男の大力、上杉家にて知行七千石なり。岡野左内、度々の軍功、世に名高し。瀨上合戰に、政宗と太刀打して、手負はせたる剛者なり。身上五千石なれども、福人にて、金銀夥しく持ち、國々に藏あり。會津陣の時に、帳と貸金の手形を箱に入れ、我れ討死せば燒棄てよと申付け、諸傍輩にも、殘らず陣用意の金を配り與へ、景勝へも一萬兩進上し、御事はかしまじけれども、私明日にも討死致せば、入り申さず候間、差上げ申すとて、上るなり。景勝、米澤へ移り給ふ時、暇出て浪人となる。政宗より、三萬石呉るべしとて呼ぶ。左内申すは、蒲生家に名染候間、歸參仕候とて、政宗へ行かず。秀行氏鄕の子へ歸參するなり。子の左衞門は、秀行へ出頭にて、竝なき寵臣なり。秀行逝去の時に、追腹切る。左内は、宰相忠鄕秀行の一男。は大御所樣姬君御母の代に病死、常々御影にて蕃へ候とて、金三萬兩・正宗の太刀一腰、遺物に上る。中書忠知秀行二男へも、景光の刀・來國光の脇差・金子三千兩差上げ、其外、知音・近付・出入の醫者まで、五十兩・百兩・二百兩配り與へ、年來貸し置く金子の手形、箱に入れ燒き捨て死去なり。其子なく、孫の源五郎家督を續ぎ、左内に替らず、猪苗代主となる。忠鄕逝去、男子なく、家斷に付、源五郎浪人となり、大津の三井寺にて病死するとな

り。

一、景勝・定勝代まで、直江山城守兼續一人にて、萬事國の仕置・公事沙汰までする。訴論をば、山城守一人にて、傍の人を拂ひ、刀を傍に置き、百姓・町人は、白沙へ呼び對決させ、侍をば座上へ呼びて樣子を尋ね、何事にても、大方當座捌きに賞罰を行ふ。家中の訴訟も、手形證文の判形も、兼續一人にて事を濟ます故、捗行くなり。直江、學文多智分別者故、順路なる事多し。元より謙信傍にて生立ち、武功も重る故、世の覺、人の用も厚く、秀吉公へも出頭し、大御所樣・秀忠樣へも出頭なり。會津にては三十二萬石を領す。米澤へ景勝移り給ひて、六萬石を賜はる。我身一萬石を領し、五萬石は、諸傍輩に配分。一萬石の私領を、又五千石分けて、家中へ與へ、我身五千石なりしを、景勝より、新田を開き與へ、又一萬石になり、死去なり。

一、關ヶ原御陣以後、直江山城守御誅伐なさるべしと、大御所樣思召候へども、左候へば、他國にも其例に引く者多し。一人を赦して、天下の人の心を安んずる所なりと、御遠慮ありて、御助なされ、剩へ本多上野介正純が弟長五郎對馬守と號すを、安房守に任ずを、壻養子に直江に下され、御懇なり、治部方したる諸大名の家老共、是を見て、治部と心を合せ、謀叛の張本したる直江さへ、

御免なさる。まして我々末々は、氣遣なしとて、皆安堵する由。寛永五年十二月十九日に、直江山城守兼續死去。法名英猷院達三全智居士。

一、直江山城守兼續は、木曾殿四天王樋口次郎兼光が末なり。聚樂御城中にて、諸大名列座の中にて、伊達政宗、懷より金錢を取出し、直江山城を呼び、城州是を見候へ。昔なき事なり。斯樣に金銀にて、錢を鑄る、見事なる物なりとて、直江に渡し見する。山城守、扇を抜き、少し披いて金錢を請けて、跳返し〳〵見て、實に珍物にて候といふ。政宗見られ、城州手に取りて見候へといはる。直江申すは、我等事、輝虎目金にて、用にも立つべき者と思はれ、景勝へ附けられ候。何時も采配を執り申す手にて、斯樣のむさき器は、いろはぬ者にて候と申し、金錢を疊の上へ、扇より移したる故、政宗赤面せられ、一言の返答なかりし由。亦慶長三年、會津へ景勝移らるべき砌、横田式部といふ者、召仕の茶道坊主を斬罪。元來誤なき事なれば、坊主の親類大勢起りて、國政に京都より、前田德善院玄以・石田治部少輔三成下向ある。此兩人の方に訴ふる。玄以・三成、其段直江方へ申すべしと指圖あるに付、直江方へ詰むる。兼續對面し、皆々申分尤なり。左候はゞ、主人横田式部に、詫言の爲め、銀五十枚出さすべし、堪忍せよと扱ふ。彼の訴訟人共、中々怒りて歸る。又玄以・治部に訴ふれども、取合はず、是にて又山城守方へ詰むる。直江、左候はゞ、銀七十枚出さすべしと扱へども、彼輩七十枚が七百枚にても、死したる人が歸り候か。中々分もなきことを御申すとねだる。兼續、其時、札を一枚取寄せ、一筆書きて、直に持たせ出で、訴訟人共の内、張本人は幾人ありと尋ぬ。其坊主の兄と伯父と、是に候とて、兩人出づる。山城守曰、何と扱ふ共、汝等ども承引せず。兎角此上は、彼坊主を再び今生へ呼還さずば、汝等が心に叶ふべからず。さり乍ら、誰にても呼に遣す使なければ、其者の兄と伯父と二人、迎に遣すべし。此高札を持つて、早々地獄へ參り、閻魔王に見せて、彼坊主を召連れ歸るべし。乃ち其文を聞けとて、山城守、高札を讀まる。

雖下未レ得二御意一候上、一筆申入候。然者横田式部召使之茶堂坊主、親類共呼戻申度ト、達テ申二付一、卽親類二人迎二越申一候。急度御返信可レ有候。恐々謹言。

二月十日　　直江山城守兼續

閻魔大王殿參

と書付け、讀み聞かせ、彼張本二人、其場にて斬罪し、彼の高札を前に立て、二人の首を獄門

に梟くる故、徒黨蛛の子を散らすが如く逃失せ、國中嗷訴一人もなく、靜謐するなり。

一、川中島合戰に、甲州方山本勘助討取りたること、弘治二年三月、廿五夜の事なりといふ説と、永祿四年九月十日の事なりといふ説、兩樣あり。

一、當家に、西方院といふ眞言宗の法師武者あり。數度の鎗をする故、異名を鎗坊主といふ。景勝より、皆朱の武具を免し給はる。一代四十餘度の武邊に、遂に手疵を蒙らず。景勝より、六千石の知行を給はるに受けず。疋如（するすみ）の身にて知行取りて、一つも入らずとて、藏米五十石にて、越後より會津へ供する。遂に米澤にて病死するなり。

一、謙信、靈社驗佛へ願書を納められたるを見るに、信玄を戰地へ引出し、快き合戰を、佛力神力にて仕りたし。何卒出合ふ樣にとの祈なり。信玄は戶隱山を始め、方々寺社へ願文を納め給ふも、皆輝虎呪咀調伏の趣なり。信玄は、よほど謙信をうるさく思ひ給ひたる樣子なり。

一、謙信は、大方具足を着ず、黑き木綿胴服にて、鐵の圓笠を着し、三尺程の靑竹を馬上に持ち、人數を追廻し下知せらるゝ。中々摩利支天の再來ならんと、世擧つて恐るゝ由。永祿十二年、關東陣の砌、太田資政入道三樂、先陣に備ふる處に、北條方へ內通あるか、別心の色ある由申來る。諸人如何と存ずる處に、謙信只一騎、步侍十人計りにて、急に三樂陣へ乘込み、三樂三男安房守、未だ十二三歲になりたるを、謙信ひしと手を取り、扨々好兒にて候、輝虎養子にすべしとて、連れて歸らるゝに、三樂も軍兵共も、謙信の威勢に壓され、一言を出す事ならざる由。斯樣の猛威の人なれども、詩歌に工に、優しき風雅あり、畠山入庵內室は、謙信姪なり。十一二歲の頃、殊の外愛せられ、關東陣の時は、兒の出立にして、小具足の上に、長絹の直垂を着、太刀刀さゝせ、馬に乘りて、老女三人介錯に付きて、輝虎供に連れられたる由。此姪は、卽ち畠山下總守義貞の御母儀なり。父は長尾政景、母は謙信妹。後には仙桃院と號す。永祿七年の秋、信州にて、政景を、宇佐美駿河守定行が殺したる時も、大方謙信の內意とある事、粗ぼ知れたる故、仙桃院は、謙信に向ひて、越前殿果てられ候は、偏に戰場にて御用に立ち候同意に候間、義景景勝は申すに及ばず、娘二人も御見捨あるまじと、申されたる由。斯樣の事にて、宇佐見駿河守遺跡は、强く頽（つぶ）して、子の民部をも、深く二代まで勘當せられたるなり。今に至るまで、宇佐見駿河守事は、當家にては忌んで沙汰せず。先祖の讐たる故なり。

信州川中島合戰聞書井上杉家遺老談筆記

一、慶長十九年大坂御陣。霜月廿六日の朝、兩御所樣より、小栗又市・佐久間河內守御檢使に下らるゝに付、景勝人數を出し、信貴野口の柵を攻め取り、井上五郎左衞門を討ち、渡邊內藏助を城へ追込み、柵を取る時、烈しき合戰あり。上杉方多功豐後守・市川左衞門（市川左衞門は會津にて八九千石の物主なり）・北條清右衞門・上泉主水・櫻囚獄・大股八左衞門・同彦六先陣に進み、勝れたる手柄あり。北條・上泉・櫻・大股兄弟討死、多功豐後・坂田采女手柄高名、遂に柵を取敗く。景勝下知せられ、敵の出づべき道筋は構はず、大和川の堤を掘切り、柵をふり、鐵孫左衞門に、鐵炮二百挺付けて是を固むる。皆人、敵の出づべき處は構はず、一町も堤の脇の堤を取固むる事、如何と不審する。其日午の刻、大坂七組幷に大野修理亮治長・竹田永翁押出し、當家一の木戸にて合戰。先手須田大炊助長義、此相隊石坂新左衞門、百挺鐵炮大將、一時計鐵炮軍あり。石坂新左衞門討死。組二十餘人討死、須田大炊助押立てられ、三町餘敗軍。二の先安田上總介順易手にて、橫鎗を入れ、大坂勢を突崩す。島津玄蕃鎗を合せ高名、松本助兵衞・北村茂助、勝れたる高名なり。當家の一手の大將市川左衞門討死。關十兵衞・針生市之助・原庄兵衞・駒澤與五郎、晴なる手柄して討死。遂に景勝方打勝ちて、大坂勢を追崩す。岡村猪之助・小早川左兵衞・竹田兵庫を始め、三百餘討取る。大坂方大和川を便（たよ）り、蹈みこたへ候を、初め掘切り、柵を附けたる處より、鐵孫左衞門、二百挺の鐵炮を打立て、橫合に射惱ます故、大坂方遂に負けて、城中へ引入る。其日の合戰、景勝十分の勝になるなり。初に道筋を構はず、思慮もなき堤も掘切らせ、鐵孫左衞門を置かれたる思案、凡慮の及ぶ處にてなしと、景勝を生神の如くに、恐れ感ずるなり。須田大炊助長義、我隊の敗軍を恥ぢて、上下六七人にて、敵の中に殘り、大炊自身太刀打高名、直取の首三つ、手疵二箇處、相從ふ家來五人、共に高名、首を取る。須田が隊にて、敗軍以後、大將大炊助見えぬに依りて、討死かと思ふ處、敵の中より、大炊助家來共に六人、皆首を提げて出て來る。手柄比類なし。

一、杉原常陸介親憲は、佐竹義宣敗軍せらるゝ。今福堤へ、橫合に百五十挺の鐵炮を打たせる故、木村長門守・後藤又兵衞、手勢打立てられ敗軍。常陸介手柄故、佐竹義宣、師場を取返す。佐竹義宣は、六百人の足輕に、頭四人ならでなし。今日鴨生堤にて、足輕隊亂れ、佐竹敗軍。木村長門・後藤又兵衞に追立てられ、田の中へ追込まれ、追打にせらるゝ。家老澁井內膳討死。義宣より、景勝へ加勢を乞ふ。杉原常陸介一手を遣す。常陸介も、高枝川の沼を危み、

（將軍家より御感狀・傘光の御腰物・御小袖添へ拜領。）

蓬澤安藝守を覘諜に遣すに、敵の人數、足の入る程を見て、沼は淺く候といふに付、常陸介卽ち押寄せ、大坂勢を打立て、數十人射倒し追返し、堅固に引取るなり。

一、此時景勝は、三百餘にて、信貴野の横堤に、日の丸の旗・毗の字の旗・淺黄の扇の幟を押立て、城の方に向ひて、床机に腰を懸け、早天より晩の合戰の納るまで、城の方を守りて、脇目もふり給はず。三百餘の軍兵共、鶴翼に備へて跼り、手を突いて仰ぎ視る者なし。法令の嚴重なること、陣の勢の强きこと、行儀の正しきこと、近代未聞なり。丹羽五郎左衞門尉長重は、此口の寄手なり。景勝、後に陣取り、合戰最中に、景勝陣へ見廻に行きて申合せ、先手へ押出し、上杉先手と押竝べて、鐵炮を打たする。其時長重は、上杉隊の行儀の見る事なる事、法度の正しき事を、後々まで語られ感じ給ふ由。右の通り、景勝旗本三百餘畏り居て、景勝を恐るゝ事、敵の矢・鐵炮よりも甚し。先手目の前にて、懸けつ返しつ、算を亂し合戰し、打つつ打たれつ勝負するに、少しも動かずして備へたるを見て、目を駭かさぬ者なし。

一、此度大坂表にて、佐竹義宣事、木村長門守・後藤又兵衞に追立てられ、景勝へ加勢を乞ひ、杉原常陸介親憲が横合を入れて、木村・後藤を追還したるにて、佐竹初めの師場を取還す。義宣の父義重も、武勇勝れず。天正元年に、宇都宮貞林に恃まれ、關宿城後詰に出でられ、謙信を恃みて、一處に陣取る時、謙信申さるゝは、我々一手になり、利根川を越え、關宿城へ後詰し、氏政を追拂ひ候はんと、勸め申されたれども、氏政、大軍を惧れ、利根川を越す事を、義重肯ひ給はぬにより、謙信大に怒り、左候はゞ、我等人數を引分け働き、各別の弓箭に仕るべしと斷りつゝ、輝虎八千にて小山を立ち、義氏樣の御所古河御城、幷に北條氏政持の栗橋城・館林城、其外敵城四五箇處を押通り、重ねて利根川を越え、寄別城・菖蒲城・岩槻城を始め、氏政領分を悉く燒き働せられ候に、日數四十日餘の間、武州・上州を、横縱に働かるゝに、終に氏政も、關宿の陣城に四萬ありと雖も、輝虎に恐れ、陣城の外へ一人も出合はず。其外の城々も、皆門戸を杜して、謙信に旗を合する敵なし。然る故に、閏霜月十九日に、輝虎、厩橋城へ入數を納め候。總じて北國・關東も、紺地に日の丸の旗を見ては、すはや輝虎とて、皆出合はず。佐竹義重は、遂に關宿の城を後詰すること叶はず。謙信も、義重の弓矢、未だ若く候と、嘲り申されたる由。關ヶ原陣の前も、景勝へ一味し、澁川內膳・戸村豐後守を二頭、棚倉にて加勢し乍ら、家康公御發向を聞き、人見主膳・緒貫大藏を、路次まで使者に差上げ、表裏なる仕方、上杉家

にては、佐竹をば一向に見下し居、此度大坂今福合戦に仕負け、木村長門守・後藤又兵衛に追立てられ、加勢を乞ひて、杉原常陸介が横矢にて、大坂方を退く。中々柔弱なる家なりとて、佐竹をば、當家にてはをかしく存候。

一、佐野天徳寺は、江戸御城にて、上杉弾正大弼定勝に向ひて、御祖父謙信の御武勇の威勢は、兎角申されず候。我等若き時分には、佐野は御旗下にて候ひき。輝虎、越後より、上州厩橋城へ御着、二三日人馬を休め、拔關東筋へ打つて出て、縦横に働き給ひ、或は五十日、或は七十日の間は、喩へば大雷して、夕立の降る如く、敵も城外へ出づる事叶はず。拔謙信は、働を仕廻ひ、厩橋へ歸城ありて、方々の仕置十日餘ありて、越後へ歸陣せらるゝに、謙信は猿京を過ぎて、越後路に入り給ひたる一左右を聞きて、關東中の北條方・武田方等の敵城は申すに及ばず、上杉殿旗下の城々も、安堵の思をなし、最早心易しと悦び候ひき。輝虎越後より出陣と聞きしは、敵も味方も恐れて、安心なく候と語られ候。其座に酒井讃岐守忠勝・阿部對馬守重次を始め、列座の大名・小名之を聞き、感ぜられたる由。

一、謙信瘧を煩はれ、大方平癒。病中慰に、石坂檢校に、平家を語らせ聞き給ふ。鴎を一句語り納むる。平家も、殊の外出來て聞く事なりしに、輝虎の顔色變り、兩眼涙ぐみ給ひ、只今平家を聞くに付けても、口惜しく又心細き事かな。本朝は、神武天皇、武徳を以て治め給ひてより以來、相繼いで、君にも臣にも勇者ありしに、世季になり、次第に武威衰へたる驗は、彼の源三位頼政が一族八幡太郎陸奥守義家が時、當今堀河院御惱あり。義家を召して、妖怪を鎮められけるに、殿上の下口に伺候し、弓の弦音を三度鳴し、陸奥守鎮守府將軍源朝臣義家と高聲に名乗りしに、妖怪忽に退き、再び來る事なし。帝の御惱御平癒なり。義家が武威甚だ盛なる事此の如し。然るに頼政は、怪鳥の眞中を射通して、地に墜ちても、猪早太つと寄り、九刀刺して、やう〳〵怪鳥を平げたる事、何れも如何思ふぞ。頼政代と義家代と、相去る事僅か六十年なるに、武威の衰へたる驗は、義家は弓の弦音にてさへ、妖怪恐れて立去りしに、頼政は射墜して、まだ其上を、猪早太九刀刺して治まりたる事、武威の盛衰掲焉。頼政代より輝虎時代、既に四百餘年。さてこそは武威も又衰へたらんと思へば、口惜しく又心細しとて、涙を流されける由。

一、文祿三年十月、景勝上洛、伏見にて、景勝亭へ、秀吉公御成。其日樽中納言に任じ、從三

位に叙せらる。上杉は、勘修寺の流なれば、向後清華に準ずる旨敕諚あり。上杉は、足利公方家の外戚、（上杉掃部頭頼重の妹清子、管領代々なり。謙信は、永祿二年四月上洛。六月廿六日に、公方義輝公より御内書・塗輿・朱柄傘・菊桐の御紋・屋形の號・輝の一字御免。武衛・細川・畠山、三管領に準ぜらる。今又景勝は、先祖上杉氏始まりて以來、先例なき中納言に昇進せられ、清華に準ぜらるゝ事、當家の高運、面目なる事なれば、末代の爲め之を記す。

一、慶長五年九月廿九日、最上陣の除口に、山形義光二萬餘にて、上杉勢の跡を付けて、大事に及ぶ。杉原常陸介親憲溝口左馬助、種子島八百挺にて、段々に打立ち、防除にする。其武者扱、中々見事なり。最上方には、鮭延越前守・東根常陸介・里見越後守・草刈備前守等、雲霞の如く追ひ來る。直江山城守乘續返し合せ、下知するに付、川田玄蕃允・宇佐美彌五左衞門。韮塚理右衞門・藤田森右衞門・水野藤兵衞・月岡八右衞門・友町大膳等殿にて、返し合せ〳〵防戰す。是れ皆上杉家の精兵なり。前田慶次、猩々緋羽織金の切圍扇の腰差、烏黒の馬にて取つて返し、宇佐美民部は、黒縅に銀の天衝の出、蒼黒の馬に乘り、其子兵左衞門、銀具足に黒烏毛の羽織、蹈雪の馬に乘り、取つて返し、殿の勢に馳せ加はる。大將方には、五百川修理・春月右衞門、采配を振つて下知する。今朝卯の刻より申の刻まで、一里半の間にて、廿八度の合戰。溝口左馬助大將分なるが、三間一尺の黒じなひ差し、洲川の橋爪にて立ちこたへ、鎗を合せ追ひ來る。最上勢、政宗勢を追ひ返し、遂に物離れして引取る。溝口、大事の深手負ひたるが、直江に向つて、夜陰に及んで引取る事、味方落度たるべし。あれに見えたるは、曼陀羅が鼻といふ山なり。あれより半里此方に、野陣を取り給へと申して、左馬は乃ち死す。然る處へ杉原常陸介乘り來りて、直江に向つての申分、陣場の處、山を阻つべき心持、溝口が言に違はず、皆感ずる由。此時最上の大將分天童彌七郎を、景勝方二本松右京進義國討取る。此二本松右京が父も、右京進義繼といふ。元來奥州管領畠山上野介高國が後胤なり。去る天正十三年十月八日に、宮森にて、伊達輝宗を生擒り、引立て除くとて、政宗に追付かれ、逢隈川弘中の渡口權現屋地といふ處にて討死す。其子國王を、又二本松右京と號す。景勝抱へ置く。此度手柄を振ひ、天童彌七郎を討取る。只今の二本松外記と申すの先祖、又前田慶次・韮塚・永野・藤田と一所に、鎗を合せたる宇佐美彌五左衞門は、元來尾張宇佐美なり。上杉家より暇出で、越前の黄門樣へ召出されて、落合美作守組になり、大坂兩御陣にも手柄あり。

其子供、近年井上河内守家に奉公する由。

一、天正二年八月、能登陣なり。七尾城を、九月十一日に、謙信攻め落す。同月十三日夜、明月なれば、七尾城にて詩歌の會あり。

謙信の作、

露滿二軍營一秋氣重　數行過雁月三更

任他家鄉念二遠征一　越山併得能州景

又連歌の發句、

謙信

月澄めばなほ靜なり秋の海

其後、越前の細呂木（ほそろぎ）にて、

謙信

野伏する鎧の袖も楯の端も皆白妙の今朝の初雪

其以前、越中陣の時、魚津城にて、初雁を聞きて、

謙信

武士の鎧の袖を片敷きて枕に近き初雁の聲

右の外、一代の詩歌尤も多く。陣中にての作多し。剛將なれども風雅なる人にて、在京兩度乍らに、一條關白兼冬・西園寺右大臣公朝の方へ、謙信出入り、三條大納言公光に、源氏物語・伊勢物語の講談を聽かれ、紹鷗が流の茶道を學ばれたる由。亂舞・猿樂も嗜み、自身能を致さる。笛・太鼓も、勤められけるとなり。

一、上杉彈正大弼定勝と、蒲生下野守忠鄉（會津宰相事なり）は、無二の入魂にて、兄弟の契約あり。忠鄉は、氏鄉の爲めには孫、秀行の嫡子にて、家康公の御外孫、會津六十萬石の領主なり。定勝は、米澤三十二萬石なり。互に百姓まで、兩方申合せ、境目も睦じく往來す。南部信濃守利直も、忠鄉とは、殊の外に懇（ねんごろ）なり。是は仙臺と伊達政宗と三人の衆、仲惡しければ、何事も出て來らば、蒲生・上杉・南部三家言合せ、政宗を立挾みて打果すべしと、密々に堅く言合せなり。定勝・忠鄉・利直三人同道にて、上野の天海大僧正へ、夜咄に行き給ひ、歸るとて、三人乍ら馬乘連れ給ひ、途にて南部殿、馬かんばり勇みければ、南部殿大音にて、忠鄉・定勝へ呼懸け、相

公（忠郷宰相）・羽林（定勝左少將）此馬の勇み候を御覽候へ。明日にも何事もあらば、此馬に乘り、御兩人と申合せ、彼奴を立挾みて、打果すべしと申さる。忠郷・定勝も、から〳〵と笑ひ給ひ、仰せらるるにも及ばざる事なり。片目が頭は、我々が太刀の切先に懸けて、御覽に入れ候はんと宣ひければ、三家中の供の輩、皆之を聞きたることなり。忠郷は、寛永三年正月に、薨ぜらるゝに付、定勝中々愁歎にて、三十五日精進せられ、上杉家中の士卒は、申すに及ばず、米澤領内、十四日の間、殺生禁斷せられ、追善の法事あり。

一、右にも記す如く、新發田因幡守治長・同道如齋・同源太治時・五十公野采女申合せ、天正十年の春より、信長へ內通し、信濃口・越中口より、信長公攻め入り給はゞ、新發田・五十公野は、會津の蘆名盛隆を、胴勢にて、下越後より攻め上り、景勝を攻め亡すべしと、謀を定めしかども、其年、信長公生害ありて、行相違し、景勝人數を差向け、新發田を攻められ、度々の合戰、勝負區々なり。蘆名盛隆より、密に兵糧・玉藥を運送し、新發田に合力ある故に、六年まで持堪へ相支ふ。會津より越後境津川城に、金上兵庫居住すれば、金上方より、赤谷城小田切參河守方を、絆の城にして、新發田へ加勢するを、景勝察し、天正十五年の秋に、新發田表を蹈越え

て、赤谷城を攻め落し、小田切參河守を始め、八百餘人討果たし、會津合力の通路を切り、直に新發田城へ、景勝向ひ給ふを、披露ありければ、新發田も、此度最期と覺悟しけるに、家人波多野忠右衞門といふ大力の剛の者申しけるは、最早合戰にては叶ふまじ。赤谷表より、新發田迄の道筋、三淵といふ大節處にて、伏蟠りて、景勝一騎打に通り給ふを引捉んで、下の峨より、大河の淵へ墜ちて、倶に死して、主の本意を達せんと議定して、三淵に出でて、景勝を待懸けたり。三淵と申す切處は、山の腹を切通して、一騎打の路なり。上は青山峙ちて苔むし、路より下は、數千丈の石壁劍の如く、屏風を立てたる如く、其下は、大河漲り流るゝ淵なり。其路巾に岩穴あり。是に忠右衞門匿れ居て、景勝通り給ふを、跳り出でて引捉み、景勝を倶に、峨より下の淵へ飛墜ち、倶に死企せし處に、景勝赤谷を立ち、新發田へ推し給はんとせし砌、直路殊に近く候へば、三淵へ懸り推し給ふと、皆申しけるを、景勝思案して、大將は、危き處をば行かざるものなり。近路とて、切處を行き、必ず越度ある事多し。迂を以て直とし、患を以て利とする事、兵家用捨の大事なり。廻路にても、足場善き方へ推さんとて、鵐鴫峠へ懸り、本道を推し行き、三淵へは懸り給はざる故、波多野が行相違して、本意を失ひける。

景勝の智慮、凡人の及ぶ處にあらず。

一、景勝は、素性詞寡く、一代笑顔を見たる者なし。常に刀脇差に手を懸けて居らる。或時に、常々手馴れて飼ひ給ひける猿、景勝の脫ぎて措き給ひける頭巾を取り、樹の上へ昇り坐して、彼頭巾を蒙り、手を扠へて、座席の景勝へ向ひて點頭きたるを見て、莞爾と咲ひ給ひたるを、近習の者共、初めて見たるとなり。城下八幡小路を、輿にて通り給ひけるに、陪臣の歩若黨、だて染の帷子にて參り懸り、畏り居たるを、景勝見給ひ、好き若者なり、立つて歩むべし。男の振を見んと宣ひければ、彼者立上り、二反歩みて、又畏りたるに、景勝、俄に氣色替り、大に怒りたる形勢にて、あの奴牽いて參れとて、歩侍に兩手を牽張らせ、前へ引寄せ、己め、景勝を嘲哢せん事奇怪なり。屋形腹筋、いや〳〵といふ大紋を附けたりとて、拔打に誅し給ひける。帷衣の肩に、一手鏑矢を付け、裾に射捨てたる矢を紋に附けたりしを、見咎め給ひたるとなり。推前隊の時は勿論、或は上洛、或は江戸參府の時も、籃廻は申すに及ばず、供の胴勢まで、小聲咳聲もせず、數百人の上下無言にて、足音計りにて過ぎ給ふ。行儀の正しき事、世に類なかりしなり。富士川の船渡にて、供人過分に乘りて、川

中にて、舟沈まんとせし時、景勝怒りて筋を振上げ給ふと均しく、川中へ皆々飛込み〳〵、游ぎ渡り、召舟恙なかりしなり。士卒共、景勝を恐るゝこと此の如し。長旅の途にても、馬に懸くる聲の外は無言なり。大坂信貴野口にて、先手の支寄見物に、近習非番の輩、忍びて來りし迹より、景勝一騎にて、巡見に來り給ふを見て、咎められんかと惶て、鐵炮の降るほど來る竹盾の外へ出て匿れたり。敵よりは、景勝を恐れたるなり。

一、謙信代の七手組の大將は、加地安藝守春綱佐々木三郎盛綱末・新發田尾張守長敦・色部修理亮長實・本庄越前守繁長・竹股參河守朝綱佐々木なり・中條藤資入道梅坡齋・柿崎和泉守景家なり。齋藤下野守朝信・北條安藝守房國・直江大和守實綱・本庄美作守慶秀・大國但馬守賴胤・宇佐美駿河守定滿・安田上總介順易・上倉治部丞國清などは、越後に久しき名家にて、何れも大身、千・二千の大將なり。

一、我等先祖丸田左京進家輔も、上杉家にては、隨分軍功を抽んて、謙信・景勝兩代に働有之。景勝御代に浪人致し、會津へ供致さず。慶長五年八月に、景勝より御下知にて、齋藤三郎左衞門・長尾喜左衞門・只浦傳藏を差下され、越後に殘る浪人共旗を擧げ、堀丹後守直寄と

合戰し、丸田左京討死致し、其子は米澤へ歸參致し、形計りの身上なれども、古を懷ふ情絶えず、聞傳へたる物語を筆記し了ぬ。

寛文元年二月十三日

上杉家中
丸田左門友輔

北越耆談 大尾

松隣夜話 卷之上

關東の御所持氏生害の後、兩上杉、權を恣にし、頻に猛威を振ふと雖も、亦兩家威を爭ひ、殊に扇谷の忠臣太田道灌、死を給はり、北條其費に乘りて、次第に勃興し、上杉兩家衰へしかば、先づ兩家和順し、北條家を亡さん事を欲す。兩上杉家老功者の面々打寄り、見聞の樣ならば、兩上杉共に、北條の爲め滅亡せん事、踵を廻すべからず。極運といひ乍ら、口惜しき次第なりとて、長尾意玄入道を先として、諸將相議し、兩大將へ諫言を致し、以前の如く無事にして、北條退治せんと謀を廻す。此時は、兩家若世となり、御父は共に逝去まし〳〵、山內をば則政、扇谷をば朝義と申す。扇谷殿は、從來小身なる上、太田一亂にて家中衰へ、大身の侍數輩取退き、當時は山內殿を以て、管領と仰ぎて、國々の執政、此家より出づ。北條も、早雲の子息氏綱の代となり、豆・相兩州を治め、其勢一萬餘を以て、多年攻め戰ひ、或は神奈川・所澤・瀨田茅などといふ處にて、十餘箇度の合戰に、則政公一度も御出馬せず、軍旅の法惡しき故、上

杉衆、毎度敗軍し、大剛覺えの兵士共、無謀の戰に皆討死を致し、走り遁れたる者共は、新參仕出の雙人例の好者なり。然りと雖も上杉家、猶ほ十箇國に及べる大身故、負くれども勢も透かず、北條は未だ小勢にて、近國に助くる味方もあらず、竟には又如何あらんと、諸人別れ兼ねける處に、是も亦、須加野大膳・上原兵庫といふ曲者權を執りて、義士勇兵遁れ隱る。則政公仕置違ふ故、管領數代の繁榮、一朝に滅却し給ふこそ淺ましけれ。須加野といふ者は、都の町人、舞曲の名人とて、召下されたる人。上原は本來當家の侍吉客なる者にて、次第に歷上り、此頃は坂東十箇國の成敗、只兩人が掌の中にあり。取傳へたる上杉家弓箭の古風に依る事なく、新儀を用ひ、華美の好み、君臣の間を遠く避け、下の情、上に通ずる事を塞ぎ、合戰の砌、大將の御出馬おはすをば、輕々しきと嫌ひ、己が氣に逆ふ武士を選み出し、敵合の方に之を遣し、討死亡命する事を笑壺に悦び、政行善忠道理に構はず、陣中にて法を置き、役々の器をも選まず、目付などとて職を司る族、見聞一向正しからず。故に後を取りたる者、或は賞祿を給はり、覺ある者、最戒に遇ひ、境國は日々夜々鯨波を擧げ戰ふと雖も、都府中は是を餘所に見、舞亂・猿樂・月見・花見等、閑に推移る。長尾意玄深く之を愁歎して、數度諫諍すれども、須

加野・上原附副へ相妨ぐるに依つて其詮なし。此時に當りて、取退き別旗を立てし人々、先づ越後爲景の一族・長野信濃・伊勢小幡・白倉一黨・結城朝宗・千葉義實・太田三樂なり。（太田、素は扇谷の家臣、道灌死後山の內に依る。）

三樂、日頃則政公へ參り、馴れたる日蓮僧を以て、使として申されけるは、故道灌横死の後、幕下に候し、多年相睦むの處に、近頃御家風大に違ひ、國家を治め給ふべき善政、絶えて之あらず候。第一軍族の法亂れ、賢士・勇兵手を失ひ候に依つて、所々の御合戰に、一度として御勝利なき事、是併御屋形盲將にて、御目利違ひ、惡人を以て大任を授け給ふ故なり。御家中忠臣の士も、猶あるべく候へども、讒佞權にあるが故、口を閉ぢ目を塞ぎて、拔罷在候。凡そ亡國の兆、何事か之に過ぎ申すべく候。茲に於て、今より以後は、別旌に罷成り、小弱の一身を以て、安危を定むべしと存ずるにて候。今迄は御威勢尚ほ存す、命東國の主にて渡らせ座すに依つて、憚る所なく、此儀を申すにて候。若し世上打替り、御事かけもおはすに於ては、何事も其節の御用をば、いなみ申すべからずと、心腹を殘さず申されける。則政答へけるは、先づ以て別旌の事、貴慮の外他段なし。其期に於て、心底を殘さず申され候。最も義に當れり。

當家の諸將表裏を構へ、恩を忘れ危を捨て、北條へ心を通じながら、又平井へも出仕申され候條、本意を失ふといひ乍ら、今時の通例なれば、言葉なく候。貴坊の端言を忘ると、萬里の異、其中にありとぞ仰せける。其折しも、上杉古參の侍上杉主人子息三五郎といふ者あり。去年瀨多茅の戰場にて後を取り、其難を遁れんが爲め、味方にある雜式童の首を斬り、實權に備へたりなど、樣々惡說を蒙り、則政公御前を損じ、殿中に於て討捨に遇へり。父主水大に憤り、こは如何に愚息三五郎、去年兩度の出陣に、鎧武者の三つ迄自ら討つて之を得、上杉武士の事柄には、拔群の働、重賞に預るべきなど、郎從共は常々申しける。夫をこそなからめ、結句未練をしたりとて、打捨にせらるゝ條、言語に及ばず。我一族たらん者、七生迄泉下に骨を投じて、此遺恨を報ずべし。陣中に法度なき、暗士・盲將の群集たれば、讒言の爲す所と覺ゆるなり。暫く事を靜めて、其實を問うてこそと、少しも色に出さず、理に伏したる樣にて之を聞くに、其陣目付逆輪次郎・土井角兵衞、三五郎に對し宿意ありて、上原兵庫に付き之を讒す。兵庫は、又主水と不快に依つて、卽ち遂に上聽、樣々虛說・奸說を催し、此處に及べる由、人口にあり。主水之を聞澄し、女中と稚き子をば、越後へ退け、三五郎弟常松幷に郎黨金鐵

の勇士、混甲に出立ちて、十三人、五月の暗夜子の刻計りに二手に別れ、土井宿が所柳が辻に押寄せ、兩所に火を放ち、裏表より切入り、角兵衞を初め妻子迄、寸々に切捨て、足を屯さず、先づ近邊なりとて、上原兵庫が侍小路に押寄せ、是も同じく火を懸け、兩方より亂れ入る。兵庫屋敷には、近所に燒亡あり。馳せ合はんと騷く折しも、何とは知らず、混甲の兵士、煙の下より打つて出でたる間、上下の男女騷動し、相擊してなす所を知らず、數十人ありたる若黨、合敵に當る者稀なり。兵庫は寢殿にありて、驚き起きて目をする所に、裏より塀を破りて、鎧ひたる武者六七人、會釋もなく討つて懸る。是は後の山より、搦手に廻りける主水等なり。兵庫之を見て、何者とは知らざれども、先づ懸合ひ置きたる長刀取合せ、眞甍に懸り、主水が膝の渡りを、したゝかに薙ぎけれども、兵庫運盡きてやありけん、草摺をはね切られて、念なく主水に討たれけり。主水大に呼ばはり下知をなし、當るを幸と切つて廻りければ、妻子眷屬は、寢殿居間の邊にて、散を亂して討たれけり。夫より大手の常松等と一手にならんと、客殿より廣間へ打つて出でたりければ、大手の者共は、式臺の邊にて、當番の若黨と打合ひたる最中なり。主水又奮擊して、當番の兵士に相當り、竟に追崩し、餘多討取る。常松は

先年十四歳、幼稚と雖も、勇氣雙なく、力量尋常に勝れ、打物に得たる事、又自在なるに依つて、兵庫が郎等、殊に勝れたる者、所々にて五人迄討たれてけり。後日謙信公、聞及び給ひ、越後に召され、奉公の間、度々の功、比倫に絶え、鬼神石と申しける者是なり。主水が郎從の内にも、六人疵を蒙る。其内三人は、殊に痛手なり。歩行なり難かりければ、之を打捨て、主從十人相連れ、逆輪が宿所蓮島を志し、揉みに揉みけれども、所々にて疑はれ、十町計りの間にて、五月の短夜明けければ、今は如何に思ふとも、十人足らずの小勢にて、中々本意を遂げ難く、懸なる事仕出しては、後に悔ゆとも詮なしと、夫より引違へ、猿が坂に懸り、越後の方へ落行きぬ。所々にて行逢ひ聞付けたる者も、したり顔にてありける程に、討留めんといふ者一人もなく、父子主從咎恙なくて、越後の白屋といふ處にあり。

上杉古參の大名藤田・見田・荻谷等の人數評定して、平井の不久を鑑みて、氏康に手を入れ、旗下に屬す。此時を得て、氏康、伊豆・相模を催し、扇谷朝義の居城河越を乗取り、其競を以て、中武藏太田三樂取出で、松山をも攻め落し、河越には北條左衞門を籠め、松山には同名龍山を差置かる。其急既に喉に逼る故、兩上杉大に仰天まし〳〵、則政公・朝義公御出馬と定め、十四州の人數催促に應ずる族を率し、八萬餘りにて、武州に打出で、井流間近き所柏原といふ處に、本陣を居ゑられ、結城・多賀谷大勢を以て、河越に取詰め之を攻む。其時太田三樂方へも、會軍の一通ありけれども、三樂返答申されけるは、今度は御勢莫大に候。不肖が會士に相及ばず。松山の儀は、後日御勢を惜まず、三樂一旌にて、乘取るべく候とて、敢て領掌之なし。其意趣、必定此度も、奥方敗軍たるべし。三樂僅の勢にて、相會といふとも、大敗軍の時盛返すべき、其道あるべからずと存ぜられ、此の如く申されしとなり。氏康は一萬餘りにて、井流間川の西端に陣を張り、天文六年七月十五日の夜軍に、柏原の本陣に切入り、二時計りに切崩し、八十餘敵を討取り、兩上杉共に敗軍なり。是は由良といふ上杉侍、二千計りの大勢、氏康の語らひを得て、裏切せし故なり。上杉衆到着、八萬餘之ありと雖も、身に懸けて敵合する者僅に一萬に足らず。其餘は悉く見物人の樣にて、敗軍に引立てられ、動亂せし計りなり。河越の夜軍とて、氏康の大手柄に沙汰ありけるは是なり。結城・多賀谷は、聞ゆる勇將たる故、上杉敗軍にも、備を動かさず夜を明し、白晝に氏康の前を押通り、恙なく引いて歸る。其頃坂東にて、くり引といふ事絶えてなく、是より興りけるとなり。氏康は、夜明けて松山の城へ入り、降

參の諸將に對面まし〳〵、卽座にて本頭安堵の免狀を給はり、後日三樂批判して曰く、結城、多賀谷兩勢六千餘、十六日の未明、氏康、松山へ入らんと押立てたる勢の半腰に蒐らば、勝利を得ん事は、十に八つ。但し結城も、是等の圖を見付けぬ將にてはなけれども、身に懸りたる鑓にてなければ、人數を損ぜず引取り、謀を專と守りたるなるべしとなり。扇谷殿は、柏原の引陣にて、前に當り、手負ひ給ふ。其年の九月逝去まします。御舍弟友貞、夫より平井に便り、則政の養子となり、幽なる體に、平井に住し給ふ。

氏康、彌〻大勢になり、平井の味方、日を追うて減ずず。只今出で來る事の樣に、則政仰天斜ならず。茲に於て三樂方へ、玉繩といふ者を越され、如何して然るべきやと御相談あり。三樂、使者に對面して、仰の旨承知仕候。夫れ大家の習、傾きさは立ち候てより、治まる事はなり難きためし古今に候。然れば御家の衆にて、北條を仕詰め給はん事、千に一も其道なく候。何と日を經候はゞ、必ず味方に敵出來て、同士崩になりぬと存候。中々に、一向御自分の謀を問ひ候。北越の景虎を賴入ると仰せられ、御尤に候。景虎は、古今稀なる勇將にて候上、士を仕ふ道、天性得たる者に候。長生にさへ候へば、功を立つべき事、目前に候。扨又、假にも

約諾を變じて、影暗き振廻を仕らぬ氣質の人に候。景虎領掌あるに於ては、某は本來の義、南北より牒じ合せ、氏康手を出さざる樣に、謀を廻らし候べし。口惜きかな、一萬程手の者を持ち候はゞ、越後へ御手遣とは申すまじく候へども、數を盡し候時、三十に過ぎざる小勢にては、如何存じ候ても、一旌にて、其功なり難しとぞ返答せられける。

玉繩歸れば、平井にて、須賀野大膳等近臣推寄り、日々夜々評定ありと雖も、異議區々にして埒明かず。斯かりければ、彌〻家中さは立ち、樣々の巷說ありて、府中近邊の町人百姓等、以の外に騷動す。近習の外は、悉く恨を含める家中なれば、此節の御用に相立つべしといふ者、一人もなかりし。却て此日頃御祕藏に思召し、御重恩を與へられし近臣達の御働を、此時一見仕るべく候。某等は御用に相立たざる者に候て、御疎を蒙り候。高覽を違へ候まじ。何に依つてか、今更賴まれ奉るべく候。但し武士の義なれば、自分の屋宅に於ては、只一分の働を仕るべく候と、言を放ちて申す輩も多かりけり。又先年讒言に遇ひて、罪過を蒙りたる本間江州が兄本間大膳、弟の遺恨を報いん爲め、一族を催し、唐坂より、須賀野大膳が館に、押寄するとも相聞ゆ。事の實は未だ知らず、老若東西にさまよひ、男女財寶を運送す。則政公聞

召し、當世の樣、あるまじきにもあらず、先づ兵士を集めよとて、須賀野大膳之を承り、四方三里打竝びたる士小路を、三度迄、殘る所なく觸れけれども、馳せ參る者、雜兵五百に足らず。斯くては中々叶ふべからず、一先づ山岡外記が城まで、御忍あるべしとて、天文十六年八月下旬、夜に紛れて御出奔なり。須賀野大膳等近習十四人、上下百人に過ぎず。則政公仰せける は、行末尤も賴なし。山岡も白倉も、母方に付きての緣者たれば、不運の主と一味して、身を亡さんといふべからず。越國の景虎とても、當家を出て已に二代、其好尤も遠し。龍若は是に留りて、越後の便宜を相待つべし。則政落ちてなからんには、却て靜謐なるべし。友貞は武略の爲め太田を賴み、武藏へ越えて時を待ち、兵を起し、會稽の恨を散ずべしと、委細仰せ置かれ、猿坂に懸り、佐原へ落ち給へば、友貞は引違へて、唐坂通にぞ懸けられける。扨龍若殿へは、乳母の一家馬方新介・九里采女を初め、無二の近習侍二百餘人、上下三千六百計り相付くや、平井の國府に留り給ひ、頓て九里采女が計らひにて、故長尾意玄が長男長尾佐次右衞門に飛脚を越し、龍若君の御書にして、賴み思召す旨言越しければ、佐次右衞門涕を流し、覺悟の前とは申し乍ら、哀なる次第なり。流石故主の事なれば、否み申すに及ばず、先づ

以て近々參府を遂げ、高顏を謁すべしと返答して、使者を返し、頓て一族郎從を催し、三千餘騎にて、居城猪山を發し、十月上旬平井へ至り、先づ堀垣に修理を加へ、弓・鐵炮を調へ、物具を彩色し、氏康の寄せ來るを相待ち、籠城の支度を結構す。此佐次右衞門と申すは、故意玄が息男、生得勇謀兼備せる上、多年の〔間ノ一字脫カ〕意玄に付き、鍛錬淺からず。其頃東國に於て、大將餘多の內、太田・長尾とて、三樂と此佐次右衞門を以て、諸將恐屈す。是に因つて氏康も、卒爾に取懸り給はず、小身といひ乍ら、近國に三樂あり、佐次右衞門籠城の大將たる故なり。則政公は、佐原に至りて、山岡外記が城下龍峯寺に、先づ馳せ參り、城中へ入御なし進らせ、頓に評定を加へ、長尾主計頭を使者として、管領職幷に御抱の國、景虎へ讓渡さる。浮沈に付きて、一向賴み思召さるゝの由、之を仰せられて、私を以て、景虎家老喜多條丹後に談じて曰佐原殊に人なく候。近日の內、氏康寄せ來る事候はゞ、則政切腹疑なし。此條、丹州所爲を以て、演說せらるべしとなり。景虎則ち諸老を會し、僉議の上、頓て領掌まし〳〵、主計頭に相副へ、齋藤彈正・甘糟近江、二千餘騎の將を守護して、外記が城へ之を遣され、齋藤・甘糟、佐原の城邊を見廻り、此處は要害の便なく、下は淺間に候。明日もや氏康寄せ來んずらん。猶

豫すべからずとて、翌日上州佐原の城へ御座を移し、堅固に守護し奉る。則政公を始め供奉の面々、多年危急の愁を散じ、初めて寢食快樂を得。平井には、則政公出奔の後、長尾佐次右衞門忠勤に依つて、中々恙なかりけるが、龍若君御乳持の一類、馬方・九里が非道の仕配に依つて、佐次右衞門腹を居ゑ兼ね、翌年正月在所へ引込み、其後は通路絶えけるに依つて、守護の地侍も、段々に分散致し、僅に殘留者三十餘人、上下四五百人に過ぎず。此時氏康、島左近大道寺などいふ侍を大將として、大勢を差向け、平井に於て、其聞え夥しかりければ、乳母の一類馬方新介・九里采女等、其外相議し、扨もや命を助くるとて、龍若殿を取り參らせ、氏康へ降參す。氏康義將たるに依り、以の外之を惡み給ふ。降參の輩彼是八人、縛首を切り、獄門に懸けらる。龍若殿も、足柄の麓海岸寺に於て害し奉り、氏康近習神尾といふ侍、御介錯を仕る。十一歳にて御早世なり。

友貞は、則政公同時に、平井を落ち、中武の太田へ至り、頼み入る由申されければ、三樂、甲斐甲斐しく領掌して、涕を流し申されけるは、故扇谷不明にまし〳〵、高祖父道灌に横死を給はる。其時分某は胎内にあり、兄三郎心を盡し、議人の内曾我計りを漸く討つて候。中次は、以

前鎌倉にて病死仕候へば、手を空うする處なり。其後兄三郎、腫物を生じて死し候時、某を近付け、構へて扇谷殿に、先祖の讐を報ずべからず。故道灌、鎌倉にて遺言の旨も此の如し。父と兄に似ずして、立腹勝なる氣質の者なれば、心許なく思ふぞと、返々申置き候。斯樣の旨だに候はずば、三樂斯て罷在、君御兄弟をば、何れにか、恙なくて見奉るべく候。夫れ父祖の讐には、共に天を戴くべからずと。申傳へ候をやと、思はず今、高顔に謁し候て、道灌が今は の時節迄、思ひ殘す方なしとて、直衣の袖を濡されける。友貞は興さめて、暫く言葉も出されず。やゝありて三樂、何事も今は是迄にて候。左候へば、平井の事こそ覺束なく候へ。臆病至極の町人原、扨もや我身を遁るゝと、龍若君を取り參らせ、必定降參仕るべし。彼の馬方・九里といふは、境の町人なりと聞く、頼むべきにあらずとて、先づ以て使者として、那須といふ者を遣し、事の樣を問はれけるに、平井には、長尾佐次右衞門、數千騎にて馳せ參り、若君を守護し奉る由、其聞えありければ、三樂、さては別儀なし。左候はゞ計謀を致し、景虎の發向を進めんとて、平井の議を閣く。然る處に天文十七年正月下旬、長尾、平井を打捨てける由、商人の便りに聞えければ、三樂大に驚き、早速中村伊勢守に、五百餘人を從へ、龍若殿御迎と

して平井へ差越しけれども、一日以前、北條へ捕はれさせ給ひたりとて、城中には人もなし。捨て置きたる財寶を、町人・百姓爭ひ取らんとて、蔀・格子・遣戸・壁墻を毀ち、散々に荒れ果てたり。則政公出奔坐し、尚一年を送らざるに、古蘇臺の露蕭々たり。伊勢守大に怒り、數日逗留し馳せ廻り、馬方・九里、幷に降參せし人々の殘黨を尋ね、所々に於て捕へ、或は切捨にし、三十餘人が首を、蓮島に懸けさせ、府中の狼藉・強盜を靜め、飛脚を北越景虎公へ註進致す。茲に因つて景虎公、中村伊勢を褒讃し給ひ、太田家の水を呑めば、犬も能く獸を捕るとて、笑ひ給ひけるとなり。天文廿年、太田三樂、飛札を以て、景虎公へ、關東の成行註進あり。書付の次第、

○則政浪人、越後へ便り、景虎公を頼まれ候。御領掌坐し、年逐うては、坂東筋へも御進發なるべき由。然るに於ては、三樂も期を約し、武州を打出て、松山を乘取り、伊豆・相模・上野・武藏の半要を、遮り申すべく候事。

○則政養子友貞、近年武州に居住仕られ候事。

○平井には、氏康も只今迄は相構はず、無主の地となり居申候。近々夫より大將分の衆唯一人、差越さるべき事。

○氏康計策を以て、古河の公方を越え立ち、妹を嬪にして、奉公に差出し、壻に取り候といひなし、其位を以て、推して廻り候に依つて、坂東、近年悉く旌下に屬し申候。勘辨の前人數積り、凡そ七萬計りに候。但し自家の軍兵は、尤も二萬に過ぎず候。領地は豆州・武州半國、其外は下總・上野所々に於て、一郡一里浮地に候故、相定まらず候事。

○坂東に於て、宗徒の者、（但名字は、其方へ委細相知れ候故、書記すに及ばず、遠國には結城・多賀谷・武佐・熊谷・清黨、近國には、小幡・長野・長尾・忍・細屋・脇屋、此等の外は、悉く古河北條が幕下に候事。

○白倉丹波・山岡外記・大石大膳・見田小七・荻谷主水・和田和泉・青蓮寺・東照寺等は、明日にても御進發に於ては、味方に參るべき由申通じ候とて、人質など御所望候儀は、先づ御無用に候。坂東は大形手合の御一戰、勝負に依つて、敵味方暫時に替り候事。

○奥筋諸將の存ずる所、專ら族姓を選み申す事に候。古河殿は、紛れなき清和の嫡流とて、うつけたる人をも、神の如く敬ひ申され候。是れ御計策の爲に候事。

○松山の城、一旦乘取り候事は、いと易く候。去ながら持留め候事、某小身故、難儀に存じ時節を相計り罷有事、

右に依つて景虎公、關東進發の事を、急速に思召し立ち候といふも、甲州・賀州の取合、差競ひ、兎角延引す。併し一兩年中有無に付きて、奥筋へ御馬を出さるべき條事、既に一決するによりて、七組の老將北城伊豆・宇佐美駿河・直江山城・柿崎和泉等相議して、諫言を申上ぐる。近年の中、關東御進發、其條は御尤に奉ㇾ存候。去ながら先づ以て京都へ御手使なされ、近衛殿の御公達を、一旦下し進らせられ、公方と號し、威を借り、奥筋諸將を撫で國郡を廣め、御手に附けられ候、計策御尤に候。其故は、當時吾朝爭國となり、勇將・謀將多く候と雖も、御屋形と武田晴信を以て、無雙の良將と申す事に候。吾身も多年御手に屬し、多方に相當りて見え候に、凡そ味方二倍・三倍の敵は、只能き捕手とこそ存じ馴れて候へ。是併し乍ら當家の弓箭、他に異なる故なり。又織田信長は、大身の將にて候へども、御屋形と晴信へは、一年に十度に及び、御音書を致し、書翰の文章、其外旌下の樣に仕られ、扨又佐々權左衛門をば、都筋御用の爲めとて、御城下へ相詰めさせ、如何にもして御氣色宜しき樣にとの結構に候。此御方よりは、首尾迄に、一年に唯一度御使を遣され、御書札等殊に蹴下げたるなされ方に候へども、今迄竟にあなたより沙汰なし。此仔細は、信長見切の賢き人にて、隨敵の謀を仕らるゝ處に候。御覽候へ、信長程、無手に餘る大軍に罷なられ候はゞ、武田も御屋形も、無事を計り申さるべく候。弱將にても、十倍の敵には、勝なしと申傳へて候。武田は奥の練カめる將にて、疾く此意を推察し、内々は駿河・遠江を手に附け、尾・濃の喉首を斷つべき其支度と承り及ぶ事に候。御當家は尤も然らず。先年よりは、村上義清に御頼まれ、老功の武田と、度々危戰を遂げられ、夫さへ御座候に、今更又極運の則政に御頼まれ、大敵の北條と取合を御始めなさるゝ樣の振に依り、御家中の爲め、損はありて、益絶えて無ㇾ之候。今の樣にては、歸する處、武田も御家も、信長に頽されなん事疑なく候。御一代はさるにても、弓箭の上にての御不覺は、あるまじく候へども、末々の御器量迄は覺束なし。往昔より以來、二代・三代相續く良將は之あらず。さるに依つて、都へ御手使をなされ、近衛殿を下し參らせられ、威を取りて、東國を御治めなされ候事、御屋形の御事はさて置き、御家中我々諸侍の爲め、是甚だ益ある御謀にて候。御前に於て、恥入り奉りたる申上事に候とも、我々式は、名利を以て、生涯を樂み申す外、高上の志無ㇾ之候に依つて、如何にもして、一度都へ御旗を建てられ、命の中に、天下の主とも仰ぎ奉るべき念願に候。御年齡唯今廿二歳、朝陽の漸く發るが如し。思召し立てられ

候に於ては、成功爭でか疑あるべからず候。夫とも先づ東國を、一二箇國も御治めなされ、信玄は兎ても角ても、底心の懼しき大將にて候へば、立置き候ては、相叶はず候。信長と無事をなされ、東上野を、一向に太田三樂へ相附けられ、北條を押へさせ、椎名・神保を押潰し、其威を以て、織田・松平を語らひ、二口より甲州へ取寄せ、年月を送り候はゞ、信玄、何程軍に賢き良將にて、何時迄か保ち申さるべく候。只今は氏康と信玄、入懇に候へども、久しき謀に候はず。近年の內、必ず以て取合になり候べし。左候ては、武田さへ押倒しなされ候はゞ、信長・氏康等は、兎も角も懼るゝに足らざる所に候。御領國、何れも雪深にて候へば、春半より、秋の半七箇月の間、先づ能登・加賀・越中に於て、椎名・神保・大聖寺・勝沼等と取合ひ、信州・甲州にて、信玄と又長途を越え、東國へ出でば、北條等と大軍をなされ、諸軍辛勞仕り、末の賴之なくしては、益の儀と申上ぐる。景虎、委細聞召され、七人の所存餘儀なく候。總じては某生涯、始終弓箭の道、其覺悟一筋所存有レ之と雖も、只今申す如くんば、我意を立つるに似て候。行末の儀は、豫め期する所にあらず。東國發向の儀は、如何にも意見に相隨ふべく候。所詮家中の爲めと承り候上は、千萬は入らざる事に候。爲景以て相續いてより、命を泉下に投じて、一期の恩を謝す。夫れ主として從者に恩を與へ、地を施す事に、吾一人にあらず。今古以然なり。然らば則ち、是全く天恩、景虎が與ふる所にあらず。其故は、千金より、一夫は重き當世の風俗にて候へば、今日當家に暇を得し人、明日は又、他家に於て緣を受けん事疑なし。一人として、身を捨て昔を忍ぶ者、是あるべからず。是を人の處分といふ。然れば則ち、吾各諸人の一命を受くべき道理無レ之に、命を給はる。謝せずんばあるべからず。故に家中諸士の爲め、身命を以て泉下に投ぜん事、又痛ましからずや。然りと雖も、吾は一身、家來の諸士又餘多なれば、何方に向つて、謝すべき事を知らず。吾常に之を思惟するに、唯行懸の場を去らず、死を快くせんのみと仰せけるを承り、七人の老士を初め、列座の面々、感涕膽に銘し、言葉無く退出す。

○同年九月上旬、近衞殿招請の爲め、淨土宗蓮譽と、長尾小四郎景征を、京都へ差越さる。其時佐々を尾州へ返し、信長へ仰せらるゝは、上杉則政還府の爲め、近衞公方を大將と仰ぎ、來春東國へ罷越し、茲に因つて近衞殿御迎の爲め、京都へ人を越し候。左候へば其路次、皆以て御分國に候。旁に付、今度賴入度候。勿論御許容無レ之ば、早々其旨仰せ知らさるべく候。

其儀に於ては、京都の事、相止め候となり。信長よりは、仰の旨相意得悦入候。信長斯くて罷在候上は、途中の御警固をば、他に譲るべからず候。瀧川といふ小者を、道中へ差置き申すべく候。御用の儀、小四郎より事々申され候様にとの返答に、瀧川より長尾へ、書翰を副へ來る。茲に於て、聊遠慮なく都へ上り、山邊を以て、近衞殿へ旨を達す。近衞殿、以の外御難澁坐し、數日迄御返答無之。小四郎、山邊左近を以て、重ねて自分に申しけるは、越後國雪の儀は、公家にも御存知なき事は候まじ。來月になれば、雪積り、行路絶え候。成不成、三日の内御返答承るべく候。其仔細は、若し御下向相叶はず候て、重ねて景虎罷越すか、又は家中の内何者にても、差遣し候はん時、深雪になり候ては、人馬を勞る事に候と、甚だ以て穩便ならず。近衞殿興なく坐し、機を取り期を延さんとて、様々の御馳走あり。就中唐橋の亭にて、兩使に厚く茶を給はる。坊主は天下第一の茶道堺の梅田了庵齋なり。珍器重寶善盡し又美盡し、小四郎座入の體、一圓等閑ならず。切戸の際迄刀を差し、席の内を除目に見、其内へは、大脇差にて口入、御茶を給はり、罷出づると等しく、日の中に御返答を承るべしなど、堅固を申し、田舍武士の事柄、如何なる僻事もせんずらんと、近衞殿を初め、安き御心もあらず、竟に一着事定まり、近衞殿末の御公達松丸殿と申して、十二歳になり給ふが、小姓一人相副へ、蓮譽・小四郎へ相渡され、小四郎請取り奉り、一手に橋富大吉といふ足輕大將相副へ、上下六百人計りにて、江州へ出づれば、卽ち瀧川出向ひ、大勢にて長途の警固を致し、九月下旬、越後へ到着まします。

○十月上旬、蜂屋隼人を使者にて、信長へ嚴禮あり。瀧川へも禮幣の爲め、助實の刀・曝布百反給はる。信長、蜂屋を兩日迄留められ、慇懃の體大方ならず。歸還に及び、百枚の馬匹に鞍置きて、之を引かせらる。

○長尾彈正謙忠を以て、前橋に仕居ゑられ、雜兵二千三百人餘にて、上州に至る。最も來春御發軍の爲なり。太田三樂謀を以て、大石・小幡・見田・藤田・白倉等を賺し、味方に致す。茲に於て關東心々になりて、氏康を背く輩あり。此次天文廿一年より、永祿三年迄廿數九年、景虎公廿三歳より三十二歳までの中間、古本蟲害失する故之を記さず。

○永祿三年庚申二月上旬、相州北條氏康公、大藤・金谷・多島・九島等の耆老を會し、評定ありて曰、北越の景虎入道謙信、都へ上り公方に謁し、關東の管領職を給はり、諱字を申受けて輝虎になり、網代の輿を許され、威光を肆にして吠廻り、當春は大軍を動かし、當家を頽し、坂

束を治めんとする由、危急近きにあり。謙信は、近代稀なる剛強の者にてある間、今度は無理に蒐けても、一戰と存ずべきか。思ふに謙信人數、先づ越後一國・越中・上野・加賀は各半國。越中は猶ほ爭國なれば、催促に應ずべからず。凡そ二箇國半、各大國なれば、凡そ四萬、堅くは三萬五千たるべし。其内所々の押に、一萬引殘して、二萬か二萬五千は、發向すべしとの勘辨なり。當方手の者多からず、上杉先方は、敵にはなるとも、決定の味方と頼み、對當し難き勢にて、原野に出でて、馳せ合ふ軍は然るべからず。今度も三樂謀を致し、大石・小幡・白倉等先陣をする風聞なれば、定めて大勢たるべし。要害の用意を增し、籠城の覺悟尤なり。持分の城餘多の内、構淺間なるは破却して、村下鷹の巢・入江・松山・引布・白根・山根なんど、各一將を加へて守護すべし。謙信も、前後に大敵あり、兩月と當表に手間を費す事あるべからず。上州の儀は、小田原より郡代を置きたるにもあらず、謙信支配する。とても世の聞え、何ぞ苦しからん。謙信は、一旦の情を張る男にて、則政に頼まれたる首尾迄にする事なれば、平井をさへあなたより支配せらるゝに於ては、一益はありと思ふべき事なり。されば場により敵により、或は腹を立てしめ、怒らせて能事に〔ありカ〕、又態とも敵に一面目付けて、無事をしてよき由、其聞え甚龍の天に響き、八州の儀は申すに及ばず、北國・南海・京・上方迄、勇鋭に怖れざるなく、其威に伏し、小幡・大石・見田・白倉・忍・荻谷・藤田・長尾・三浦・岡崎・宗龍寺・那須・清黨の上能き事あり。其圖を謀り知るを以て、良將といふなりと、委細に氏康評論し給ひ、耆老の面面、各之に同ず。瀧長門といふ者を、前橋の城下幡屋といふ處に差遣し、彈正入道と忍び會す。是は謙忠・輝虎と、主從の中不快を以て、裏切を致させ給はり候へ。仕課せ候に於ては、東上野幷に相州山上を副へて、充行ふべき由の相談なり。謙忠、如何にも領掌申して候。去りながら十に一も、危き事候はゞ、一向に開き候べしと、返答申しけるとなり。

○永祿三年三月上旬、越後の管領輝虎入道謙信公、近衞公方を大將軍とし、一萬六千にて、北越を御進發。上州平井へ御馬を寄せられ、氏康旗下上杉先方荻谷太郎左衞門が木澤の城を押へ、小幡日向守居城高津に取詰め、一日の内に攻破り、女童迄一人も殘らず、千餘人斬捨になし、其足にて、直に木澤に押寄せ、攻めんとする擬勢に堪へず、太郎左衞門降參し、人質を進め、幕下になる。太田三樂三千餘騎にて、武州より馳せ付き、先陣を給はり、八州の要害或は居城、味方に參らざるをば、一城も殘らず、三日の間に攻破り、當歳の幼兒迄、斬捨になるべ

杉家の諸侯、馳せ集りける間、兩日の間に、軍勢七萬餘騎になり、茲に依つて、平井に陣所餘り、唐坂口迄充滿せり。翌日より總軍を進め、三樂を魁首として、小田原へ押詰め、蓮池迄亂れ入る。中間所々の取合ありけるに、謙信、毎度二の手より懸出で、初對面なる東國武士の(はな)も識らず、諸手へ乘入れ、胄をも着られず、白き布にて頭を包み、朱の采配を取つて下知ぞなす、人を蟲とも思はぬ振廻を見て、諸將大に懼をなし、假令如何なる良將にてもおはせ、此人を主と頼みなば、首の切らん事疑なしとて、退屈せざる者一人もなし。將至つて剛き則(ときん)ば、士必ず應ぜずとかや、兵法の言是なり。此時、忍・小幡・長尾・白倉、氏康と素より内通せし者、時節宜しと思ひ、謙信と談じ、旗本の左右に相竝んで、後矢を射んと相謀る。城内よりは、此者裏切をし、旗本騒ぐ。同時に突いて出で、外より揉合せ、討取らんと擬して待懸けたり。謙信は、神變を得たる大將にて坐(ましま)す故、方々の振を、早見知り給ひけれども、少しも氣を屈し給はず、味方の將の内、甘糟計りに内意を含め給ひ、近衞殿御陣只一備を立替へ、楯無山といふ山に居申され、宇佐美駿河守・上村甚右衞門を副へ置かれ、自身は柿崎和泉守・直江山城守を左右にして、蓮池の門前近く詰寄せ、城中より備を出さば、無理に蒐入りて、刹那が内に勝負を決せんとする機を量りて、城中よりも、曾て人數を出さず。謙信、池の兩端に馬を控へ、辨當を取寄せ、茶を喫せらるゝ所を、金澤といふ者、出丸より鐵炮十挺計り連ね、三十間程にて、二繰まで、ためつけに打ちけれども、射向の袖鎧の鼻などを撃ちて、一毛の隔にて、御身には恙なし。謙信少しも騒ぎ給はず、長々と茶を三點まで喫し、悠閑無事の體にてましましければ、左右に候ひける數千の兵士、髪毛をすりて、鐵炮が來れども、頭を俯く者獨もなし。城中より、北條耆老の面々之を見物して、譽めざる者なし。橋富大吉・苦桃伊豫相寄る二備の足輕、鐵炮八十挺連ねて、右の出丸・井樓・矢倉を射閉ぢ、城内の前口を留めてより、謙信公御茶を取置かせ、本陣へ馬を入れ給ふ。跡備は甘糟近江・北城伊豆・同名丹後・長尾義景・越中侍に神保常陸・飯尾左吉等、彼是八千五百、前後の備圖に當り、少しも違はぬ勇鋭を見て、逆心の諸將欺く事を得ず。太田は、又家の耆老大道澁谷といふ者に、總勢を附け置き、自身は陸者廿四人を從へ、諸手を乘廻し、備の色を見、白倉丹波が陣所へ行き、丹州を謀り、本陣へ同道し、之を歸さず、人質の如くにして置きたる間、逆心の謀盡く相違して、手を出す者なし。茲に於て城中相談の上、北條上總・二階道澤阿彌・太田三樂、備場に來り、謙信公御合點(ましま)坐し候に於て

は、西上州の儀一圓、則政方へ返進申すべく候。謙信公と氏康故、無二の合戰に及び、隣境の敵に謀られ候事、且は武略の不足といひつべし。此旨貴坊心得を以て、調達仕度き旨之を申す。三樂、氏康の賢慮の旨、御尤に存ずるとて、二の手に參り、謙信公へ、右の通り具に申されければ、謙信、如何にも上州をさへ、則政へ返され候はゞ、謙信は所存之あらず候。今度の儀、上州・相州に於て、氏康持の要害二つ迄乘取り、其上今日此處迄人數を押入れ候へば、能き程に候。總じては取詰めたる城の有無を決せず、人數を打入れ候事、如何にて候へ。且つあなたより、無事を申乞はれ候へば、夫も能く候と仰ありて、一途調ひければ、今度は大敵・強敵といひ、行末如何あらんと、氣を詰め聲を呑みたりける。國人悅び合へる事斜ならず。謙信は、諸軍に一日後れ、譜代衆幷に越中衆、合せて一萬六千、前後十三備、鐘・鼓を靜に打擧げ、一步を亂さず、岫雲の雨を帶び、暮山を出づる勢をなし、川田豐前と齋藤主稅と、繰替に殿を致し、自身は其前に、以上三萬計り、眞驀になりて引取り給ひけるを、氏康其外松田・大道寺・遠山・山角等の城將遙に見て、合戰の道に於ては、天生の英雄なりと、數度讚歎せられたり。

○近衞殿、小田原より鎌倉へ御輿を寄せられ、鶴が岡へ御社參。謙信公、之を守護し給ふ。

宇佐美駿河、御前に於て、事竟りては、速に去ると申傳へて候。此度の御社參、然るべからずと申上ぐ。然りと雖も謙信公、何程の事かあるべきとて、用ひ給はず。茲に於て鎌倉に半日人馬を休め、龍山といふ間道に懸り、其夜は關山の廣野に御宿陣。諸軍は小田原より、平井へ歸され、御供には、加治內匠・柴田大學・宇佐美駿河・直江山城・本庄清七・河田豐前・長尾小四郎・中條五郎右衞門・太田三樂、彼是八千計りに過ぎず。頃は三月末の二日夜半計より、敵幾重ともなく取卷き、松明の光、峯の篝は、晴れたる星の數よりも茂く、鐵炮を放懸け襲はんとす。是は鎌倉八幡宮にて、東國の諸將、近衞公方へ御禮を遂げられける時、忍の成田長康といふ者、酒に醉ひ、言語尾籠なりけるを怒り給ひ、扇を以て、謙信公、忍が頭を二つ迄、したゝかに打ち給ふ。其の遺恨に依つて、一門家族を催し、武州の千葉・淸黨を語らひ、幸ひ小勢の折節を窺ひ、足輕を懸け、夜軍にし、討つて恨を報ぜんと企てたる處なり。謙信公、是は成田が野伏を懸けたるにぞあらん。さにても暗夜といひ、切所といひ、追詰め打果す事も叶ひ難し。太田殿と直江は、公方を警固あられ候へ。中條は戰場を見計らひ、宇佐美と術をして、敵を近付け一戰を遂げ、少しなりとも討取り候へ。本庄淸七・加治內匠は、後陣に下り、小四郎と

組合ひ、小荷駄を守護仕れと下知をなし給ひ、自身は、柴田大學と河田豐前を前後にして、平
塚といふ小さき尾に陣を張り、夜を明し給ふ。敵次第に近付き、矢石を飛ばす事雨の如し。
中條五郎右衞門、宇佐美駿河、足竝を見て、敵を廣野へおびき、伏兵を起し、鑓を入れ追崩し、敵
四十餘人討取り、後陣に打ちける小荷駄兩陣の內、長尾小四郎は、恙あらず。同名傳左衞門
は、敗軍に及び候を以て、小荷駄は殘らず奪はれけり。謙信大に怒り給ひ、翌日早旦に首を
切り、關山懸けさせ、家來共廿四人、歷々の者共一所にて、一人も殘さず、討捨にさせ給ふ。
其內、殊に相働きける悴者を、自ら鑓を以て自ら突臥せ給ふ。夜已に曉天に及び、敵殘らず
引いて退きければ、日出でて後軍を發し、古路に懸り、太田三樂先陣を打ち、直江山城後陣に
下り、九里の山中難なく押通り、其夜は葛見に宿し給ひ、酒飯を備へ、危軍を勞り、三樂を客
位に請じ、物語曉天に及ぶ。謙信、諸士に語り給ひて曰、關東諸將の面々、皆弱兵なりと思ひ
侮りて、傳左右衞門に、昨日小荷駄を預けし事、某一代の不覺なり。然らずんば、何しにか長
く安體の敵に、之を奪はれんや。某常々甲州武田信玄に及ばず、長ずる所の者と申すは是に
て候。此法師は、弱敵と見ても、猶弓矢を大事に取り、斯樣の率爾なき人に候。大事の場と思

ひ候時は、誰とてもそゝけたる事をせず候へども、生得ならぬに依つて、動もすれば、其儘慢
りて、敵を疎略にのみ仕候。信州更科義清などは、軍の場に臨み、相對してよりは、武き事も
賢き事も、信玄に優りはするとも、劣る者にてはなく候へども、愚に正直なる男にて、常々委
き慮之なきに依つて、度々後れを取り候と仰せければ、三樂、御意の通りに候。併し此傳左衞
門も、以前は數度の覺えある侍とこそ承り候へ。先年地藏峠にて、義景の御手にありて、甲州
の小山田備中を討ちしも、傳左衞門手にて候はずやと申す。謙信、さる事に候。傳左衞門、
生得力量太刀打には、達者をしたる者に候へども、武道を嗜む心なき地體の氣質にて候故、
行懸りては、器量走り廻りなども候。それらも皆徒事となり、理に當らず候とて、夜明けけ
れば、曉天に御馬を出され、平井に兩日逗留ましく、村里の仕置仰付けられ、年久しき虐政
に、困窮の里民なりとて、三年の間、半は貢を許され、柿崎泉州を仕居を給ひ、前橋の城普請
仰付けられ、三月晦日御歸陣なり。

三樂は、前橋より御暇を申し、中武藏に歸り、如何にもして、松山城を取返すべき謀より外他
事なし。兼て松山近郷の里民、太田の成敗を敬慕し、家々に三樂の兵士を扶持し置き、松山

の邊を窺ひて、註進せん事を相擬す。平井の柿崎方へも、松山の城乗取り候節は、羽書を飛ばし、註進せしむべく候條、御勢差向けられ給ふべき由、約をなす。永祿四年正月下旬、柿崎和泉、千三百にて平井を發し、鳴瀬へ出で、忍の成田が居城朝日山の麓迄相働き、村里を放火し、青麥を刈り、人數を上げ、定光寺に陣す。長安八百餘にて、卽ち出合ひ對陣し、雌雄未だ決せず。

○永祿四年、武州松山の城主北條安房、板橋といふ處に鷹野に越し、若侍餘多引率し、逗留したりける透を窺ひ、太田三樂、三千餘騎にて取詰め、間宮高梨を魁首とし、西北をば明け置き、東南より無理無體に乘入る。松山の副將北條玄庵子息雅樂佐・笠原新五郎を始め、城中の兵士千二百、各渡り合ひ、持口を堅め防戰す。三樂旗本の內、佐藤組とて、五十人に備へ合せて、百人ありける。奈良の佐藤一甫の弟子にて、其頃、絕えてなかりける十文目玉の鐵炮を、得手に打つ者共なり。三樂是に下知をなし、北條雅樂助、東の門前山の寄手を追拂ひ、勢屯の外側へ、突いて出でけるを、横合になし、近々と詰寄せ、五十挺づつ立替りに、つるべに打たせける間、城中の兵士三百計り、雅樂助を始め、立處に死す。城中是に騷ぎ、足を立兼ねけるを見て、太田先將高梨三右衞門・間宮隼人・澁谷全久、塀を押破り亂れ入り、暫時に乘取らしむ。笠原新五郎が力及ばず、安房が妻子を警固し、西の明きたる方より落ち去る。柿崎和泉は、鳴瀬に於て、忍と對陣せし處に、三樂が飛札到來しければ、卽ち引拂ひ、松山へ押付け、千三百石を三軍に作り、松山に副へたるなだれ尾に陣す。房州は、板橋より八里の行程を、片時に打ち、二百計りにて馳せ付けけれども、早や落ちたりければ、引退かんとしけるを、柿崎に攻められ、一戰に利を失ひ、從兵過半討取られて、自身も疵を蒙り、辛く死を遁れ、藤澤へ引取る。

三樂、松山を乘取る故、管領則政の庶子友貞を、是に仕居ゑ、村里の仕置申付け、柿崎と打連れ直に鳴瀬へ出張し、朝日山の城下へ押詰め、鳴瀬の町を放火し、相働くと雖も、長安出づる事を得ざるに依つて、人數を引上げ、武瀬川より通る水道を埋め、翌日各東西へ歸陣す。永祿四年、信長より、越後へ御見舞の使者來る。去年東國へ御進發、御歸陣以後、上方筋へ手間取り候て、音信を通ぜざる旨演達なり。進物、謙信公へ時服三十重・地紙三千枚、北城伊豆宇佐美駿河へ、各白鳥十羽、使者に饗膳を給はり、篦野牧の馬一匹、鞍を置いて之を引き給

はる。

○永祿四年八月十七日、謙信公、一萬騎を率し、越府を御立ち、義清の爲め、川中島へ出張坐し、野武士共に山の毛作を刈らしめ、終日相働き、貝津の東西條山へ陣を居ゑらる。是は信玄、越後への手當の爲め、新に貝津の城を取立て候に依つて、此の如し。蓋し信玄發向延引あらば、其内貝津を破却あるべく、又早速對陣申さるゝに於ては、便宜により、今度は有無の一戰を遂げらるべき由、組頭の面々へ、直に言聞かせ坐ます。御供には、柿崎和泉・直江山城・甘糟近江・斯波田因幡・河田豐前・長尾小四郎・荒尾一學・加治内匠・上村甚右衞門・中條五郎右衞門・宇佐美駿河・三寶寺等なり。信玄相續いで出合ひ、二萬餘にて、西條山より、越後へ越す中路を取切り、雨の宮の渡りに陣せらる。謙信、此十五年前、初めて信州に働き、海野平に於て、信玄と迫合を取始められしより以來、信玄は、軍に鍛錬深き老將にてある間、對陣の勢にて、常の如く術をなすものならば、何としても、備の違ふ事あるべからず。備違はざる所に、此方より無理に仕懸けては、必ず負くるか、扨は能き侍を、多く亡すかの二つなり。只少人數にて輕く働き、透間もあらば、信玄と手に手を取り、組臥せて首を取るか、刺違ふるか、何れ手詰

の勝負をせんと、覺悟なりと雖も、信玄、工夫の賢き將にて、是を悟り、成程靜りて、荒勝負に遇はず、用心第一にせられ候に依つて、取組みたる大合戰、竟に之あらずして、年月を延ぶる。此度も其御志にて、信玄二萬の大勢にて、半途を遮り候と雖も、方便を待ち透を窺ひて、三日迄對陣に及び、四日目に、信玄、貝津へ引入り申さるゝに依つて、謙信、諸將を召し、各等玆に於て、其謀如何と尋ね給ふ。宇佐美駿河曰、此方の御歸陣之なき中、彼方より引取り候儀は、あるまじく候。其故は、貝津の城を捨てられ候になり申すべく候。彼方よりは、例の如く軍を延し、成程無事にと仕られ候と相見え候。此の如くならば、又今度も、手を取りける取合なり難く候。明日御歸陣然るべしと申す。謙信を始め、滿座是に同じ、翌日は御馬入と相定むる處に、其夜貝津に、したゝめする飯香、夥しく上るを、謙信見給ひて、又諸將を集め、信玄は又明日一戰と志し候と見えてあり。去るに付きては、信玄別に方便はあるまじ。二萬の勢を二つに分け、一手は、昨日迄陣を打ち居ゑられたる雨の宮の渡、廣瀨の邊に立置き、一手は此山に懸けて一戰を始め、勝つても負けても、謙信が越後へ引退かんとする處を、疲れたる便に乘りて、討留めんとする事、掌にあり。然らば夜中此山を取りて、川の彼方へ備を立置き、

曉天に、信玄が旗本へ切つて入り、無二無三の一戰を遂げて、雌雄を一時に定むべし。西條山よりの間、一里餘に過ぎず。信玄先手、一時に馳合すべき事疑なし。然らば則ち後度の軍は、味方敗軍たるべし。甘糟は千餘騎にて、雨の宮の葛尾に居て、敗軍の士を助け候へ。初度の鎗に於て、今見給へとありて、手配をなされ、夜半に西條山を下り、雨の宮の渡を越え、備を立て給ふ。一の先柿崎和泉・川田豐前、二番御旗本・三番本城清七・加治内匠、旗本右長尾小四郎、左中將五郎右衞門、其餘の荒尾一學・上村甚右衞門・三寶寺織部・直江山城等、宇佐美を軍奉行として跡備なり。甘糟は殊に八町餘り引退き、葛尾といふ山の半腹に、千餘騎にて備を立て、味方の我を、全所に見る。恰も見物衆の如し。去る程に武田勢、謙信公のさげすみに、少しも違はず、二手に分け、信玄は、息の義信、弟の典厩、伯父の穴山遙道軒、内藤修理・諸角豐後・山縣・望月等相從へて八千餘騎、廣瀨を越えて備を立てられ、一手は高坂・飯富・馬場・小山田・眞田・甘利・小幡・蘆田等、宗徒の侍大將組合せて、都合一萬一千餘騎、西條山へ懸る。夜已に曉天に及び、信玄の物見浦野といふ老功の者、馳せ廻り見て歸り、信玄へ、謙信の陣は、頓て是に候。但し人數既に起り、旗本の一組、味方の備の中に置きて、押廻り〳〵犀川の

方へ赴きて見え候と申す。信玄、扨は手に逢ひたりと覺えたり。夫は車懸とて、遠近に依つて、幾度目に、旗本と旗本と巡り合ふといふ次第あり。山本道鬼備を立替へ、一方便仕れとあり。但し信玄内の侍足輕大將に及ぶ迄、人數を返す事、手を返すより早し。茲に因つて越後勢、未だ懸り來らざる〔にノ字脫カ〕、一町餘引取り備を立つる。謙信の術には、左右先衆備、共に一度に鎗合を始め、諸手亂れたる時、旗本と旗本と相逢ひ、勝負を決せんとなり。斯くて雙方前後左右、只一時に入亂れ、一手切にして相戰ひける間、主討たるれども、從助くる事を得ず、父が組んで落つれども、子是を顧みず。謙信其日は、態と大灌の鎧に、靑き綴子の胴肩衣を着し、三尺九寸と聞え、國吉の打刀を抜き持ち、直江市兵衞・稻津三右衞門・片桐三介・瀨場四助・滕尾五郎丸・田井六郎とて、天下無雙の太刀打、物の達者を、諸國より選み、六人抱へて持たれけるを、左右に隨へ、こね返したる敵陣へ一番に亂れ入り、相手嫌はず切つて廻り給ふ。武田勢も諸手亂れ、父子主從押隔り、手々に組臥せ切合ひける間、信玄の旗本騷ぎ立ち、大將のまします處も知らず。謙信も、猶以て深く働き、一所に居給はず。之に依つて六人の力士共も、自身の敵に透を得ずして、主の在處を失ひ、謙信一騎になりて馳せ廻る處に、黑き鎧に、

香染頭巾し、念珠を手に懸けたる法師武者三人、一所に立ち、侍十人計り打圍みたるあり。謙信、見付け給ふと等しく、馬を馳せ寄せ、先達のかせ者共切拂ひ、三人が中、信玄と見ゆるを、重打に三刀切り給ふ。後に對ぬれば、其武者、信玄にて坐しけるとなり。信玄刀を抜合せ、二太刀迄受け給ふ。後の刀は、肩先より籠手に懸けて、打迦しに當る。此時左右にありける侍、鎗を以て、謙信の馬の三つを突きける間、馬さうだつて駈出づる。信玄、陸歩者四人追ひ來り、謙信を引落し奉らんとしけるを、謙信と勝尾と二人して、四人が中二人を討ち、切拂ひ遁れ給ふ。去る程に信玄十一備の內、飯富組・穴山組を以ては、越後勢最初に懸る。二組柿崎和泉・河田豊前を切崩す。殘る九組は、信玄旗本、共に總敗軍なり。謙信跡備の內、中條五郎右衞門・長尾小四郎・本城清七・加治內匠・直江山城、五備を以て、廣瀬迄追討にして、典厩幷山本道鬼・諸角豊後等、數輩を討取る。太郎典厩は、若き大將にて坐しけれども、さすが信玄の骨肉を寫されたりと覺えて、廣瀬の渡り二町計りに見懸けて、一度に返し合せて、比類なき働故、信玄旗本其外諸勢、遁れ去る事を得たり。典厩と山本、其處に於て竟に討死なり。義信も二箇所疵を負ひて、辛々切り遁れ給ふ。信玄も此度は、右の腕と脇腹と、二箇所手負ひ給ひ、御身も自由に動かず。敵は隙なく慕ひ來る。わるびれて見え給ふと、雨の宮十兵衞といふ義信の侍、浪人して武州に候時、太田家來間宮に語る。扨西條山へ懸りける信玄の先手飯富・高坂等、逸足になつて、雨の宮上の渡りに押付け相戰ふ。此時は、謙信公馬廻の侍は、宿所宿所にて別れ、僅か五六人を從へ、宇佐美駿河が跡備の內に坐ます。祕藏の放生月毛といふ馬も突かれて、働かざりければ、近習の侍和田木兵衞が馬を取つて來り給ひ、使番を六人迄、敵を追うて、廣瀬まで進み行きたりける。長尾・中條・本城・直江へ遣され、西條山を、敵押し來るとも、早々人數を纏め、犀川を越し引取り候へと、下知をなされ、謙信は、殘れる備宇佐美一手と、又〔一字缺〕度の軍に打亂れたる柿崎・河田・斯波田・三寶寺等、諸手の士卒を集め、二千計りにて、甲州先衆眞田・高坂等が組に、一萬餘の勢に相懸りにし、戰はしめ給ふ。是れ廣瀬の味方を引かしめ給はん爲めなり。駿河守、謙信公を引かせ奉らんと存ずるに依つて、三寶寺と同じく馳せられて、殿は先づ廣瀬より引取り候御下知坐し、犀川を恙なく越し候樣に遊ばされ候へ。爰は三寶寺・荒尾等罷在る上は、御下知に及ばずと申上ぐる。謙信、夫には御取合之なく、先づ左手先なる眞田が一手に懸りて追崩し、其後に駿州は、人數を連れて、上の瀨を越し引取

り候へ。味方高梨・山際迄、繰退きて見るべし。其時節何方なりとも、打破つて、謙信は引いて歸るべし。弓矢八幡も照覽、違言なしと、大に怒り給ふに依つて、宇佐美も三寶寺も、畏り候とて、人數を北へ廻す。扨左の手先眞田、高坂が備に切つて入る。侍には深淵主馬助・荒尾對馬・柳勘右衞門・神保作屋・長尾遠江守、五百餘人に過ぎず。謙信は、三百計りを、馬の前後に固めて、深淵・柳・神保等、戰屈せし時入替り、味方を助け給はんとて、控へ給ふ。廣瀨にも、甲州勢手を分けて、懸るに依つて、中條五郎右衞門・長尾小四郎・本城清七・加治内匠・直江山城、犀川の河原にて、取つて返し相戰ふ。本城清七・加治内匠・飯富兵部・馬場民部に仕負け、川中にて追討に遇ふ。長尾小四郎・中條五郎右衞門は、相木・蘆田・小山田組を追崩す。廣瀨の戰は爰にて、畢本の戰場に在り。謙信公と、宇佐美・荒尾・柿崎衆には、高坂・眞田・甘利・小幡等、五千計りにて附け來りけるを、深淵・荒尾・柳・神保、謙信公御馬廻加はりて八百餘人、散々に相戰ひ、切崩さんとせられしかども、武田衆軍法違はざるに依つて、一旦崩さるれども、亦人數を纏め、後度の戰にて追返す。其間に、宇佐美も廣瀨の勢も、高梨の山腰迄、人數を引上げ候と見給ひ、謙信采配を取つて、味方を廻し、犀川の釣瀨を引越し給ふ。敵引付き、喰留むるを以て、

謙信自ら返し合せ、敵合をなさる、既に五度。越後衆多く討死す。甘糟近江、其時葛尾を下り、千計りにて押廻すを見て、武田勢、早々貝津に引入りければ、日已に夕陽に及ぶ。謙信は、餘りに強き御働なるを以て、御腰物をも、三度迄帶び替へ給ふ。後には和田木兵衞一人を具され、高梨山に懸りて歸り給ふ。武田勢、越後へ討取る首數二千八百餘と云々。其内侍大將首三つ。越後方戰死の其數、以上二千十七人なり。謙信は、夫程強き御働にてありつれども、薄手にても負ひ給はず、越後の侍大將宗徒の衆梅津宗三の外は、一人も討たれず。凡そ此戰の事、關東に於て、太田三樂評判して、初度の鎗は、十に十謙信の勝。軍場も、越後衆蹈入り、大將分の者をも討取り、後度の軍は、十に七つ信玄の勝。相引と雖も、軍場は甲州衆、蹈留りたる理なり。又越後衆大將分の者討たれざるは、さなる謙信手柄と取沙汰申すと雖も、夫は理を知らぬ大樣の批判なり。是程の手切の鎗には、吾が生死さへ、我人心に任せず。多き侍を、謙信なりとて、何として死せざる樣、仕らるゝ道のあるべくや。夫れ吾人、敵も味方も、天命のなす處なりと、語りて申されけるとなり。甘糟近江、葛尾といふ所に、兩日逗留。三旗打立て、引後れたる雜人・下部を集め、手負ひてよろぼひ臥したる者共の生死を窮め、貝津より

は僅に十五町を隔て、取納めたる體、實にも聞ゆる勇氣智謀兼備せる侍大將なりと、沙汰あ
りける。

○永祿五年壬戌正月、氏康より、信玄へ、使者を以て、武州松山の城は、以前より氏康持分の所に候。然るを去る頃、太田三樂、越後の柿崎と成合ひ、量らざるに乘取り候。松山東國の固めたるに依つて、是より奥筋近國の手使、心の儘に相叶はず候。然れば近日、氏康人數を出し、彼城を取返し申すべく候。左候はゞ、定めて三樂、越後へ後詰を頼み、謙信を引出し申すべき儀疑なく候。此度は專度と思召され、信玄公御馬を出され、氏康が警固を遊ばされ下され度候。松山を取り、武州を押へ治め候に於ては、以前の如く、節々御不詳の儀申入間敷候と、相頼まれ候に依つて、信玄領掌まし〳〵、甲州幷に信州へ陣觸あり。

松隣夜話　巻之上　終

松隣夜話　巻之中

二月下旬、信玄義信、一萬八千餘騎にて、武州に發向せらる。北條は、氏康・氏政・其弟源藏二萬八千騎、兩家合せて其勢四萬六千餘騎、松山を取圍み、晝夜を嫌はず攻められける。武田勢の內甘利左衞門與力米倉丹後、竹手束といふ物を仕出したりし寄にして、諸手攻め近付くを以て、城內の火炮、する業左迄之なく、籠城の兵士、皆退屈に及ぶ。友貞も軍卒も、晝夜粉骨を盡すと雖も、武田北條兩旗、五萬に及ぶ大軍にて、かつき連れて攻めける間、防戰に術絶えて、三月十日、友貞降陣になり、城を明けて渡す。太田三樂は、其前越後へ使を越し、謙信出張之あるべき由、返答に於ては、無事故、寄手を拂はん事疑なしと、思設けたるに、存の外落城急なりければ、臍を喫んで、前橋迄出迎ひ、謙信公の到着在すを、相待ちたりける。氏康・信玄へは、又謙信出張の旨、友貞が白狀に聞かれてければ、兩軍山を後にし、利根川を前に當て、鳥雲の陣をなし給ふ。謙信は、其二日、百八十騎にて、前橋に

御着なり。三樂に對面し、大に怒り、是程の不覺人に、要害を預けて、謙信を引出し、手を取らせ恥を見せ給ふ事、甚だ奇怪なり。其儀ならば、三樂と討果すべしとありて、刀にて追懸け、場中にて三樂を手討にすべき樣子なり。三樂騷がず申されけるは、仰誠に御尤に候。さり乍ら上杉殿御浪人以後、某僅の小身にて、氏康大身の持分に挾まれ、今迄滅却仕らず罷居候儀、全く他事にあらず、偏に謙信公弓箭の御陰に候。されば今度に相限らず、何時も氏康・信玄、大軍にて、仕懸け申さるゝに於ては、某二千・三千にて、孫子・吳子が術を得ても、手に及ばざることに候へば、重ねても御助を待ち奉る外、別儀なく候。然れば三樂、意なき禽獸にても候、流を斟んで、爭てか淵を汗し申すべく候。友貞事、多年手に付け候て、武藏・上野所々の働を勘辨仕るに、終に不覺の儀之なく、上又三樂が重恩を以て、安全仕りたる者にて候ひつるに依つて、斯樣に之あるべくとも存ぜぬ事、某愚蒙のなす處、是非に及ばず候。弓箭・鐵炮・玉藥・兵糧等の儀は、さりとも半年は不足なく、其覺悟仕候。又餘りの御事に、人質に取り候友貞が弟と實子共、是へ召具し候。彼是御覽遊ばされて下され候へとて、兵糧・玉藥の註文と、友貞が子弟を御目に懸くる。謙信席を立ち給ひ、二人の童子の長き髮を、左の手に握り、

中に提げ、右の手にて卽ち刀を抜き、兩人を一打に四つに斬りて投捨て、氣を直し、酒を乞出し、一つ召され、三樂に差し給ふ。三樂、少しも遲々せば能からんと思ひ、差寄りて、一つ傾け、側を引取り、虎口の死を免れたる心地にて、息次ぎ居たり。謙信、又三樂を呼出し、謙信是迄遙々出でて、手に合はずしては歸るべからず。利根川の陣に懸けては、信玄工夫の深き人にて、又手を結びたる軍なり難かるべく候。近邊に氏康が要害はあらずやと尋ね給ふ。三樂承り、山の根の城と申し、奥へ下道四里候て、氏康祕藏の要害御座候。是には忍の成田が弟小田助三郎、長濃對馬守を籠め置かれ候。併差當てざる處に、武田北ぐるに依つて、越後にて受領致し、伊豆守になる。（是より以後、倍々蟲失損害に依つて、漸く殘りたるを記す。最も落節多し。）天正三年、北條伊豆守、直江山城守等七組衆、謙信公へ申上げて曰、信玄死去の後、甲州騷ぎ立ち、長坂長閑・跡部大炊といふ兩人の者、口入致すに依つて、勝頼と家老の間不知になり、度々備相違ひ、鎗向微弱になり、相見え候に依つて、若年の勝頼に、夢を見せ給はん事、然るべからずとありて、去年三月、大龍寺を以て、無事をなさるべき由仰越さるゝ處、勝頼合點申さず候。其上去年秋の程より、遠州・尾州に勝頼發向申され、信長・家康を追付け、信玄代にて、

終に手に入らざる處、新しく切取り、結句手向の強き事は、信玄にも增さる樣に、弓矢不勘の者共、取沙汰仕候。さ候へば、甲州・信州の間に御馬を出され、取合をなされ候とも、弱氣なる勝頼軍法度に違ひ、信長・家康を相手に受けしよりは、大負仕らるべく候。さ候へば、あたら國を信長・家康に取られ給はんより、甲州・信州の儀は、先づ差置かれ、飛驒・越中は、此方より御手使をなされ候へかし。何れの道、歸する處、信長・家康と近年の間、有無の御一戰を遊ばさるべき御事に候へば、其便宜に候と申上ぐる。謙信領掌まし〳〵、越中の椎名を退治せらるべき事に定まる。

天正三年二月、越中の椎名へ使者を越され、來月上旬、一萬にて、越中筋へ働き申すにて候。其用意あるべき由仰せらる。是に依て、椎名、甲州へ、甥の椎名又市を差越後東は〔誤字アルカ〕直江山城守・川田豐前、合せて二千、御旗本は甘糟近江・長尾小四郎・中條五郎右衞門・竹股勘解由・赤輪新介等、前後の備以上二千。義景は五六町を隔て、利根川の方に當る。崔鬼の嶺に陣を張る。謙信、將を會し給ひ、今度は、無理に各の一命を、輝虎所望申す。城乘の方便は、吾れ下知を加ふるに及ばず、只荒攻めに仕られ候へ。某は是より見物申すべく候。若し後詰めあらん時は、本陣の相圖に隨ひて、下知を待ち候へとて、繪圖を出し給ひ、城中には之を知らず。然る處に、矢倉にありける侍、小田の役所に來り、利根川の方より、馬煙夥しく見えどよみて、次第に相近付き候。氏康公、奥筋へ御手使候やと申す。小田覺束なくて、長野を伴ひ、矢倉に上り之を見るに、兩將利根川におはす軍門の前を押通り、敵の寄すべき樣なし。近國には、輝虎と太田ならでは、敵はなし。輝虎と三樂は、松山の城後詰の爲め、昨日より前橋に着きたりと聞ゆれども、城は落ちぬ。今日は定めて歸陣たるべし、若し夫れ謙信誤つて、奥筋へ手使申さるゝとも、兩將斯くて在ませば、爭てか一戰あるべき。さるにても亦、味方にてはあるべくとも覺えず、大物見に出て、七八町西に當る丸山峠へ乘上げける處に、太田三樂先將澁谷が一手、三百計りにて寄せ來りけるに、險しき山の嶺に、面突く程に行逢ひたり。雙方振方あらずして、驀向に鎗を合せ、一足も退かず、分々に、當々の敵に相當り、物見の兵士は、一人も殘らず、丸山に於て討死し畢。小田は、太田が家來深川修理といふ者に討たれて、首を授く。長濃對馬は、小田が使を、今やと待つ所に、丸山の邊に鐵炮の音聞え、誰とは知らず、其勢二千計り、しくろうして、小田が下部の陸者共を追ひ來る。すはやと見

る處に、又、南の山の手より、銀の吹流・矢筈の指物餘多差させたる一備、馬煙を擧げて相近く。長濃大に驚き、手別をし、各持口に馳合はんとすれども、込合ひて騒動しけるに依つて、下知ならず。對馬守齒を嚙んて、口惜いかな、利根川の腰抜けたる味方を頼とし、不覺の死を遂ぐる者かなと、いひ捨て、西の門を破つて、亂入る太田勢に馳向ひ、與力同心十四五人伴ひ、暫く戰つて東を顧れば、北條・柿崎兩手の馬印、早や本丸の城地に立つ。川田組・直江組、共に續いて攻め入る。就中太田勢は、西の川の手より、嶮しき山を一息も繼がず攻上り、外側を破り、二の曲輪の門際迄、切入りけれども、長濃隙なく防ぎ戰ふを以て、本丸へは未だ入らず。去る程に城兵、餘りに強く攻められ、足を立兼ね、明きたる方北を指して、押なだれたるを見、長濃・對馬、同心の由良五六を近付け、御邊は早々本丸へ入り、清水と吾が妻子共を下知をなし、能きに計らはしめ給へ。郎從共殘り居り候へども、定めて未だ事果さず、罷在るべしと推量仕り、賴入候といはれければ、五六、委細相心得候。御心安く御戰死遊ばされ候へ。某は御子息達の御供を仕り、卽ち追付け參るべしと、申して立別れ、主從四五人にて、本丸役所へ入り、長濃と小田が妻子を相仕廻はせ、五六も一所に自殺す。對馬は、此城辛勞して、全く守りたればとて、いつ迄保つべき。中々に心行く程打合ひて遊ばんとて、三樂、旗本へ切つて懸り、比類なき働して、父子主從十七人、一所にて討死す。去る程に、直江山城・川田豐前・柿崎和泉・北條丹後・太田三樂、三方より同時に乘入り、謙信公下知に任せ、老若男女・僧俗を別たず、當るを幸に、突臥せ切倒す。謙信公、諸手過半乘入りたる時節、御旗本より、竹股勘解由、本城清七に組合ひて、六百計を別けて、北の方へ廻し、鐵炮を持つて、遁れ出づる者を打たしめ給うて、依て助くる者、百が中に、一二もある事稀なり。城中に籠る處の兵士、何れも北條家に於て、度々の武邊、仕馴れたる勇士共なりと雖も、鐵炮を二つと快く放敢へたる者之なく、三方の寄手急に攻め、刹那の間に乘入るを以てなり。謙信公、丸山より始終見給ひ、侍は常の事、雜人下部迄、一樣に身命を塵とも思はぬ働、見事なりとて、節々讃歎し給ふ。辰の刻に取合始まり、午の刻に乘取る。抑今度山の根に於て、城兵死する者上下男女幷に僧童、凡そ二千六百人なり。寄手には死者三百七十五人・手負五百人なり。事終りて、卽ち諸手を丸山へ打入れ、腰兵糧を仕ひ、人馬を休まし、城をば乘捨にして、又本の路を歸り、利根川下の瀨を渡し、前橋へ入り給ふ。永祿五年二月十三日、山の根の合戰是なり。坂東の諸將、敵・味方之を見聞

く者、凡そ開闢より以來、是程の仕課せたる軍を、未だ聞かず。武田・北條兩名將、四萬餘の大軍にて控へ給ふ處に、大河を越し押通り、老功の勇士二千餘にて持ちたる險難の要害を、僅か一萬計りにて、半日に乘取り、二度武田・北條の矢懸り近く押返して、恙なく歸陣ありし事、更に凡夫の態にあらず。只摩利支尊天の所爲なりとの沙汰ありける。長尾佐治右衞門といふ武邊功者の侍大將、小田原に於て、批判して曰、縱ひ謙信にても候へ。其時、味方兩旗を以て後詰なるに於ては、百に一も負けずといふ事あるべからず。輝虎も、決して此の如く存ぜらるべく候へども、生得に立派を好み、腹の惡き男にて、其時は一人も殘らず討死する迄ぞと、見果したるより外、別の術是あるべからず候。不動明王と摩利支天とを以て、粉に摧き、等分に鍊立てたる謙信と雖も、山の根へ勢を押し候時、河を越させ、十町程を延べて、跡より仕懸け候か、又城を半攻め候時か、又は歸りて利根川に臨み、人數を三分一渡し候時か、合戰を始め候はゞ、爭でか遁し申すべく候。是非共に於て、合戰を遊ばされ候へと、某はさしも申しつるものを、氏康御父子も信玄も、謙信は强敵なりとて、餘り御愼み過ぎ候に依つて、勇銳に氣を奪はれて、圖を迦し給ふとこそ存じ候へ。さりとては、人に勇氣も、重々淺深なる者に候。行懸り遁れざる場にて、一命を輕んじ候儀は、常々勇士の習に候。前橋より直に歸陣ありて、其難之なし。人の龍頭を渡り、虎の尾を蹈み太田等が意見をも用ひず、山の根を無理攻にして、引取り申され候事、分別なきは拠置き候處、健氣に於ては、古今希代の大將とこそ見成し申して候へ。似たるを以て、友とするならん、同行の太田三樂、右は增りの大剛の者、家來にては甘糟近江・長尾小四郎・川田豐前・上村甚右衞門（前名常松）・北條伊豆・其弟丹後・本城清七郎・柿崎和泉・直江山城・中條五郎右衞門・三寶寺織部介・加治内匠・荒尾一學・齋藤筑前・長尾義景等、是等は勇謀兼備して、比類なき者共にて候。又越後の龍四虎とて、十二人の荒勝負を得方にする者、直江市兵衞（山城舍弟）・禰津二右衞門・片桐三介・瀨場四助・勝尾五郎丸・田井六郎・志賀肥前・右黒藤藏・丸雲十兵衞・苦桃彌吉・志村新介・靑龍寺など、是等は小身者、謙信馬廻りにありて、鬼を酢に浸して、食はんとする奴原共にて候と語りければ、氏康公聞き給ひ、如何にもさる事にて候。夫に付きては、一度手に手を取組みたる有無の一戰を遂げ、今度利根川に於て、生眼を拔かれたる返禮をし、其後の樣子に依つて、無事をせんと思ふとぞ仰せける。山の根の城落ちて、引返し給ふ途中より、先達を待二人仰付けられ、前橋城中に於て、各役所

を割り別け、陣札を合せ打ち給ふ。太田三樂・北條丹後は三の曲輪、東城地の内は直江山城、北の出丸には、川田豊前・柿崎和泉と、各陣札に隨ひて幕を引き、城主入道謙忠は、西の丸穴門の内、一段低き地に陣を打つ。謙信、翌日謙忠を召す。謙忠、脇差を次の間へ抜置き、差入らんとするを、苦しからず、今日は差し候へと、仰せけるに依つて、又出でて脇差を差し、御前に出づ。其時謙信、書物を披き候へとて、自ら讀み聞かせ給ふ。

一、謙忠、近年當城に居り、隣境の樣子を存じ乍ら、山の〔一字缺〕の引導をなさず、他家の三樂へ讓る事。

一、柿崎和泉、平井より鳴瀨へ出でて、忍の成田と取合ひ、半載に及ぶ迄に、近境に居て、助成を知らず。加之忍が領内毛作を刈られ、困窮すと聞きて、畠が瀨より、舟にて敵陣に兵糧を遣す事。

一、小田原陣の時、成田と談じ、謙信に對し、逆心これある事。

一、家來の侍戸部といふ者を、甲州へ遣し、歸着以後、妻子眷屬迄之を害す。其意、謙信が聞かん事を相憚る隱謀の企、疑なき事。

右の條數に依つて、唯今誅を給はるとありて、刀を抜き、謙忠が脇差を、半計り抜きたる所を、首を懸けず打落し給ふ。さありて、宇佐美に仰付けられ、御旗本百人組幷に苦桃組等を以て、謙忠が與家來、西の丸にある所、之を殺害せしむ。宇佐美先づ石垣を上り、西の丸を見下し、謙忠家來川原與八を呼出し、旨を申渡す。但し謙忠幷に傳右衞門に對し、好之なくて、出去るべき者は、御構無しの之間、穴門より、番手の侍竹股に斷り、出通べき、委細に言聞かせ、二方の石垣の上に、楯を一面に突き、弓・鐵炮を以て、與家來上下五百人、卽時に殺害せしむ。早や少々は、穴門より遁去る輩も之あり。但し女童は、一人も死せず。是は去々年、當城の普請ありける以後、城内は、妻子を籠置くべからざる由、堅く仰付けられ候に依つてなり。其時節は、諸人其意を曉らず、當城の儀は、武田・北條兩家の中間にある手當にて、謙信公、毎度御馬を寄せられ、取合繁き處なるに依つて、若しもの時、女童のありて、取忙てたらんものと思召され、禁じ給ふかと思ふ處に、科なき者の殃死せしを、痛く思召す事なりとは、今思ひ知られける。

去る程に、殺されける者共の妻子、城下の村里宿屋に居たる處、悉く尋ね問はれ、分々當々に

隨ひて、金銀・米錢を給はり、喝命を輔け給ふ。其内に謙忠が幼子十二三の童一人、母に連れられて近郷にあり。是は父が子にて候間、御殺害あるべき旨、耆老の面より申上ぐる。謙信聞召し、何條さる事のあるべき。其子成人して吾に敵し、父が恨を報いんや。夫は其者と、吾が天運ならん。吾亦、夫迄存命すべきや知らず。十二三の者なれば、父に與して、逆心の罪あるべからずとて、是も同じく金子を給はり、飢寒の愁を惠み給ふ。御子息景勝の時、彼の兄弟右馬助・右京亮と呼ばれ、加賀國市橋の城にて、忠死せし者是なり。

斯くて夜に入りて、御小姓頭井手彌兵衛・松永伊織を招き、美酒・嘉肴を催し、太田を始め、組頭の面々幷に諸侍を請じ、終夜勞を慰むべき旨仰付けらる、之に因つて一會を催し、三樂を始め、御家中七組の面々、其外諸士次第に居流れ、配膳を給はり、所々に古今の軍物語曉天に及び、三樂七組の耆老衆に問はれけるは、承るに、御家來の衆、諸方度々の御覺多しと雖も、一番鎗・初印等、先鋒にある手柄は、皆四十以前、二十・三十の若侍、又引陣の後働・切所・難所にて殿に下り、味方を助け、敵を拂ふ如き、後度の意（こゝろばせ）は、是れ四十以後、及び五十・六十の老武者なり。是れ何としたる御事に候。手柄は、吾人行懸の仕合にて候へば、老若の選は、ならぬ事に候。次（ついで）の御物語に、此仔細承るべく候との所望なり。北條伊豆守答へて申す。御不審尤にて候。さり乍らさ迄定りたる事にては無レ之候。年寄の先頭に進みし者、跡鎗をしたる者も、亦多く候。然る内過半は、只仰の趣に候。其仔細、先づ御了簡もあられ候へ。某等が如く老耄れて、若者爭て先を蒐け、一番に鎗合など仕ては、彌〻をこがましく、妨ぐる樣にこそ候はめ。頭の禿げたるにも恥ぢよかし。如何計り、武邊は珍しき物と思ふやらんと、推量せられ候はん事、尤も恥しく候。左樣候へば、態とも少しはいやな振をして、若殿原に先を仕る外、更に仕方なく候。さ計り申しては、老の果の遊山、一向に絶え申す外無レ之候に依つて、攻めて引取る後、働の捨首抔を致し、眠を覺し候と、語りて笑はれければ、三樂、如何にも、東國にて老功の者共、批判も斯く仕候。さりとては、御家程、弓矢高上の穿鑿、別にあるまじく候。手柄にも、年の程を恥ぢ候事、能き武邊と睦如くと隔なく、常になり候はでは、有難き事なりとて、數度之を感ず。鷄鳴頻に催しければ、各役所へ退出す。其次の日、今度山の根に於て、戰功を抽でたる衆、幷に戰死の者の子弟、委細に糺明せられ、各加恩を給はり、又は與力同心を附け加へ給はる。尤も感狀下されたる者も是多し。然して前橋の城を、北

條丹後に預けられ、三月十七日歸陣なり。

三樂は、前橋にて暇を告げて、浮洲通に懸り、鳴瀬に出で、成田居城朝日山の城下を相働き、麥を刈上るに依つて、長安忍び兼ね、五百計りにて城を出で、畠瀬といふ川を境に、相對しけるを、三樂ためらはず、二千餘にて河を渡して追ひ、上下百九十餘討取り、人數を引入れ、中武藏へ歸り、松山の城、乘取るべき其支度隙なく、松山には、氏康より、上田又次郎入道安齋を置かれ、雜兵加へて二千五百餘入れ置く。

謙信公、四月上旬、越府を御進發。越中へ出陣し給ひ、蘆田・時田を攻め、越中武禮・磯二鄕の御仕置仰付けられ、四月中旬歸陣なり。

甲州穴山梅雪より、越後北の庄龍峯寺迄、空庵といふ僧を差越され、其趣聊か故あるに依り、信玄、近來總領の太郎義信を押下し、庶子伊奈四郎を立てんと仕られ候。其積累猶止まず。矛楯の機、既に顯はれ候。さ候へば、謙信公、義信を養子になされ、取立てまし〳〵候に於ては、梅雪連れて、城後へ相越ゆべく、信玄家中にも、宗徒の者四五人も、義信を引き申す輩御座候間、更科より御取續け、信州は大方御手に入り申すべく候か。是れ多年御願望の由候。

義清を本地へ仕居ゑ給ふ計策の御調達なりとの口達なり。謙信公近習諸角喜介・本鄕八左衞門之を聞次ぎ、先づ七組の者老に相談す。七組衆、是は大吉事に候。甲州を謀る術の便なれば、早々披露仕られ、尤とあるに依り、兩人罷出で、委細に申上ぐる。謙信、其僧是へ召出し聞きて、梅雪にいはれ候へ。義信の使を以て、信州を取るとの儀、謙信合點申さず候。夫は是非と存ずるに於ては、人手は借る間敷候。義信は若く候へば、さもあるべし。梅雪、何ぞ是程空氣（うつけ）たる言葉を出され候や。身の寄處なき程に賴入ると候はゞ、謙信何とて慮外申すべく候。御坊黑衣に對して、今度は無事に歸すべし。疾く去れとありて、はつたと白眼み給へば、空庵、色を失ひ、走り出でにける。

同年五月、北條丹後・柿崎和泉、四千計りの人數を以て、朝日山へ取詰め、攻落すべき樣子なるに依て、長安、弟の紀伊守を小田原へ越し、加勢を乞ふに依つて、氏康自身、一萬計りにて小田原を御立ち、前橋へ押詰め、相働き給ふ。之に依て丹後・和泉、朝日山を拂ひ、前橋に歸り、片田に陣を張り相對す。太田之を聞き、江戸を發し、忍を退治せんとて、又鳴瀬へ働き、次第

に取詰むるを以て、長安より、羽使を前橋に飛ばして、氏康を頼む。氏康之に依つて、前橋を差置き、中道を經て、武州へ出で、千町が原に陣を取つて、江戸へ働き給ふ。三樂之を聞き、又鳴瀬を引取り、江戸の城へ歸り入る。太田歸城しければ、氏康武藏を立ち、鳴瀬へは加勢の爲め、物頭二人、其勢五百計りを差越し、小田原へ軍を入れんとし給ふに依て、北條家の者老北條左衞門佐・同名玄庵・氏康へ申しけるは、今度武田御救の爲め、御旗を出され候儀、隱れなく候。然る處に、後詰の一戰をもなされず、敵を除け給ふ。所々に御陣を移され、此儘御歸陣ある事、一圓其意を得ず候。且は天下の嘲弄ともなるべし。此間、北條・柿崎・太田三樂等、鳴瀬へ罷ある內懸り、一戰遊ばし候に於ては、疑なく御勝利にて之あるべく候はんものを。此圖を迦し給ひ候。是れ一つ。さなく候はゞ、又北條・柿崎・鳴瀬より押戻り、味方と對陣の時、押懸け候はゞ、敵は三千、味方は一萬なれば、是れ又爭でか二人が中一人、討取らざるべく候。是れ二つ。抑如何なる御遠慮にて、勝ち給ふべき軍を遊ばされず候や。承るべく候と、諫めければ、氏康、二人を近く召され、さゝやいて仰せけるは、汝等能く勘辨仕候へ。此度直に鳴瀬へ押付け、柿崎・北條をも討果さず、又中武前橋にて、一戰をもなさゞる義、遠慮ある

事なり。さあらざれば、氏康大軍を持ち乍ら、僅か計りの者共近場に置きて、爭でか根を斷ち て葉を枯らさゞらん。先づ思ふに、謙信は軍の勝負、家の浮沈、身の安危にも拘らず、只健氣をのみ好みて、差當りたる圖を迦さぬ者なり。汝等も見聞せる處なり。見候へ、只今にても、泉州・丹州・三樂等を、吾等取詰め、或は討漏し、痛くも當るものならば、無二無三に押來り、急戰を遂げん事疑なし。左候て、謙信と我等、手詰の軍をせば、大事の勝負にして、安からざる事なり。某は近國に、大敵を餘多持たざれば、年を逐うて大身になり、八州をも、後には手に入るべきの處に、其時をも得ずして、危き軍をせん事、武器の不足といふべし。只今の樣に所々に相働き、手を結ばざる分にては、謙信も、甲斐・能登・加賀の大敵に、隙なきを差置きて、當表へ來る事は、あるまじきなり。彼方より無理に手を出し、仕り懸けん時は、止む事を得ず、此方より思慮なき働をして、大敵・強敵を引出し、危き取合を仕るを、名付けて下手といふぞと、明し給ひけるを聞き、兩人も、淺からず服心仕り、千町が原を引拂ひ、小田原に歸陣なり。三樂、武州下屋といふ處に塞を拵へ、取續きて松山の近邊へ、節々働き出で、青田をこね、麥作を刈る。或時三樂、三千計りにて、例の如く相働くに依つて、松山の城主上田又次郎、

是も二千計りにて出向ひ、一戰に及ぶの處に、思の外散々に仕負け、十町程追討にせられ、與力同心多く亡し、辛く松山へ遁れ入る。此事を、東國にて、敵味方共に嘲弄し、又次郎面目を失ひ、憤に堪へず、如何にもして、會稽の恥辱を雪がんとする事他事なく、其折にも、松山の近所落合といふ所に住む浪人の子童を、又次郎取立て、衾直させ、懇意に召しける者、密に主の又次郎に語りて申しけるは、親にて候者は、多年三樂に親み、家來の如く出入を致し、心安く仕はれ候。左候へば、其儀御氣に違ひ、御家を出てたる體にて、暫く引入罷あり、其後親にて候者を、三樂方へ遣し、今時分、松山の城主又次郎と、同心中間不和の儀出來て、矛楯に及び候。早々人數を懸けられ、城を御取り候へ。註進の人質には、某父子の間、一人は御城へ留り、何れなりとも、一人は御手引に御供仕るべしといはせ候はゞ、疑なく太田急に發し、當城を攻め申さるべく候。其時に當りて、御謀をなされ、三樂を御計り、近國の人口を塞がれ候へかしと申す。上田つく〳〵之を聞き、誠に謀の次第、尤も賢く、三樂を討たん事、案の內なりと思はれければ、僞りて勘當を致し、城中を追ひ出す。彼小々姓落合に歸り、兩月日を過し、永祿七年四月下旬、父子相連れ、太田へ到り、然々の通證を擧げ、據を正し懇に語り告ぐ、

三樂、以の外に悦び、先父の腰刀を取り、兩人共に籠め置き、二千五百にて打立ち、其夜は下谷に着し、翌五月朔日早旦に押寄せ、堀岾共いはずして、乘つたりける。又次郎、其前小田原へも、此由を申通じ、伊勢兵庫富永大學といふ侍大將二人、雜兵五千を呼寄せ、鞍懸といふ深山に置き、自身も城を出で、二千を隨へ、瀨田ヶ谷に伏して相待つ。城には先年當城にて、三樂に計られし北條雅樂が弟黑沼伊豆遠山左衞門芳賀伯耆、二千計りにて籠り居たり。三樂さすが明察たりと雖も、斯かる謀ありとは夢にも知らず、三千五百の勢を三手に作り、先陣は間宮刀根大法寺大膳二千餘兵、後陣は三樂千五百、堺の太田筑前坊を跡備として、眞丸に作り、甲をうつむけ、攻盛つたる最中、上田又次郎二千餘兵、佐藤一景といふ法師武者を大將とし、太田を包み、寄せ來る。三樂之を見て、馬廻千五百の內六百を別けて、筑前坊に相副へ、東の方五町程隔て、備を立て、敵味方の勝負に構はざれと下知し、自身は一千餘騎、南向に備を立て直し、佐藤組を左右に置き、鐵炮にて射さしめ、敵の備しらみたる處へ鎗を入れ、空立てける間、又治郎が先頭一景、足を立て兼ねて見えけるに、鞍懸に伏し居たる大軍同時に發し、相圖の刻限に違はずして、雲霞の如く群り、戊亥に當りたる丸山に差上げ、太田勢を目の下

に見、鐘を鳴らし鯨波を擧げ、足を亂さず、閑に討つて懸る。城よりは遠山左衞門を大將とし、黑沼伊豆守千餘兵、城戶を開き討つて出で、いらつて切入るに依つて、金鐵を欺く太田勢も、防ぎ兼ねて、足竝になつて見ゆるに、三樂が先將間宮兵庫・刀根內匠・大法寺大膳等相議し、引いて去らんとせば、味方の兵士一人も遁るゝ者なく、只一途に死を窮め、戰はんには如かずとて、二千計りの兵を三に別け、立替り〳〵相戰ふ。丸山の大軍に渡し合せ、一足も退かず、三樂も、先陣に數度使を遣し、唯死を仕れとぞ下知せられける。三樂旗本も、城より出でたる遠山左衞門に取立てられ、五六段控へてしさりしを、三樂、馬廻百人計りを以て切つて廻り、竟に又せり返す。後には一手切になりて、間宮・刀根・大法寺は、二千餘兵にて、小田原勢、伊勢兵庫・富永大學と戰ひ、三樂千五百にて、遠山左衞門・佐藤一景・黑沼伊豆・上田又次郎と取合ひ、敵味方以上一萬計りの人數、亂れ合ひて、子は親を助くべき隙なく、從者は主人を蹈付け、切伏せ突頽す有樣、敵味方一人も生殘りてあらん程は、事果つべきとも見えず。三樂增の筑前坊は、六百餘騎にて、五町を隔て、東の山の手に備へて、兵を動かさず見物してありける。五月の永き日に、辰の刻より始り、未の時に至れども、未だ竟らず。屍は忽ち山をなし、

血は野邊の綠を染む。兩陣戰窮りて、矢盡き力堪へざるを見澄し、筑前坊六百餘人を從へ、弓・鐵炮を投捨て、鎗障を立てて、上田又治郎が後陣に廻り、鯨波を作懸け、切入りけると等しく、二千五百の兵士、跡より崩れ、きたなし返せと雖も聞入れず。瀨田ヶ谷の方は靄き立つ。太田勢是に氣を得、揉立て〳〵攻めける間、小田原より來る三千餘人堪へ兼ねて、敗軍せしに依つて、城兵も足々になりて、松山へ引入る。三樂は、萬死を出で一生に遇ひ、軍場を取り、鬨時を行ひ、下屋迄漸々引取る。斯くて三樂、總軍の中より、手負はず疲れざる逞兵を勝り、三百人を從へ、夜廻を致し、草臥れたる役所には、大聲を懸け、諸軍を警固せられけるに依つて、上田又次郎が夜討せんと籠城して、晝の手に遇はざる兵士三百計りにて、落合の山の嶺へ差擧げけれども、中々窺ふべき樣なかりければ、鐵炮少々打懸け、競を見せて引返す。抑此度松山に於て、敵・味方宗徒の討死する者其數多し。太田方には、先づ家老大法寺大膳が長子同名武藏守・侍大將間宮兵庫・澁谷主水・平山勘右衞門・太田勘解由・刀根五助・平崎大之介・大井土岐等を始めとして、侍二百六十人・雜兵一千三百人と記す。北條家には、遠山左衞門・黑沼伊豆守・佐藤一景・和田左吉・松田修理・曾我內膳・遠山虎之介等、侍百九十二人・雜兵一千四

百餘人、永祿七年甲子五月、太田三樂・上田又次郎、松山の城にての大合戰是なり。

永祿八年正月、武田信玄、子息の太郎義信・家老飯富兵部少輔・近習の長坂源五郎と、義信小姓八十人餘成敗仕られ候。其趣は、四年以前、信州川中島に於て、信玄振廻宜しからず、義信は敗軍の時も、三度迄返し合せ、健氣の働をして、信玄の旗本を助けられ候。此事を飯富兵部能く存知し、沙汰し候に付、信玄大に憤り、父子・主從の間、宜しからず。義信逆心と號して、件の如しと、上州下田安房守書付を以て、三樂方へ註進す。同年五月十九日、公方光源院義輝公、三好松永が爲めに弑せられ給ふ由、織田信長、飛脚を以て、謙信へ註進す。同年六月、謙信公、佐渡庄內へ御馬を出され、八月上旬迄、軍馬を立てられ、田原の定守伏す。

同七月、柿崎和泉・北條丹後、上州下分に働き、毛作をこね、夫より和田へ取詰め、巡見するの處、武田衆堅く守るを以て、早々引取る。其時、青沼新九郎といふ謙信寵愛の小姓、遠筒に當つて疵を蒙り、翌日前橋に於て死す。是は北條丹後與力青沼勘兵衞三男、久しく越後へ相詰め休息する爲め、六月より父が在所にあり。謙信公、佐渡より御歸城坐し、新九郎御暇を申さず、忍びて在所へ罷歸り、剩へ多日逗留致し、是非に及ばず由、大に怒り給はせ、掘埋めた

る新九郎が屍を引出させ、首を斬り、獄門に懸け、父子兄弟悉く御追放あり。又如何なる密事を聞召しけるにや、北條丹後甥伊豆守末の弟水右衞門とて、其年廿二三歲、若く清げなる侍ありけるを、飛脚を以て、越後へ召出され、御不斷御居間に於て、御詞を懸け、例の國吉二尺九寸を以て、袈裟刀に切つて捨て給ふ。

三樂は、去年松山に於て、大剛の兵士共、餘多損害せしむ。悲歎の涕、未だ乾かず、只暗然として、諸方の手使を止め、供佛作善の營の外他事なし。然る處に、其紛に乘じ、北條氏康子息氏政、二萬餘騎を率し、上田又次郎入道安獨齋を先陣として、上道中武藏に取詰め、江戶の城を攻落さんとす。平井・柿崎・前橋の北條、相共に中武の虛弱を警固の爲め、兩方より三百五十宛、都て七百人の兵を別けて、太田方へ遣し置く。三樂、是等に芳賀・大法寺・高梨を相副へ、二千五百を以て、城內を守らせ、吾身は二千五百を手に付け城を出でて、下屋に陣取り相對し、度々の迫合あり。謙信は、佐渡歸陣あり。追付上州・武州筋へ御馬を出され、太田が勞を助けんとて、陣觸れ之あるの處に、江戶より飛脚來り、氏康發向の其告あるに依つて、早速御起ち、先づ前橋へ着き給ふ。供奉の面々には、宇佐美駿河・川田豐前・甘糟近江・長尾小四郎・上

村甚右衞門・津田若狹・神保志摩・柴田出雲・中條五郎右衞門・荒尾右馬助・黑川意仙等、八千餘騎に過ぎず。氏康父子も、此城落去延引に於ては、又謙信出でて、六ヶしくなるべしとて、晝夜隙なく攻められけれども、城兵能く拒ぎて破れず。然る處に八月十二日、輝虎前橋へ來り、大勢にて、頓て後詰申さるゝ由、先達て聞えありければ、氏康、如何思ひ給ひけん、大道寺駿河守・北條陸奥守・同美濃守等九千餘の兵を以て、三樂を押へさせ、氏康・氏政は、一萬五千を從へ、小田原へは歸り給はず、鳴瀨より畠瀨を渡り、前橋へ逆寄に仕懸け、町口迄押込み、人數を打入れ、引取らんとせられけるを、越後衆宇佐美駿河・川田豐前・長尾小四郎以下三千計りにて引付け喰留むる。二陣は、謙信旗本組柴田出雲・中條五郎左衞門等三千、三番は、甘糟近江・黑川・竹股等二千餘人、城を出て備を立つる。小田原勢引き兼ねけるを、蒲上備前守一備、三百計りにて返し合せ、宇佐美衆に突いて懸り、追返すを以て、亂れ立ちたる大軍閑りて、一町程引取る。氏康も、本陣には氏政を置き、馬廻三千計りにて引返す。敵をくつろげ、味方を引締め給ふ。謙信返して、跡へ下りたるは、氏康の旗本と見給ひければ、此節手と手を取組み、雌雄を一時に決せんとて、三千餘の兵旗をうつむけて懸合ひ、自身鎗を取り馳せ廻り給ふ。大將此の如くなれば、越後勢甘糟後備の外は、總懸りなり。小田原衆も、後へ下りたるは、大方引返し相戰ひ、手を摧くと雖も、亂れたる大軍の內より、拔々に返したる事なれば、備定らざりける故、北條衆終に敗軍し、十町餘追討に遇ひ、武邊覺の衆北條新右衞門・長濃吉十郎・川上主水・遠山左衞門以下、侍八十餘人・雜兵四百計り死を致す。越後衆も、上下百五十餘討死。氏康父子、其夜は橋塚まで引取り、陣し給ふ。三樂は三千にて、其翌日前橋へ參られ、頭を地に付けて、此度の御禮を申して、其次に氏康、尙ほ橋塚に堪へて候に於ては、七組衆の內、誰にても仰付けられ候へかし。三樂御先を仕り、死を輕く仕り、高恩を謝すべきの由、之を申す。然る處に氏康・氏政、橋塚を引取り、歸陣の由相聞ゆるに依つて、其沙汰に及ばず。去ば忍の成田が城へ、勢を差向けらるべしとて、平井の柿崎和泉守・太田三樂・甘糟近江・北條丹後・同伊豆、以上五頭六千餘兵、永祿八年八月下旬、前橋を起ち、畠瀨より朝日山へ取詰め相働く。謙信は一日後れ、前橋を御立ち、氏康後詰の手當として、鳴瀨より西二十町を去つて、御膳嶽に陣を居ゑ給ふ。其勢五千餘なり。三樂・柿崎・甘糟等軍議を談じ、態と城を攻めず、村里を放火し、稻粱を刈取り、人數を打擧げ、御膳山迄引取り、小田原へは謙信出でて、朝日山を取圍む

との註進に依つて、氏政一萬五千にて、出で給ふと雖も、軍はなし。只御膳山南二里を隔て、對陣ましまします。鴫瀬へは、平井と前橋と太田より、間もなく働き出て、青田をこね、麥を振り稻を刈り、或は村里を燒き、近年の內、既に五箇度に及べり。之に依つて、民窮り士困んで、居住叶はず。老弱は溝壑に轉び、壯者は四方に散る者、擧げて計るべからず。忽ち荒處と成果てければ、長康すべき道なく、永祿八年九月、朝日山の城に火を懸け、家來侍悉く分散し、自身は小田原に參り、小扶持を乞請け、浪人の樣にてぞ候ひける。

永祿八年九月、寒氣漸々節を催し、峯々の雪、既に見事にて、九月半前橋を立ち、越後へ歸陣あり。

同年十月、越後御城に於て、七組衆を始め、諸侍へ配膳を給はる。是は每年三度づつ定めて、此の如し。人數廣大なるに依つて、三日に事終る。七人の大將・十二人の御先衆・六人の黨の衆・廿一人の大備の衆へは、自ら膳居ゑさせ給ふ。其餘の諸侍へは、引渡の時、銚子の柄に手を付け給ふ。但し夏の一節、諸方の出陣事繁きに依つて、御振廻之なし。

去る九月、前橋より御歸陣の路次にて、和田八助といふ浪人、挾狀を捧げて、道の側にあり。

長尾志村之介之を請取り、謙信公へ御目に懸けたり。其紙中、先年川中島合戰の砌、御召の放生月毛勞れて死し、下りて立ち給ひけるを、和田木兵衞、己が馬に乘せ奉り、數多の敵を主從にて凌ぎ、始終供奉を離れ奉らずしけるを、高梨山中にて、如何なる故にや、例の大太刀にて打捨になされ、夫よりは只一騎にて、御入城坐す。父にて候者は重科にて、御手討にはなさるべく候へども、早や年代相隔りたる御事にて候へば、以前の忠に思召替へられ、子にて候者は、御赦免を遊ばされ候て、下され候へかし。さ候はゞ、一度御膝下に候し、身命を擲ち、二代の忠に備へ申したき深念に候。此條、多年七組の衆まで、訴訟仕候へども、御取上之なきに依り、直達に及び候とぞ書きたりける。謙信公御覽ぜられ、志村介を以て、此者召し候へと、七組の衆へ仰付けらる。去れども七組衆、何れも合點申さず、宜しかるまじき由、申上ぐるに依つて、謙信、さらば手當を添へて、小田原へ差越しなさるべしとて、金子を二百兩程下され、御手書を給はり、北條氏康へ差越し給ふ。氏康大に悅び給ひ、謙信の手書を得るものならば、定めて器量の侍なるべしとて、卽ち召され、抱扶持を下さるべしとありけれども、聊か所存候條、御扶持の儀は、先づ辭退申上候。何者の寄子になりとも、仰付けられ候

へ。堪忍分にて、軍陣の御供には候し候はんと、達て申しけるにより、福島殿の同心になり、小田原に罷あり。其後一兩年經て、小田原衆、武田衆と、薩陲山に於て迫合ありける時、跡部大炊助、同心從者一人連れ、物見に出でて、福島殿の備近く乘懸けけるを、此八助渡合ひ、一人にて二人を討捕る。同所にて、二度目の迫合の時、馬場民部與力飛大貳といふ大剛の者と取合ひ、大貳を鎗付け突倒しけれども、馬場衆馳合せて首は渡さず。同じ場にて、兩度の働に依つて、氏康感狀に、所領を添へ給はる。然れども八助、御感狀計りを頂戴致し、所領をば受けず。其志、如何にもして、謙信公の御免を蒙り、越後へ歸らんと思ふにあり。謙信公聞召され、又志村を召し、汝宜しく七組の者共の氣を謀り、能き樣に申宥め、八助を越後へ召返す調達仕候へと仰せられ、志村も內々申上げたく存じ居たる折柄なれば、大に悅び、七組衆の內宇佐美駿州と直江城州と同座にて、申出しけるを、宇佐美聞き敢ず、やあ志村殿、聞かれ候へ。彼八助、如何樣なる所存あつて申すも計り難く、父の讐なれば、さめるまじくとも存ぜられず候。匹夫をも、其志を奪ふべからずと申す時は、別人が執し申すとも、志村殿心あらば、申留め給ふこそ本意にて候へ。八助一人あらずとも、何の缺けたる事ぞ、甲州の

飛大貳を、鎗にて突きたるが、珍事にならば、某は、飛ばぬ大貳なりとも、突いて御目に懸くべしと、御前へも申され候へ。御邊左樣にうつけたる儀を、重ねて執し給ふなと、大に呵りければ、志村面目を失ひ、座敷を立ち御前へ罷出で、有の儘に申上ぐる。謙信公御笑ひ、駿河守堅き言、今に始めず。志村腹立ち候な。然るに於ては、八助に早望を絶し候へ。當家に限らざる事なれば、早々有付き候へと、其方申越し候へと、仰せられて、其事止みぬ。

松山の上田又治郎安獨齋より、長江といふ禪僧を以て、太田三樂方へ申されけるは、去々年父子自ら人質に出でて、身を捨つる計策仕候。落合の童父子が事、重奸の者に候へば、定めて時日を移されず、首を召されて候はんと存候處に、思の外、未だ存生致し、長慶の御宅に候由、其聞え候。さりとは叶ひ申難き事に候へども、童が儀は、理を曲げて、命を給はり候へかし。年頃召仕へたる某、好み申すにては、努々之なく候。彼者、年の程には、比類なき健氣の者に候。古き言にも、後世畏るべしとこそ申傳へて候。さ候へば、助け置き、行末の器量をも見申度存候。御赦免に於ては、安獨齋生前の望足り候と、長慶に付きて所望あり。三樂聞きて、さぞあらん、實に此童、去々年十六歲の程にも似ざる振廻、智仁勇の三を兼備せり。後世

畏るべしとの理、義に當れり。唯生けて返すべしとて、長慶入道之を承り、父子の者を獄舎より出し、長江といふ使僧に渡す。二人の者感涙眼に溢れ、申出づる詞もなし。安獨齋の感悦、又大方ならず。甥の上田主計を以て、幣禮を厚うして事を謝す。是よりして松山衆、下屋に働く事なし。三樂も松山領へは、好んで人數を出さず、武州頃年平均。

永祿九年、越府に於て、七組衆を初め諸侍へ、正月配膳給はる。御儀式例の如し。一會事終つて後、各御座間に於て、尚ほ目祿を給はる。各名字を詳にせず。加恩を蒙り、與力と共に、御機嫌を預る侍、百餘人と云々。

深淵金大夫といふ尾州浪人、十年以來、御家中にあり。此者御座所次の間にて、仙可といふ若年を、童坊と差立す口論を仕り、仙可を捕つて臥せ、乘懸り押へて居候を、謙信駈付け給ひ、御腰を放されず、眞宗の脇差を以て、片手討に、二人を重ねて、一刀に四つに切放し給ひけるを、仙可の親內記といふ者、側にあつて之を見、金大夫は公儀を恐れず、狼藉の者なれば、さも候はん。仙可は未だ童の身として、遁れ申すべき樣之なき仕合、更に科なき者に候を、同罪になされ候儀、是非に及ばずと怒りて、脇差を抜き、謙信公へ切懸り奉るを、誤たず

蹈懸けて、二刀切らせ給ふ。初めの太刀は、內記能く合せて、背け身に當らず。後の太刀にて、右の腕を、手の首二寸計り置きて切落され、左の手に脇差を持ち、猶ほ切合せんとするを、御小姓上村伊勢松走り寄り、高股切つて打臥せ、仕留めてけり。謙信公、今日は汝と相討したとありて、大に笑はせ給ふ。

土佐佐保と申す侍の子に、若年の女ありけるを、年頃近く召仕はれ、常に謙信公、寢殿を放し給はず。或時古鄕見廻として、御暇を申し罷歸る。謙信公、取次の女房へ、三月二十日前後、日限を違へず罷出づべき由、堅く申聞かせ候へ。此者は、每度鄕惜みを致し、謙信が申付を、承引仕らざる事ありと仰せらる。取次の女房承り、嚴しく申付てぞ歸しける。扨三月二十日過ぐれども、此娘罷出でず。斯くて四月上旬迄逗留致すを以て、取次の女房、氣遣の餘り、飛脚を仕立て差越し呼出す。四五日經て後、謙信公聞召付けられ、御不斷所へ、彼娘を召出され、人や候と仰せければ、御小々姓荒尾助九郎と申す者罷出づる。謙信公、此女、去る仔細あり。只今御前に於て成敗仕る。女なる故、直には遊ばされぬぞと仰せける。荒尾承り、少しも遲々仕るに於ては、吾身全かるまじく存ずるに依つて、御聲の下より脇差を抜き、小首を

懸けず討落す。總じて謙信公、御家中死罪の者、他を十にして、其二三のみ。但し死罪に及ぶ者、事に依つて侍なれば、半は御前に召出され、御つぼの内などにて、三十五人衆に仰せて、せさせ給ひ、稀には自身も遊ばされけり。太田三樂、後日承り傳へ、北條丹後に語りて曰、貴方の主人謙信公、御武勇の儀は扨置き候。其餘の御氣質、凡て見奉る處、十にして八つは大賢人、又其二つは大惡人ならん。但し生得立腹にまし〳〵、其致す處、多くは僻事あり。其人の或は猛く勇み、無欲清淨にして、器量大に廉直にして隱す處なく、明敏にして下を察し、士を憐愍して育し、忠諫を好みて容れ給ふ如き、末の代にはあり難き名將。此故に、其八つは賢人と訓じ申すなりとて、談笑して去る。

永祿十年五月、家康より、内藤三左衞門信成を見廻として、越府へ差越し申され、音物には、謙信公へ高麗の御茶碗二つ、多年申馴れ候とて、宇佐美駿河・長尾・志村へ、唐の頭一つ〳〵之を送り、謙信公、使者へ對面なされ、馬を給はりて罷歸る。

同年六月、太田三樂、子息を召連れて、越府へ參られ、謙信公召下の御鎧を給うて、初着をせさせんとの望に依つて、卽ち應諾まし〳〵、御召の料に取置かれし紫絲の御鎧に、星甲を添へて之を給ふ。然して越後に、二十日餘り太田父子を御留めまし〳〵、丁寧に御馳走申すに、言語に及ばず。七組の衆・五人の諸侯、朝夕段々に振廻致され、謙信公毎度御相伴なり。毎日の遊興には、若侍に仰付けられ、鐵炮的弓的・責馬・鎗合・打合等なり。先づ射手の手垂には、芥川財右衞門、三十間にて人形を立て、五手の矢にて、九筋中る。鳴海義大夫・石川佐渡・長尾小四郎・飯田吾一等の侍、以上百餘人、何れも五手の矢を放ち、八筋六七を致す。鐵炮打には、長尾小四郎・本城清七・矢木傳右衞門・佐久間半之祐等、以上六十餘人、三十間にて、人形を十箇づつ打つて退出。其中弓に等し。鎗を仕る侍百餘人、馬を乘る侍二百五十餘人、兵法を致す者五十餘人、名字を記すに及ばず。夜に入れば酒菓を設け、鷄鳴に及ぶまで、古今家に弓矢を取る批判幷に御當家軍法の穿鑿、思ひ〳〵に語り慰む。

三寶寺が曰、是は些うつけたる申事にて候へども、此御座敷にて、嗜には及ばざる儀と、存じ申すにて候。抑今時和朝に於て、高名の大將衆、其數多く候。其中に於ても、先づ北條殿・織田殿・甲州の信玄・吾等の主人、又は安藝の毛利と、海道の家康、是にて候。其中に於て、何れの家か、始終天下を掌握にして、全うすべく候。只今は信長殿、五畿内を支配候へども、武田・

北條あり。又謙信も斯くて在られ候へば、竟畢定り申さず。御了簡の程、御序に承るべき由、三樂に申す。太田曰、斯樣の儀は、吾人天命にて候へば、人情の積を以て、申し難く候へども、其段は差除きて仰せられ候へ。某も申して見候へなん。毛利家の儀は、遠國故、細に承らず候へば、加へて申すべき了簡之なく候。さ候へば御屋形と信玄に北條と織田とは、〔脫字ア〕ルカ〕最早氏康餘年なく、其上近年病者になられ、久しかるまじくと見えて候。又子息氏政は、天下の儀は置き給へ。只今の四箇國も、人に奪はれ申すべく候。斯く申す某なども、氏康より生殘りて罷在候はゞ、一郡一里どもは、望み申すべく候。又信玄と御當家とは、龍虎の爭となり、どなたなりとも一方頼れ申す間は、兩月日と手間取りて、他方の御働相成るまじく候。信玄當年四十八、御屋形三十九、老少不定と申す內に、先づ階老より先立ち候。其積りに候へば、信玄果報短くして、近き間にも死し候はゞ、信長・家康の一方にして、此御方に對して、防戰なるまじく候　左なく候はゞ、以來は知らず、信長いよ〳〵切太り、終には四國・中國までも、仕配申さるべく候。其故は、上方筋の侍は輕忽にて、一城落つれば、前後皆、敵を見ずしても、明退き候。まして一二度相遇うて、手痛き目を見候ては、後途の鎗に及ばず候。東國・北

國などは、一度・二度・五度・六度まで詰め候とても、一同に草臥れ申す事之なく、猶以て夫を餌に致し、命さへ候へば、迫返さんとのみ仕候。是に依つて小敵にても、東北は國郡を取るに手間を取り候。家康なども、所柄武田・北條に攝せられ、今より上は、切取るべき國郡多く之なく候へば、是も先づ暫の程は、信長には手を出し申されまじく候。將の器量を申すならば、家康拔群勝れ申されて候。凌ぎ難き所をば、度々見事に化られて候。底意に、些ひねくりて、賤しき弓取と見え候へども、夫は今時末の世にて、結句能き事にて候。さて信長は、大氣無欲なる迄にて、其餘はそゝけたる將にて候へば、大身になり候程、愼薄く、無行跡なる儀、愈〻增り、全からん事定まらずと見申して候。信長頼れ候はゞ、其後は家康ならで、別にあるまじく候。さるにても是非定まらず、世間に於て、命ある者の穿鑿なれば、二五十又は二五七、心得べき事なり。謙信公仰せけるは、實に仰の通りにて候。夫に依つて某は、兼ねて天下國家にも望なく、又軍の勝負にも、さまで相構はず候。只差當つて、致すべき圖をよけ申さぬ樣にと相嗜み候。さ候て、死なば死ね、生きば生きよ、とても侍生れたらん者、誰か生きんとて引き候べき。差當りたる圖といひ、品々心得之あるべき儀なり。惡しく辨ふれば、無

理非道に落ち候。細には各御存の上、謙信は申すに及ばず。又甲州信玄などの守る處は、全く右にあらず。唯假にも、怪我なき樣に相嗜まれ候と見えて候。夫に隨ひて、信玄程軍をしめて仕れば、古今竟になき處に候。但し信玄、今迄軍に大なる誤、終になきは、人を能く見る將にて、侍大將・足輕大將、或は馬場美濃・眞田彈正・山形源四郎・春日彈正・內藤修理・小幡山城・甘利備前・飯富兵部・原美濃守、其他勝れて能き者共多くある故なり。夫も最も信玄の眼力が強き故なれば、軍に取つて自身下知し、手配をするにてはさのみなし。此者共を左右に置き、相談をして、弓箭をしめて、丈夫にせらるゝに依つて、あの如くならば、信玄一代は、何方に於ても、汚き負は、絕えてあるまじく候。信玄內の者、何れにても、人を能く遣ふと存ずる儀は、先年川中島にて、信玄が方便を、某推量するに、手に取る如くなるに依つて、此度は、是非とも手に手を取組み、雌雄を決せんと思ふ故、荒勝負心得たる黨の者を、馬廻に多く隨へ、信玄旗本の先手義信が陣に切つて入り、押立てたるに、侍の儀は沙汰に及ばず、雜人下部まで、敵合をなさずして、崩れたる者之なく候。尋常誰が下にても、一番鎗・二番鎗答へて、三番鎗までは稀なる儀、四番に及ぶは絕えてなし。是は侍十人が中、五人・六人は押立てられ、敵合

をなさずして、崩るゝ故なり。此の如くなるにより、何方に合ひても、甲州勢の大崩はあるまじき事なり。味方崩れざれば、敵崩るゝに依つて、信玄軍に怪我をせぬなり。氏康者共の中に、名高き侍大身なるは、餘多之ありと雖も、人數の取廻、拔羣に劣れり。但し氏康は、大度にして、せばゝしからず。士を撫でて人を和げ、大廻の遠慮を能くせらるゝに依つて、是又一廉の良將といふべし。謙信、是等の名將に、加賀・越中衆を加へ、相手に持ち、他の境は切取れども、尺地として他に取られざる事、不思議と申す內に、又一理あり。某は、貴坊存の前、粗略なる者にて、愼を知らず。其上愚案短才なれども、果報いみじき故にや、能き人を持ちたる故、隣國の爲めに犯されず。軍は一孤の業にあらず、人を持つを以て肝要とす。吾が侍、今是に候十四人を加へ、小身押込以上四十餘人の者は、恐らくは武田・北條・信長・家康を合せて、其中より選み出すとも、多くはあるまじくと存ずる。最も是は、只軍陣の一赴き、其餘の事は、淺き備をも辨へたる者共には候はず。氏康・信玄に、某劣りたる分、又家來の侍共、能き者多く候に依つて、引合ひて、今迄相對し候。此者共、謙信が眼の強きにて、仕立て候にあらず、某は氣儘なる者にて、氣に合ひたる者計り、手本に召出し候故、人の穿鑿大方に候。七人の者

共念を入れ、人を選めと仕候。如何様心に誠あれば、大外之なきものなるが、此の如く候と語り給ふ。其次に、直江山城、三樂に語つて曰、一年、謙信御自分と、氏康・信玄兩陣の備の前を押通り、山根の要害を攻め落し、又本の路を返り、利根川を渡り、前橋へ打入り申されける時、氏康公は、合戰を遂げらるべきものをと御後悔。又信玄公は、北條・武田兩旗にて、謙信一人に懸り、勝つて恥なりと仰せける由。小田原浪人竹邊といふ者、某へ語り候。是は吾等至らぬ故か、不穿鑿なる信玄の申分にて、存じ進らせ候。其仔細は、兩旗にて一敵と取組み給ふ事、殊に是のみにあらず、勝つて怪我ならば、始めより出陣あるまじき事に候。又多勢にて、小を以て怪我と仕らず候。多將・一將、大勢・小勢に依らず、善き惡しきは、只其振舞に候。左候へば、大勢にて陣を召し候近邊を、小勢の敵一度ならず押通り候取合を召されず、勝つて怪我なりと、おめ〳〵通られ候こそ、却つて怪我にては候へ。是こそ前に申す、差立てられたる軍を廻したるならん。大合戰勝負は、吾人心に相仕習はず、負け候ても、樣に依つて、強ちに恥辱とは申し難し。然れば氏康仰せの如く、取合を懸け給ひて、たとひ勝利あらずとも、只通したらんには、遙に增し申すべく候。但し是は、某等一遍の存樣にて候。東國などにて、

此事如何取沙汰候やらん。御物語り候へと申す。三樂聞きて、仰御尤に候。先づ以て勝つて怪我なりと、信玄申されたる事は、是は卽座の申のひろふさきといふ物にて候。信玄は、生得些と人をうつけになす挨拶の氣質にて、斯樣の類まゝ之あるげに候。穿鑿に及びては、理窟あるまじく候。實心ある者が、聞き候ひなば、比興の申樣とも存ずべき事なり。餘人にあらず、流石の信玄なれば、不出來なる答話なるべく候。さて兩將になりて、軍を率爾にせぬ事、是はさもあるべき事と、某は存じ候。其故は、先づ以て謙信公、大將と申し、士卒といひ、たとひ二三百たりとも、欺き申すべき相手にあらず。其上其勢堅く、一萬なれば、是れ五萬・六萬の敵に取合せても、之を以て、戰時は不足なき位に候。第一には金鐵の逞兵、死を一途に思ひ定め、一萬にて、戰はんを、誰やの人か、大事の敵と愼むまで候べき。氏康も信玄も、惡しく召されては、多分敗軍なるべし。是れ一つ勝ち給ふとも、四萬の人數、二萬は亡び候ひなん。然れば北條にてもあれ、又武田にてもあれ、取當る人、味方と相討にありてあらん處へ、今時の世の習、能き便宜を見て、殘る大將心を變じ、討果さん時、遁るゝ道あるまじき事を、遠慮申さるべき事、是れ二つ。かた〴〵に付、率爾にはせられぬ重立ちたる處に候と、太田三

樂、七組の衆に語る。

越後の科人の御仕置、一の重科には、刀・脇差を召取られ、一代身に帶びず。但侍以下は格別。二番死罪、三番追出、四番所領沒收、五番與力同心を放さる、六番籠居する等なり。長尾右衞門佐といふ侍大將、聊か無沙汰の行跡あるに依つて、謙信公大に咎め給ひ、與力同心を召放され、所領を取上げ、其上にて、兩腰を帶ばざる樣にと仰付けらるゝの處に、親類より、右衞門親庵原之介、御家に對し、戰忠之ありたる儀を申立てゝ、生害の詫言申上ぐるに依つて、一等を免許せられ、兩腰を給はり、切腹なり。前後此類多し。此次永祿十一年より同十二年中の一卷蟲ばみ、記錄を得ず。

永祿十三年正月より、氏康公、越後の止觀といふ僧と、小田原海岸寺の住持を申人として、謙信公と無事をなされ、御末子三郎殿を、越後へなりとも、亦前橋へなりとも、差越しなさるべく候通り、兩僧を以て、北條丹後・同伊豆方迄仰せられ、北條卽ち越後へ越えて、耆老方へ相談の上、謙信公へ申上げ、無事相濟み、謙信よりは、さしも氏康の御息を、此方へ申請け、人質にしては、然るべからずとありて、養子にせらるべき通り、事定まる。但し先づ前橋迄御越し、彼地に於て對面をなされ、兩家の侍、各會集慇懃の儀式あり。氏康は腦病によつて、氏政・源藏、前橋へ御越ある。此卷未だ全きを得ず、因つて詳に錄せず。

右三郎殿養子に付きて、上田の政景等家門悅ばず。此の政景と申すは、景勝公の實父、去々年以來、景勝、謙信養子になりたる故なり。景勝は、若年と雖も、謙信の氣を能く請取りたる人にて、三郎と交好し。謙信公・政景、內々無隨を以て、奇怪に思召し、殿中へ召出され、長尾小四郎に仰せて成敗なり。親屬家臣上下二百餘人、政景が宅にて戰ひ死す。討手は長尾四郎なり。

松隣夜話卷之中 大尾

松隣夜話　巻之下

永祿十三年三月、佐渡衆羽持・朝尾と、越後衆荒尾右馬助、庄内に於て相戰ひ、右馬助討死なり。謙信大に怒り給ひ、同月下旬、一萬三千にて、越後を御立ち、供奉には、北城伊豆守・上村甚右衛門・柴田掃部・甘糟近江・長尾小四郎・河田豊前・三寶寺織部・苦桃伊勢守等なり。羽持・朝尾五千計りにて、鴻巢迄出合ひ、相戰ふと雖も、悉く敗軍に及ぶ。朝尾因幡守侍忠死す。羽持は、志津ヶ嶽の要害へ、籠城仕りけるが、謙信公巡見まし〳〵、四方に柵を附け、獸路を切塞ぎ、鳥道を絶して、食攻になし、上村甚右衛門・甘糟近江・三寶寺織部・河田豊前等、六千餘兵にて之を守らせ、翌日越後へ歸陣あり。

同年五月、氏康より、松田尾張を越後へ差越され、去月、氏康、深澤へ働き、駒井右京を取詰め候處に、信玄、大軍を率し罷出で、對陣に及び候に依て、氏政一手にて、深澤の城、攻め取り申す儀、相叶はず候條、越後の御加勢を賴入り候。謙信公・氏政兩旗にて、武田と對陣なさるべきとは、とても仰あるまじと推量申候間、然るべき物頭兩三人、三郎殿に相副へられ、差越され下されたき由、七組の衆まで、松田之を相斷る。是に依つて謙信公、上田上野守・柴田掃部・上村甚右衛門三人を、三郎殿に附けられ、六千餘兵にて、前橋より、深澤口へ相働き、氏康は御出なく、氏政計り一萬五千を率し、西上野へ出て給ひ、信玄と對陣五六日なり。前橋衆と、折々迫合ありと雖も、小田原勢さして助けず。前橋衆利を失ひ、二日に、侍十七人まで討死す。上村甚右衛門大に怒り、松田尾張まで申しけるは、氏政公御馬を入れられ、武田衆を一同に、三郎殿一手にて請取り候に於ては、他に讓らず、一戰を仕るべく候。さなく候はゞ、人數を打入れ、罷歸るべしと頻に申す。松田、樣々申斷ると雖も、上村合點致さず、河村まで人數を打入るゝに依つて、氏政一手にて、對陣相叶はざれば、武州小山まで引取り給ふ。上村甚右衛門・柴田掃部相議して、河村に六日逗留し、武田仕懸け候はゞ、一軍して憤を散ぜんと、相待ちけれども、武田衆、早々歸陣あるに依り、上村、今見の村里を放火し、兩日相働き歸陣なり。此後、元龜二年より同三年、迄蟲失、年代以上三年。

天正元年四月、武田信玄死去の由、同年九月、あまさありの阿達山より、書付を以て註進す。

謙信公大に惜み給ひ、子期去りて、伯牙琴を留むる。吾天下に知音なしとありて、御涙を流し給ふ。卽ち荒尾一角・河田豐前を召され、信玄は天下の英勇なり、今日より三日の間、府中侍の家に計り、音樂を禁ずべし。農人・商家は、其沙汰に及ばず。是れ信玄を敬するにあらず、弓矢軍神への禮なり。侍所より觸渡す迄は、事餘りなれば、兩人より、緣々に物語にして、申聞かせ候へと、仰付けられ入らせ給ふ。

同年の夏より、信長次第に越後へ取入り、佐々が上に、又侍一人相副へ、一箇月に一度づつ定まつて、御氣色を伺ひ、安土へ註進仕候へと、申付け置かれ、一年に十度使者を獻じ、進物念を入れたる儀、甚だ丁寧なり。佐々能く勤め仕候條、兩陣の前を、遙々と奥へ御通り、要害を御攻なさるゝ儀、如何之あるべきや。城主は氏康奥筋の先手、老功の人數も、堅く千五百と勘辨仕候。前には城堅くして、雌雄未だ決せざるに、武田・北條兩旌にて押懸り候はゞ、甚だ危き御軍に候。此城、御手に入り候ても、遠國の事に候へば、乘捨になさるゝ外、其道なく候。無益の所に、腹心と等しき大功の侍を損じ給はん事、御手違と奉レ存候。直江殿・宇佐美殿、如何御計らひ候と申す。謙信、又氣色を損じ給ひ、諸老の意見をも伺ひ給はず、謙信が守る所、夫には

あらずとて、卽ち須田といふ者にて、利根川の兩將へ使を立て、輝虎、松山後詰の爲め、是迄罷出で候へども、早速落城の上は、力及ばず候、定めてたぎらぬ振舞と思召さるべき處、恥入り候へば、此儘にて罷歸らん事、兩御旌に對し、弓箭の無禮と存候に依つて、氏康公御祕藏の要害と承る山の根を、明日押破り候。夫れ無用と思召さるゝに於ては、兩旌にて、如何樣にも相妨げられ候べしとありて、利根川に品木の渡りに、舟橋を懸けさせ、押渡りて後、綱を切り、舟橋を流し、越後勢に、太田加はり合せて、其勢一萬餘騎、武田・北條陣の前、九町計りの傍を押通り、山の根の城へ寄せられける。三樂は、丙々今度の儀、他に讓らざる處と思はれければ、達つて先陣を乞ひ、我が輩二千の兵士、一人も生きてあらん程は、越後衆に、太刀をも拔かすべからずと、手の者を屬して下知せらる。謙信備を定め、先づ城攻の面々、西の手は太田三樂二千、南は柿崎和泉守・北條丹後、合せて二千六百詰を乞ひ、勝頼は已に越中へ越し、後詰せんと申されけれども、高坂彈正は、達つて意見を致し、謙信と取合を始められ候は、一年の內に、御當家滅亡に及ぶべしと申すに依つて、勝頼は出されず、首尾を合せんとて、板垣衆に、神保治部といふ越中侍を相副へ、三千餘の兵を、椎名へ附けらる。椎名手勢五千餘騎、此勢

を加へて、都合八千餘、越中八幡へ陣を取りて、越後勢を相待つ。謙信公、三月朔日、一萬二千にて、春日山を御立ある。供奉には、直江山城守・甘糟近江守・長尾小四郎・河田豐前・荒尾一角・上村甚右衞門・苦桃兼竹・竹股主計頭・色部河内・北條丹後守等なり。直江と甘糟は、三千餘兵上路を經て、越中八幡の後、西の庄といふ處より相働く。追手口一の先長尾小四郎・河田豐前、鴉川を渡し、戰を始め、椎名が副將軍神保治部と取合ひ追崩し、追討にする。椎名二陣を續けて、迫合はんとするを、上村・苦桃組にて横鎗を入れ、二の手も、椎名敗軍なり。謙信は、未だ川向に備を亂し給はず、五千餘騎にて、控へ給ふ。然る處に搦手の二手、八幡の後、西の庄より、瀨部の山の腰に押上るを見て、椎名衆・板垣衆多く討死す。椎名は剛強の士にて、切拂ひ、遁れて城へ入る。神保は所々に漂泊し、籠城も叶はず、深山幽谷に身を隱し、軍散じて後、在所へ歸る。斯くて謙信公、諸手に仰せ、雜人を出し、近鄕の在家を陷ち寄せ、繰楯を作り、弓・鐵炮を防ぎ、繰寄にして、兩日に攻め落さる。上下男女二千五百人餘、椎名を始めとして、切捨にせらる。其競にて、關東・眞田・一蓮寺等を追出し、越中半國を治め給ひ、所々御仕置仰付けられ、椎名へは、河田豐前守に、苦桃組を相副へ仕居ゑ給ひ、三月下旬に御馬入。

同年四月、佐々伊豆守登城致し、武田勝頼、遠州・尾州へ働き出でて、岩村を切取り、其後へ、秋山伯耆守を仕居ゑ、剩へ海道筋信長持の城々を攻め取り、甚だ逆意を募り候。信長は五畿内・中國に於て、所々に敵を持ち、透を得ず。依て家康等に申付け、相構はず候。さり乍ら唯今の樣にて、以來差置き候は、武田はびこり太り、六かしく候はんと存ずるに依つて、今年夏冬の間に備を廻し、三軍仕りて、鹽付け申すべく候。願くは謙信公、其時御旗を出され、信州を御隨へ、御支配あられ候へかし。去る程ならば、今度武田を絶し、累年の鬱憤を散じ、慰に仕らん事疑なく候。曾て勝頼事、自今以後輝虎を頼み無事を仕り、意見を請ひ然るべく候。輝虎は、勝頼崇敬仕らせて苦しからず。相手頼入ると申候は、若き勝頼をなぶりて、無沙汰の儀あるまじく候と、遺言仕候由。其詞をも、勝頼水になし、謙信公に對し、傍若無人の振舞、言語に絶し候。信玄死して後、勝頼若き者に、夢を見する事本意なしとて、御構之なき段、兼ねて承り候。一旦は如何にもさる御事にて候へども、彼方より、右の通り手遣ひ仕候上は、御遠慮に及ばぬ儀と奉り存候。當春は、越中へ御人數を懸けられ、椎名を御成敗候由、承り候に依て、此旨申上候。總じては勝頼、三郎殿と緣者なれば、遠慮仕候ては、叶はず候へども、最早勝頼持分